UNGA BOOK 2015

東京理科大学理工学部
建築学科設計作品集 2015

Design Work of the Department of Architecture
Faculty of Science and Technology
Tokyo University of Science

インタビュー
Interview

004 安全や防災から設計を考える
インタビュー:大宮喜文
聞き手:野秋政希
Interview: Yoshifumi Ohmiya
Interviewer: Masaki Noaki

講評審査会
Design Thesis Review Committee

008 2015年度修士設計講評審査会
2015 MArch Design Thesis Review Committee

020 2015年度卒業設計講評審査会
2015 BArch Design Thesis Review Committee

教員紹介

030 退任教員のメッセージ
032 教授・准教授・助教
1～3年生担当 非常勤講師
060 4年生　ユニットマスター
067 修士1年生　ユニットマスター
072 新任教員紹介

UNGA BOOK 2015
東京理科大学理工学部
建築学科設計作品集 2015
Design Work of the Department of Architecture
Faculty of Science and Technology
Tokyo University of Science

目次／Contents

設計作品
Design Work by Students

034 1年生 1st Year［空間デザインおよび演習 Ⅰ＆Ⅱ］
光の箱
Light Box
ピクニック
Picnic
あなたの部屋を空間化せよ
Transform Your Room into Space!

038 2年生 2nd Year［設計製図 Ⅰ＆Ⅱ］
上を向いて住もう
―自分とパートナーのための都市型住居とアトリエ―
Let's Live Looking Up – An Urban Residence for Yourself and Your Parter
表参道ライブラリー
Omotesando Library
旧岩崎邸と不忍池の美術館
Art Museum at Former Iwasaki Residence and Shinobazu Pond
プールを内包した集合住宅
Condominium with Insoor Pool

046 3年生 3rd Year［設計製図 Ⅲ＆Ⅳ］
アキバ・クリエイティブ・パーク
Akiba Creative Park
東京理科大学野田キャンパスの再生
Renewal of TUS Noda Campus
自分の通った小学校の現代化プロジェクト
Project to Modernize Your Own Grade School
SAWARA MIRAI
―歴史的町並みの再生と新たな価値の創造―
SAWARA MIRAI – Creating New Value by Renewing a Historical Streetscape

054 3年生 3rd Year［設計演習］
山名善之＋有岡三恵ユニット Yoshiyuki Yamana & Mie Arioka Unit
まちづくりをめざした上野駅公園口のデザイン
伊藤香織＋丹羽由佳理ユニット Kaori Ito & Yukari Niwa Unit
アーバンスケッチ―街路をじっくり観察しよう
柄沢祐輔 Yuusuke Karasawa Unit
ダイアグラム生成
川向正人+廣瀬大祐＋水野貴博ユニット
Masato Kawamukai, Daisuke Hirose & Takahiro Mizuno Unit
柏　ふるさと　ネットワークマッピング
～流山本町地区を対象として～
安原 幹 Motoki Yasuhara Unit
コンペティションに挑戦しよう
岩岡竜夫＋横尾 真ユニット Tatsuo Iwaoka + Shin Yokoo Unit
Learn About the Structure Design

060 4年生 4th Year［建築設計・都市設計 Ⅰ＆Ⅱ］
安原幹ユニット Motoki Yasuhara Unit
建築の中のパブリック・スペース
Public Space in Architecture
長田直之ユニット Naoyuki Nagata Unit
New Farm New Form
New Farm New Form
駒田剛司ユニット Takeshi Komada Unit
東京理科大学野田キャンパス@2060
TUS Faculty of Noda Campus @2060
伊藤香織ユニット Kaori Ito Unit
水辺で働く／水辺で暮らす
Working by the Water / Living by the Water
嶋田洋平ユニット Yohei Shimada Unit
縮退地域の「まち再生プロジェクト」
“Neighborhood Renewal Project” in a Shrinking District
西田司ユニット Ondesign Unit
2015年、日本
2015, Japan

067 修士1年生 Master's 1st Year［建築設計実習Ａ＆B］
末光弘和ユニット Hirokazu Suemitsu Unit
水のテリトリー
―環境シミュレーションを使った設計プロセス―
Water Territory – Design Process Using Environment Simulation–
近藤哲雄ユニット Tetsuo Kondo Unit
ぎりぎりの建築
At the Limits of Architecture
青木弘司ユニット Koji Aoki Unit
富浦寮―小学校の臨海宿泊施設―
Tomiura Dormitory – Seaside Lodging for Primary School
安原幹ユニット Motoki Yasuhara Unit
快適な建築
Delightful Architecture
岩岡竜夫ユニット Tatsuo Iwaoka Unit
＜外景＞としての都市住宅
―建築と街並みとの関係を再考する―
Urban Residence as Exterior
– Rethinking the Relation Between Architecture and Streetscape–
山代悟ユニット Satoru Yamashiro Unit
D.I.Y. urbanism:
都市と里山を結ぶ二地域居住を豊かにするための設え
D.I.Y. urbanism: Enriching a Dual Lifestyle Between City and *Satoyama*

研究室
Laboratories

080 川向正人研究室［建築史・建築論］
Kawamukai Lab., History and Theory of Architecture
岩岡竜夫研究室［建築計画・意匠・設計］
Iwaoka Lab., Architectural Planning and Design
山名善之研究室［建築意匠・建築史］
Yamana Lab., Architectural Design and History
安原幹研究室［建築設計］
Yasuhara Lab., Architectural Design
伊藤香織研究室［都市デザイン］
Ito Lab., Urban Planning
吉澤望研究室［建築光環境・照明環境］
Yoshizawa Lab., Building Enviromental Engineering
井上隆研究室［建築環境・設備］
Inoue Lab., Building Enviromental Engineering and Facilities
永野正行研究室［構造力学・地震工学］
Nagano Lab., Earthquake Engineering
北村春幸研究室［建築構造・材料］
Kitamura Lab., Structural Design
衣笠秀行研究室［建築構造］
Kinugasa Lab., Structural Engineering
大宮喜文研究室［建築防災・安全］
Ohmiya Lab., Building Safety Engineering
兼松学研究室［建築構造・材料］
Kanematsu Lab., Building Material Engineering

活動紹介
Activities

074 01 千葉の建築学科合同講評会Cリーグを野田で開催
高瀬結惟
02 ラーニング・アーキテクチャー 2015 | 建築、学びの冒険
関東11大学の建築設計教育の競演
齊藤誠司、森島英子

086 学生デザインコンペティション入賞者一覧
（2015.4-2016.3）

インタビュー

安全や防災から設計を考える

大宮喜文（教授） × 野秋政希（助教／聞き手）

おおみや・よしふみ Yoshifumi Ohmiya
1967年東京都生まれ／1996年東京理科大学大学院理工学研究科建築学専攻博士後期課程修了／1996〜1998年同大学助手／1998〜2003年建設省（現・国立研究開発法人）建築研究所研究員・主任研究員／2003〜2011年東京理科大学理工学部建築学科専任講師、助教授、准教授／2007年英国キングストン大学客員教授／2008年英国アルスター大学客員教授／2011年〜東京理科大学理工学部建築学科教授／研究分野：建築防災・安全／博士（工学）

のあき・まさき Masaki Noaki
1984年静岡県生まれ／2007年東京理科大学理工学部建築学科卒業／株式会社長谷工コーポレーション施工管理、東京理科大学総合研究機構火災科学研究センター技術者を経て、2013年東京理科大学大学院国際火災科学研究科博士後期課程に入学、2015年同課程修了／2015年東京理科大学理工学部建築学科助教／2016年より国立研究開発法人建築研究所研究員／博士(工学)

大宮喜文教授

野秋政希助教

デザインを裏付ける技術への興味

野秋　建築を志したきっかけを教えてください。

大宮　建築を意識し始めたのは、池袋の「サンシャイン60」（建設期間：1973 〜 1978年）が建ち上がる様子を自宅の窓から見ていた時期です。当時は、新宿にもまだ超高層ビルは少なく、池袋ではサンシャイン60だけが地平線からぽつんと突き出ている感じでした。今では当然のようなクレーンを使いながら建物が徐々に高くなっていく光景が強く印象に残っています。

小学校の卒業文集で将来の夢を書きました。その作文の中で、「目の前には、ダイヤモンド型のビルがある。屋上にはヘリコプターが離着陸できるスペースがあり、防災対策は万全だ。そんな建築物を設計する建築家になっている」というニュアンスのことを書いていました。「建築家」と「防災」がどうして結びついたのか不思議ですが、ヒューマンスケールを超えるサンシャインを見て、無意識に防災や避難という意識が芽生えていたのかもしれません。

野秋　先生はどのような大学生活を送られていましたか？

大宮　大学に入学した頃、日本社会はバブル経済の最中でした。建築も華やかで奇抜なデザインが多かったように思います。そのような作品を建築の雑誌で見て触発され、設計課題に取り入れている学生も多かったように思います。一方で私は、建築デザインを決定する上で、機能主義のような、何かしらの根拠のような裏付けを積み上げていくことが設計に必要ではないかと思っていました。

学部4年では、建築計画学の上原孝雄先生［＊1］の研究室に所属し、卒業論文のテーマは「群集流動シミュレーションモデルの改良」でした。シミュレーションモデルを使用し群集流動を計算するために、大学の大型コンピュータを使用しました。今はノートパソコンで計算することができますが、1990年頃はコンピュータどころか、ワープロすら使わずに卒業論文を手書きで提出する学生もいた時代でした。当時から将来発展するであろうCADやシミュレーション技術に興味をもって卒業研究を行なっていました。

ソフトからハードへ

野秋　先生は、卒業設計で賞をとられたそうですが、どのような設計を考えられたのですか？

大宮　まだ開発中だった「お台場」界隈に、オークション会場を建築するというものでした。当時、ウォーターフロントを活用する建築や都市の計画が盛んに議論されていました。1980年代の終わり頃、臨海副都心という構想があって、「東京世界都市博覧会」［＊2］をお台場で計画していました。何もないところに何をつくるのかという問題意識があったように思います。設計では、煙流動性の予測モデルBRI 2［＊3］を活用するなど、建物内の在館者の安全性なども考えようとしました。

野秋　大学院で防災の研究室に進んだ経緯をお話し頂けますか。

大宮　私が学部4年の時、上原先生が大学院修士課程の学生を募集しないことになりました。群集流動に関する研究を進めながら、他大学大学院への進学も考えましたが、理科大に避難安全の研究に携わられていた若松孝旺先生［＊4］がいらっしゃいました。群集流動は、火災時の在館者の群集避難とも関係しますので、大学院進学について若松先生に相談をしたところ、快く受け入れてくださいました。後から知りましたが、理工学部建築学科創設期に教授として教鞭をとられていた戸川喜久二先生は、日本の群集避難計画という学問領域を築かれた著名な研究者ですが、戸川先生が上原先生の研究に興味をもたれ、上原先生が理科大に来られたことを知り、不思議な縁を感じています。

修士課程では、建築基準法の避難安全基準の性能規定に関わる研究を行いました。とくに、米国、英国、日本の基準の比較研究を行ないました。シミュレーションとは異なりますが、どういうプロセスで避難規定が変遷したのかを明らかにしました。また、米国、英国の基準について原著の文献などを読むことで、英語の技術用語を覚えるよい機会になり、今も大変役立っています。

野秋　先生は、博士課程への進学はいつ頃から考えていらっしゃったのですか？

大宮　学部生の頃から、大企業で働きたいという欲求が他の人に比べて少なかったその反面、人とは違うことをしたいという思いは強かったように思います。避難安全に関わる研究者が少なかったこともあり、その防災領域を極めれば、人とは違うことができるのではないかと考えたことも、博士課程への進学を選んだ理由のひとつであったと思います。当時、就職を希望すればどの企業でも採用してもらえるような売り手市場でしたから、周囲の友人には「なぜ、博士課程に進学するのか？」と言われました。

博士課程に進学し、先生方から避難安全を検討するためには、火炎や煙といった火災外力について知識をつけておいたほうがよいとアドバイスを受けました。そこで、火災に関わる燃焼実験などのハードな研究を博士課程で行なうことになりました。

とくに、耐火建築物の空間で発生した火災を区画火災と呼びますが、その区画火災の性状をテーマとし、博士（工学）の学位を頂きました。

野秋　博士（工学）を取得後、どのような研究を進めてこられましたか？

大宮　博士課程修了後、理科大で助手をした後、建設省建築研究所に研究員として採用して頂きました。建築基準法が制定されてから約半世紀経過し、仕様規定から性能規定に移行しようとする時期でした。そのため、性能規定化に関わる研究が中心となりました。性能規定化の作業が落ち着いた頃から、BRI2の改良などに取り組むことになりました。その改良版であるBRI 2002というモデルが、今では建築物の防災設計では主流となり、建築基準法の避難安全検証のルートC［＊5］で利用されています。

2003年に理科大に戻り、火災性状の研究を中心に進めてきましたが、1年ほど前から群集流動のシミュレーションの研究に再び本格的に取り組み始めています。廊下に100人くらいの群集を流し、人の動きを最新のモニタリング技術で記録し、データを集め解析しています。

安全への意識を高める教育

野秋　学生への防災教育で心がけている点は何かありますか？

大宮　学部1年生の建築防災概論という授業で最初に「安全とは空気のようなもの」だと説明していま

＊1　上原孝雄名誉教授：UNGA BOOK 2013にインタビューを掲載。

＊2　1995年に青島幸男氏が東京都知事に就任し、都市博は中止となる。

＊3　1980年代、建設省（当時）建築研究所の田中哮義氏（京都大学名誉教授）によって日本で開発された。

＊4　若松孝旺名誉教授：1987 〜 2008年、理工学部建築学科および火災科学研究センター長として後進の指導に当たる。

＊5　建築基準法の改正で、従来の仕様規定（ルートA）以外に、建物の火災安全性を工学的に評価する新たな性能規定が追加された。告示で定められた方法で検証を行なうことをルートB、国土交通大臣の認定をうけることをルートCという。

可燃物の燃焼性状、室空間の火災拡大性状、煙流動性状などの把握を目的として、大小さまざまな火災実験を行なっている。

す。「普段、意識して呼吸はしないけれども、空気がなくなると苦しくなり、はじめて空気の必要性が分かる。安全もそれと同じです」と少し説教のようにも聞こえますが、それを意識してもらうことが非常に大事だと思っています。
技術者としての倫理観についても意識してもらうようしています。残念ながら建築物の耐震強度偽装や耐火性能偽装などがニュースになりました。実務では、工事期間や予算規模の課題があったとき、何を効率化するか、あるいは切り代にするかという的確な判断が必要になる。そういう状況で「安全」を忘れずに判断することができる度量をもってほしいと考えています。

野秋　私は2007年に理科大を卒業したのですが、学生時代の防災に特化した授業が印象的で、大宮研究室に入りました。実際に起こった火災事故など具体的な事例が特に印象的でしたが、事故事例は教育・研究とどのように関係すべきとお考えですか？

大宮　事故は起こらないことが望ましいのですが、事故事例から学ぶべきことがたくさんあります。火災事故の場合、時間軸でプロセスを解明し、その対策を時間軸のフェーズごとに整理し示すことが肝要であると考えています。特に留意すべきことは、複数の防災対策が断片化しないシステムを構築することです。有機的防災対策を実現するためには、事故事例から時間軸のフェーズごとの対策を繋ぎ合せていく火災シナリオを明確にすることが重要だと考えています。

安全性の「見える化」と日常性

野秋　先生は、学識経験者として、実施設計などの防災計画などを評価されていますが、最近の設計案件の傾向などはありますでしょうか？

大宮　今、設計実務では、防災に対する意識の希薄化が危惧されています。背景にあるのが、2000年の建築基準法の性能規定化により、高層化・大規模化した建築物などに対する防災計画書の作成に関する指導通達が廃止されたことに起因すると言われたりしています。
防災計画書には、個々の設計者の防災に対する考え方が明確に示されていました。
指導通達が廃止され、最近、設計者は近視眼的に個々の条文を一つずつチェックしクリアするだけで安全性の確認を済ませる傾向にあると聞きます。そもそも、個々の条文を有機的に結びつけ、より実効性があり信頼性の高い防災対策を計画することが設計者の役割であったはずであり、防災計画書の作成は設計者にそのような機会を与えていた訳です。
では、そのような状況に対し、設計者が自発的に防災のことを考える社会システムづくりができないかと考えています。その仕掛けとして、例えば、「安全性の“見える化”」が考えられます。環境であればCASBEE®［＊6］のような評価軸があります。その防火版ができないかと考えています。
また、空調の換気をそのまま排煙に併用したり、防火シャッター・防火扉を防犯と兼ねて建物の管理と結びつけるなど、日常的な設備に非常時の機能を付加する設計のオプションを、今以上に積極的に提案する必要があると考えています。

安全な空間と材料

野秋　防災の分野は、まだまだ研究課題が山積みだということは、研究者としてのやり甲斐を感じていますが、課題を整理しておくことも必要に思います。

大宮　その通りです。まず課題の整理が必要です。例えば、空間的には、地上と地下で分けることができます。超高層や大深度地下では、避難や消防活動が困難です。
そのような空間では、火災を一定の空間に閉じ込める区画化が最優先されるべきだと考えています。フェイルセーフの考え方で、空間を小割に区画しておけば、もし一つの区画が奏功しなくても次の区画で食い止めることができるはずです。また、区画は環境や構造と一体的に考えることも必要です。
構造部材の材料で見れば、鉄、コンクリート、木に分けることができます。近年、木材を大規模建築物に使用しようとする動きがあります。
2000年の性能規定化によって、避難安全検証法や耐火性能検証法［＊7］を用い、耐火建築物の安全性を性能的に検証する方法が示されましたが、そのような検証法を使用する上で、木造化、木質化した耐火建築物は、より慎重に建築物の細部に至るまで配慮した設計が必要になると思います。
官公庁では木材を建築物に使うことを推進していますし、設計者にとって木材を内装に使えることはメリットでしょうから、木造化、木質化された建築物の安全性を確保するために更に研究すべき課題も多い状況です。

野秋　現在、基本的な木材の燃焼性状と木材の難燃化技術などの研究を行なっています。
木材は外側が炭化することで内側を燃えにくくする効果があり、1時間加熱しても外側が数10ミリしか燃えません。そのような炭化層の厚さと断熱効果の関係を定量的に評価するための研究を行なっています。また、木材の燃焼を遅延させる研究も行なっています。耐火構造は「燃え止まり」が求められます。加熱後、加熱を止めてから木材断面のどこかで炭化が止まらないといけないのですが、樹種によっては炭化し続けてしまうものがあります。そういう場合、木材を燃えにくくする薬剤の注入やスプリンクラーなどによる散水の有効性などを実験的に確認しています。

大宮　耐震設計で想定する地震力のコントロールは困難ですが、火災安全設計の外力となる火源（かげん）は、設計者がコントロールできる可能性があります。これは火災安全設計の醍醐味の一つです。

野秋　私の研究の一つが、まさに火源の発熱速度の評価方法です。火災発生後、スプリンクラーを作動させれば、火源の燃え拡がる速度を遅くすることができ、発熱速度を低く抑えることができる可能性はありますが、定量的な評価方法が確立されていません。

大宮　もし、防災設備を考慮した設計が可能になれば、必ず設計の幅は広げられます。日本はまだ研究途上なので、研究成果が得られれば、今後、活用されることになると思います。

＊6　CASBEE®：建築環境総合評価システム。建築物や街区、都市などに関わる環境性能をさまざまな視点から総合的に評価するためのツール。
＊7　性能規定で、耐火建築物の主要構造部の耐火性能を検証するときに用いられる。建物内で発生する通常の火災に対して，建物内の全部材の耐火時間が火災継続時間を上回ればよいとされている。具体的な計算方法は建築基準法に示されている。

群集歩行流動実験。人の動きをモニタリングして解析する。避難計画などに役立つ。

エンジニアリングの知恵を生かす設計へ

野秋　これから学生に何を学んでほしいですか？

大宮　教育面では、五感を大事にすることを意識しています。材料防災実験という科目では、畳一畳くらいの部屋を模した模型箱を学生に作ってもらい、その内装材をグループごとに変え、箱の中の燃え拡がり方の違いを学生に観察してもらっています。模型ではありますが、内装材の違いにより燃え拡がり方の差異が顕著に分かります。実際に内装材を目で観て、手で触り、内装材の燃焼時に発生する爆裂音などを聴くなど、五感を総動員させてもらい、記憶に刷り込んでもらうようしています。とにかく、教科書に書かれていること以上のことを体験から学んでほしいと思います。

野秋　卒業後、学生にはどのようなことを考えてもらいたいですか？

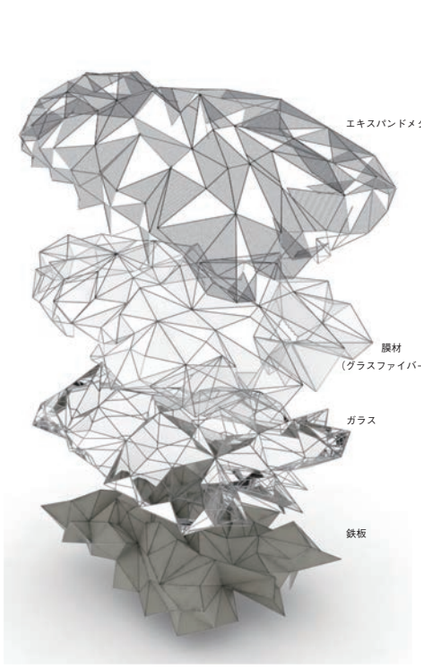
大宮　社会に出てから、自分をどのように表現するかを考えてほしいと思います。そのためにもコミュニケーション能力をしっかりつけてもらいたい。人の考えを理解して、自分の考えを伝える。
そしてグローバル化の中で、国際感覚を涵養し、その経験を活かしてほしいと思います。今、大宮研究室は中国、韓国、ベトナム、台湾などからの留学生がいるので、日本人学生には、積極的にお互いに異文化を持つ人と話し、視野を広げて欲しいと伝えています。
2017年に理工学部が創設50周年を迎えるのを機に他学科との協働研究のプロジェクトも正式に始まります。私は防災リスク管理コースのコース長として、数学科の教員と避難シミュレーションを構築したり、工業化学科や経営工学科の教員と一緒に難燃木材の研究を始めています。他にも、土木工学科、機械工学科、電気電子情報工学科とも協働していく予定です。
そこで得るエンジニアリングの知恵を、建築設計にどうやって生かすかを具現化していきたいですし、学生にも学際で受ける教育を糧に社会でフロントランナーとして活躍してもらいたいと考えています。

（2015年12月23日　2号館4階にて）

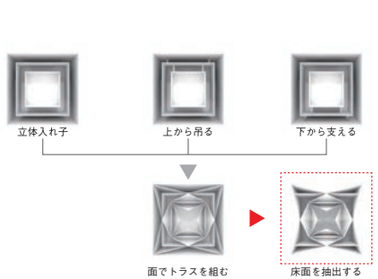
修士設計 優秀賞
MArch
Design Thesis
Award of
Excellence

村松佑樹
Yuki Muramatsu

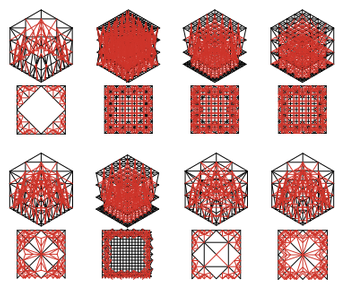
脱ぎ着する建築
undressing and dressing



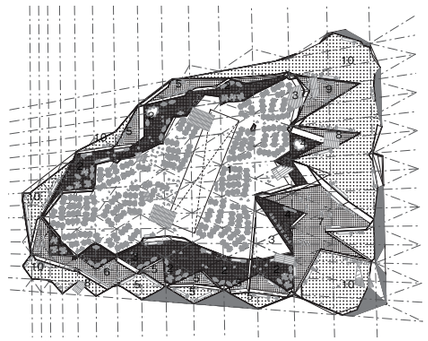
外殻アクソメ



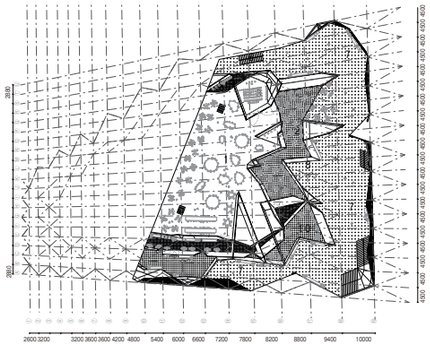
建築全体で入れ子を立体的に構成するため上から吊ったり、柱で支えるのではなく、
頂点を結ぶように面でトラスを組み、床面のみを抽出します。



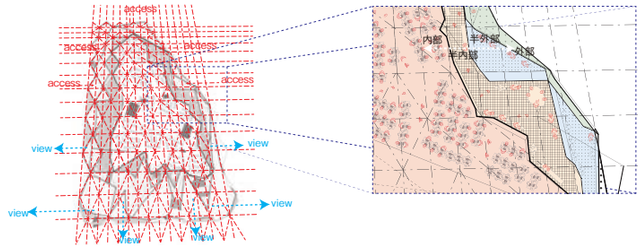
こうして生み出されたトラスによってどのような種類の空間が生み出されるかを
一つずつグッリドの幅、層を貫く枚数、点を結ぶ深さを変化させながら試行実験を行います。
面の角度やグリッドを検討し、
構造的合理性をたもちつつ大小様々な空間を生み出すためスラブを２層以上を貫き、
面が垂直に立たないことをルールとします。



２階平面

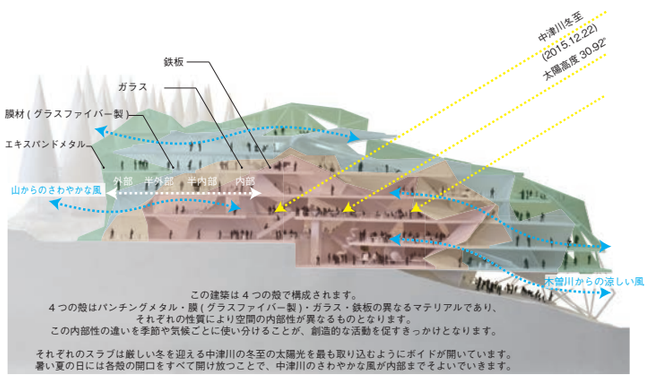


１階平面



周囲の環境に配慮しながらそれぞれのスラブごとにグリッドを組み、平面的にも空間が入れ子になるよう計画します。
川に近づくにつれグリッドが大きくなり、中津川の豊かな景色を望み、山に近づくにつれ、グリッドが小さくなり様々な場所から建築にアクセス可能となります。(左 : 平面図)

オフィスエリアを具体的にみてみると、建築の持つ４つの空間的特徴を、
季節や気候に合わせて空間を脱ぎ着しながら仕事が可能なことがわかります。(右 : 平面図)



この建築は４つの殻で構成されます。
４つの殻はパンチングメタル・膜 (グラスファイバー製)・ガラス・鉄板の異なるマテリアルであり、
それぞれの性質により空間の内部性が異なるものとなります。
この内部性の違いを季節や気候ごとに使い分けることが、創造的な活動を促すきっかけとなります。

それぞれのスラブは厳しい冬を迎える中津川の冬至の太陽光を最も取り込むようにボイドが開いています。
暑い夏の日には各殻の開口をすべて開け放つことで、中津川のさわやかな風が内部までそよいでいきます。

村松佑樹さん（中央）と建築家の末光さん（左）、伊藤教授（右）

てて検証するのが修士設計ではないか。そういう意味で村松案は建築のイメージがきちんと伝わり、論理的に説明ができている（山名）」「それぞれが違うテーマで建築と向き合っているので同じ土俵で採点するのは難しい。設定したテーマをどれだけ真面目に突き詰めて最後建築というかたちに近づけたのかという評価軸で第一段階で3名を選んだ。中でも村松案は、人のクリエイティビティを引き出す空間がどういうものかを考えたときに、あり得る回答（郡）」と実現性と完成度の高さが評価された。

「『脱ぎ着』を建築に置き換え、建築が動くのではなく質の異なる環境をつくり人が移動するという考え方は、発明といえる（安原）」など肯定的な意見も多かったが、「4層構造にすることで、冷暖房をなくするなど環境的なメリットが考慮されていないのが残念（岩岡）」「自然の中で過ごすオフィスは、すでにテンプレートになっている。よくできていると思うけれど、1等に選ぶかというと難しい（近藤）」と新しさを巡る評価軸が提示された。

*

その他、構造体の中の空間タイポロジーに焦点を当てた「**中空のスタディーズ**」（**片岡大輔**）は、「ダイナミックに全体をつくっていながら、構造的に成立している（鈴木）」「インフラ的スケールのタワー状の建物に魅力を感じる。長年かけてリノベーションしていく姿が見え、共感できる（山代）」と評価を受けた。

農村の風景にとけ込んだ原始的な構築物（柿屋や大根櫓）などを調査・分析し、それをふまえて奥多摩に現代的な農業生産のための居住施設を計画した「**農村の教え**」（**中村光**）は、「風景として魅力的（山代）」「農と構築物を対立させずに一体的に考えることで美しい風景をつくろうとしている（伊藤）」「強いイメージが伝わった（山名）」など描いた風景が共感を得た。

修士設計の取り組み方として「2年間のリサーチを経ている間に、本来の目的が明確でなくなる場合があるが、今年はテーマ設定とそのためにどのようなリサーチをしたのかが明確だった（伊藤）」「修士設計は、観察し、考察した結果を建築にしていくということが大事。そのためにリサーチが大切で、最終的には提案にどのような意味があるかをきちんと説明する必要がある（岩岡）」と締めくくった。

2015年度 卒業設計講評審査会

2015 BArch Design Thesis Review Committee

審査員

川向正人（教授）
岩岡竜夫（教授）
伊藤香織（教授）
安原幹（准教授）
山名善之（教授）

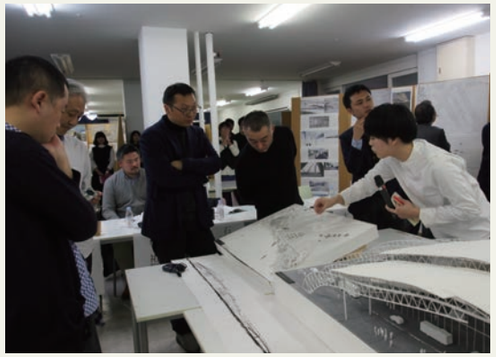
有岡三恵（Studio SETO）
石橋利彦（石橋徳川建築設計所）
大成優子（大成優子建築設計事務所）
金城 優（門 JO Disegno Studio）
久野靖広（アトリエ・アンド・アイ）
駒田剛司（駒田建築設計事務所）
提 祐輝（ユーキテクト）
高橋 堅（高橋堅建築設計事務所）
内藤将俊（内藤将俊建築設計事務所）
中畑昌之（htmn）
西田 司（オンデザインパートナーズ）
廣瀬大祐（アーキコンプレックス）
細矢 仁（細矢仁建築設計事務所）
宮下信顕（竹中工務店）
宮原 亮（エムアーキ）
村井達也（日建設計）
森 清敏（MDS）
山雄和真（GINGRICH）
横尾真（OUVI）

Jury

Masato Kawamukai (Professor)
Tatsuo Iwaoka (Professor)
Kaori Ito (Professor)
Motoki Yasuhara (Associate Professor)
Yoshiyuki Yamana (Professor)

Mie Arioka（Studio SETO）
Toshihiko Ishibashi（Ishibashi, Tokugawa & Associates Architects）
Yuko Onari (Yuko Onari Architect Office)
Masaru Kinji（Jo Design Studio）
Yasuhiro Kuno（Atelier and I ）
Takeshi Komada（Komada Architects Office）
Yuki Sage（U-quitecto）
Ken Takahashi（Ken Takahashi Architects）
Masatoshi Naito（Masatoshi Naito Architects）
Masayuki Nakahata（htmn）
Osamu Nishida (ON Design Partners)
Daisuke Hirose（Archicomplex）
Jin Hosoya（Jin Hosoya Architects Office）
Nobuaki Miyashita（Takenaka Corporation）
Akira Miyahara（M ARCHI）
Tatsuya Murai（NIKKEN SEKKEI）
Kiyotoshi Mori（MDS）
Kazumasa Yamao (GINGRICH)
Shin Yokoo（OUVI）

The BArch design thesis presentation and review was held on February 7, 2016, in the design and drafting room on the fourth floor of Building No. 2 at the Noda campus. There were 12 presentations of five minutes, followed by a five-minute question and answer session, for a total of 10 minutes each. The 24-member review committee, consisting of five professors and associate professors and 19 guest critics, then held a three-stage public review. The results of the final stage, in which each member cast one vote, were eight votes to the presentation by Tomomi Kimura, which won 1st Place, while 2nd Place went to the presentations by Kumpei Yamaguchi, which received seven votes, and that by Haruka Nakamura which received five votes. The presentations by Shunsuke Nakamura and Ryota Maruyama received two votes each.



質疑応答の風景。最優秀の木村友美さん（右）が審査員の質問に回答

3段階におよぶ審査中。最優秀の木村友美さん（右）と建築家の提さん（中央）、内藤さん（左）

2016年２月７日、野田キャンパス２号館４階設計製図室にて修士設計の発表と講評審査会が行なわれた。発表者は12名で、各自の持ち時間は5分間のプレゼンテーションと5分間の質疑応答の合計10分だった。教授、准教授5名とゲストクリティーク19名、合計24名による３段階の投票で審査は行われた。最終投票で各審査員が１票ずつ投じた結果、最優秀は８票を獲得した木村友美さん、優秀は７票を獲得した山口薫平さんと５票の中村遥さんが選ばれた。そのほか中村駿介さん、丸山良太さんも各2票を獲得した。

交通を内包する空間
「ハネダムービングウォークウェイ」（最優秀）

最優秀となった木村友美案は、東京モノレールと京急空港線が交差する天空橋駅から羽田空港国際線ターミナルまで約1.3kmの中にコンベンションセンター、展望台、客船ターミナル、地下駐車場、ホテルを計画し、それらをムービングウォークが繋ぐ案である。「本来は空港は結節点から拡散していく勢いのある場所であるから、交通を取り込んだ建築が自然なのではないか」という仮説を立てる。さらに、とにかく「大きな建築」が作りたかったという。

同案に対し、「国際化する空港の近辺にコンベンションセンターをつくるなど場所と機能の考え方が合理的。大規模施設を構想する力と野心ある学生を送り出せることを誇りに思う（廣瀬）」「1.3kmのムービングウォークは楽しめる（中畑・森）」など、全体構想が高く評価された。いっぽう「エスキスの過程で、構造デザインをもう少しスタディすべき（久野）」「構造デザインに対してより踏み込めば、説得力につながった（横尾）」と風圧力や大スパンに対する構造形式が現実的ではないことについての指摘があった。

また、「形状決定の理由がよくわからない（宮下）」「長手方向の空間、交通に対して、多様なスピードや視点の高さがあるはずだが、それと空間の関係性が伝わらない（伊藤）」「図面の中に速度が書かれていないのが残念（山名）」など、交通をコンセプトとした場合の空間表現の仕方、プレゼンテーションの仕方を問う声もあった。

さらに、提案した建築が感動できる空間なのかという多くの審査員の疑問に対して「空間に感動するということは考えていない。かたちは軌道の褶曲運動で決まり、個人の感情よりも人を集めることができる施設かどうかを重要視した」と木村さん。その是非について議論の余地は残すものの「大きなものがつくりたかった」と繰り返す彼女の熱意は審査員の共感につながった。

道後温泉本館の世界観をまちに拡大する
「道後湯神前 冠山湯浴郷」（優秀）

惜しくも1票差で優秀となった山口薫平案は、故郷松山の道後温泉をテーマとしている。明治時代の3階建て近代和風木造で重要文化財である本館へのリスペクトから、同様の形式を本館南側にある冠山へ展開し、温泉宿泊施設をつくる提案である。

「現在の道後温泉街の単調さに対して、近くにある地形(山）を意識することにより、まちの骨格に対する認識を変えている点、コミュニケーション空間としての風呂をよく表現している点（伊藤）」が評価を受けた。

「本館の世界観をつくりたかった」という宮崎駿のアニメを彷彿させる表現については、賛否があった。「本館と違うかたちで対峙させる方法があったのではないか（細矢）」「全体的によくできているが、ひとりの設計者のよるデザインが山全体を覆ってよいのか疑問が残る。温泉に敬意を払うからこそ、別の表現があったのではないか(森)」など直接的な引用を反復することへの疑義である。

それに対し、「現実とアトラクションの中間的な性格をもつところがよい。エイジングを考慮していることが感じられ、アトラクションが建築に変わっていくだろう（内藤）」「新しさが建築の形態にあるという考えがクラシカルなのではないか。山口案は、土と木のハイブリッドと捉えることもでき、歴史を踏まえて道後温泉と向き合う新しい取り組みではないか(西田)」「過去のものと似ているからよくないとは言えない（安原）」と、歴史

25頁に続く

卒業設計最優秀賞
BArch
Design Work
1st Prize

木村友美
Tomomi Kimura
ハネダムービングウォークウェイ

建築群

がわ

敷地を通る車道や鉄道路線などから生成した曲面を切り出し、建築化した形態。交通の島を象徴する「交通の建築」群を生み出す。

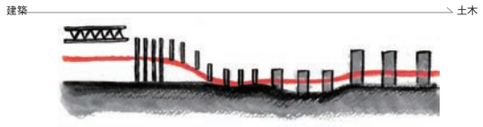
がわの見えは同じようであり、一体感を持った建築群となる。一方、扱いは天空橋駅から国際ターミナルまでムービングウォークウェイに沿って変化する。具体的にいうと、屋根や床、地面や車道、外構となる。つまり、建築→インフラ→インテリアと変化し、最初は建築とほぼ一体で建築に勝り、最終的には建築に負けていく。

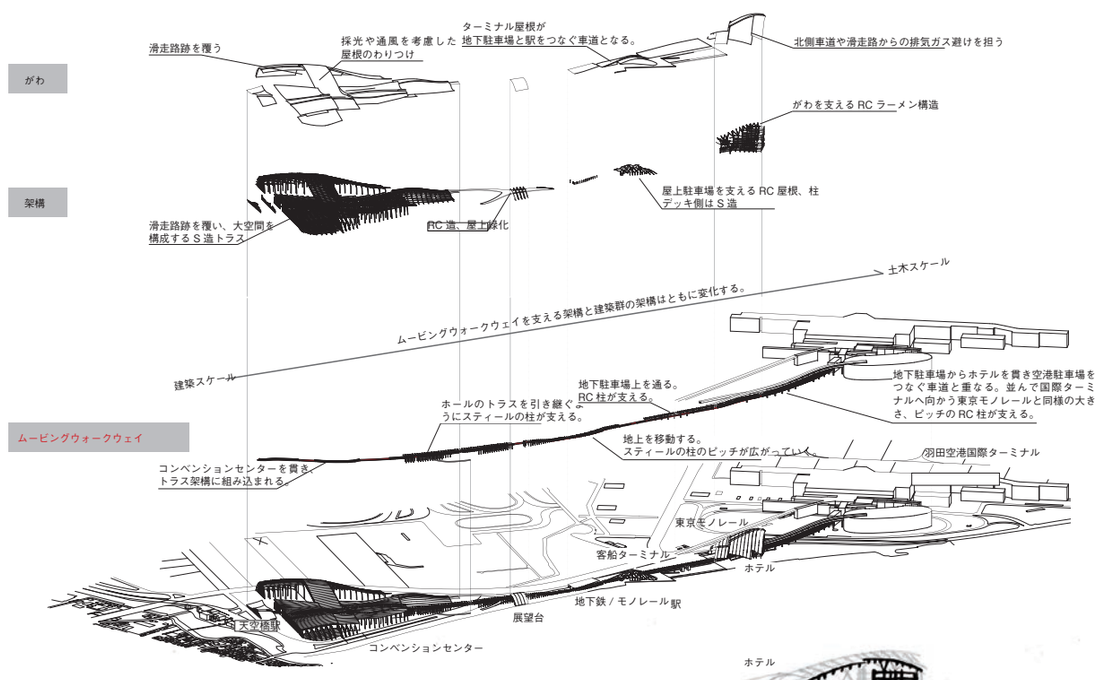
架構

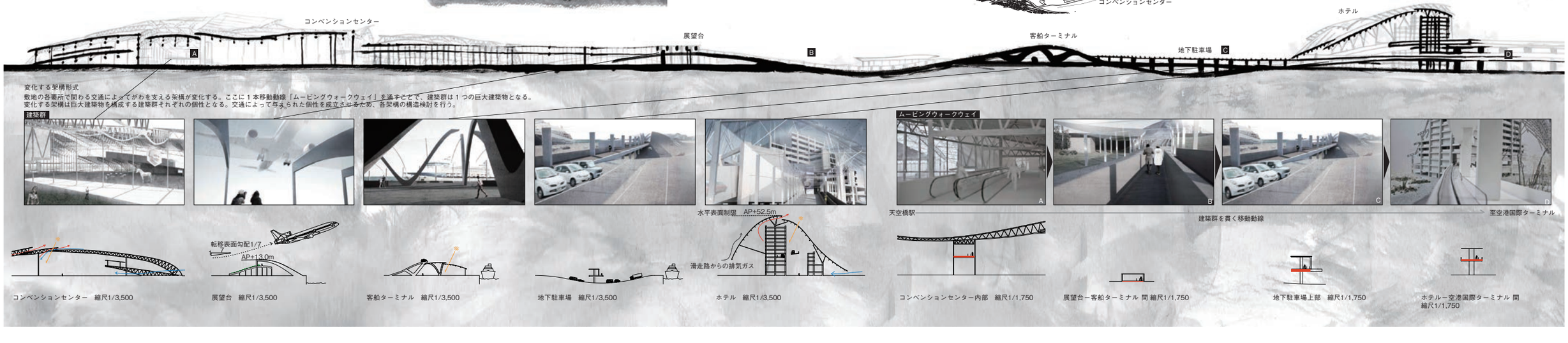
プログラムに応じて架構が変化していく。交通を優先し交通に対応して作られる建築は、人間出発で作られる建築とは異なるスケールを獲得し、大架構を必要とする。ここでいう交通とは、交通機関そのもの、滑走路や車道などの交通軌道、交通動線、交通による制限などを指す。

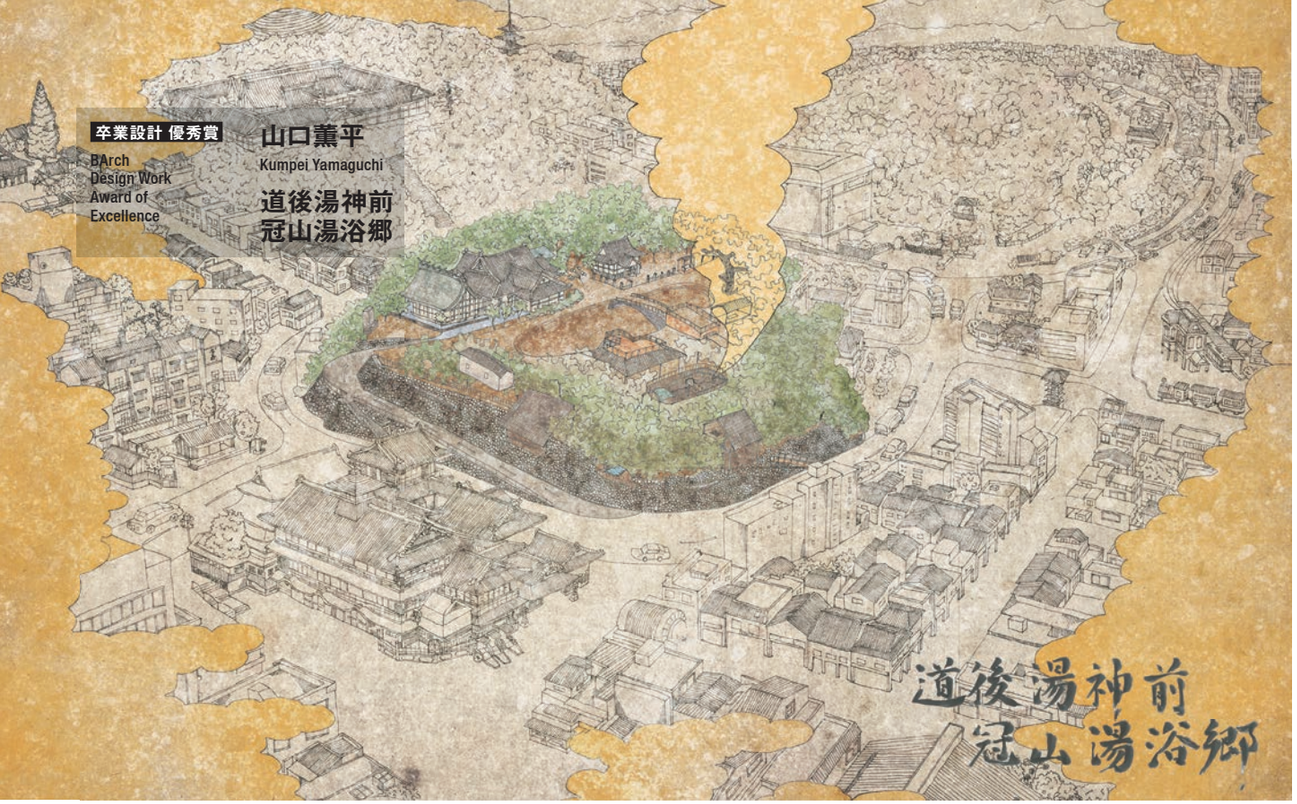
ムービングウォークウェイ

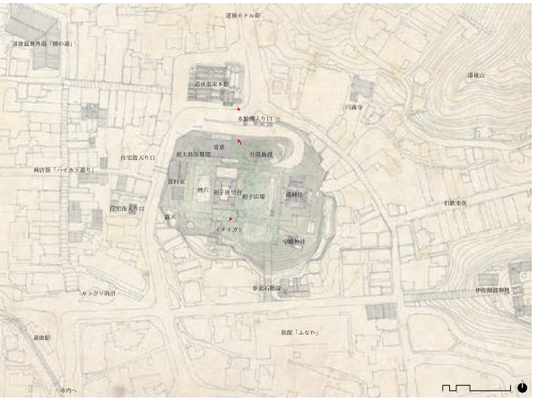
天空橋駅から国際ターミナルまで約 1.3km を建築群を通り抜けながら結ぶ 1 本の歩行動線。動く歩道を内包し、交通スケールで構成される建築群の中を貫く人間スケールの動線である。
ムービングウォークウェイを支える架構は建築群の架構の変化に同調して、建築から土木スケールへと変化する。







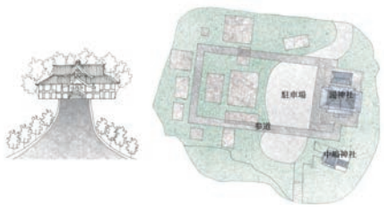




□ コンセプトダイアグラム

建築単体で場を形成するのではなく、この地形に依存し、地形も建築の依存するように形成する。そうすることで、この施設はこの地に根付く建築となり、この土地には建築とともに多様な環境が織り込まれる。

□ 平面ダイアグラム



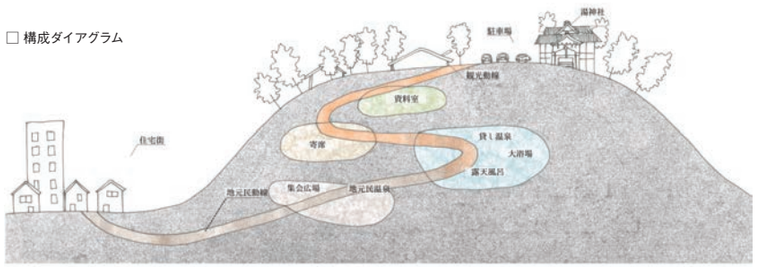
頂上は湯神社に対する門前町のような構成をとる。
参道を通し、それに対して建築が山から顔を出すような作り方をする。

□ 断面ダイアグラム

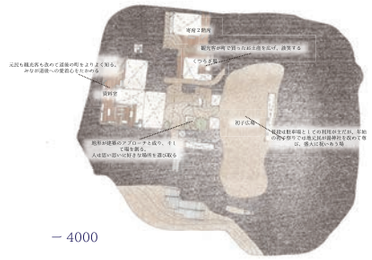
建築と山が等しく空間をつくり、
建築が山に根をはるようになる

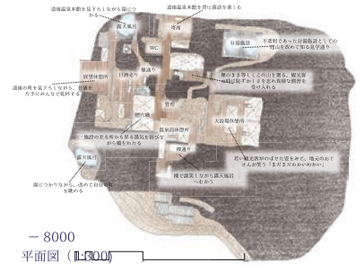
それらが山の中でつながり、
全体性を帯びたとき、ここは山か建築か

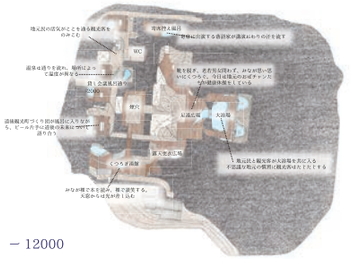
□ 構成ダイアグラム

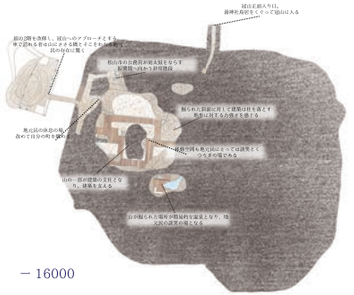


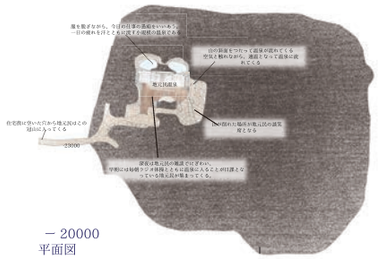
住宅街からは地元民が千佳から冠山に入り、頂上からは車で訪れた観光客が地上から冠山に入る。地元民は地元温泉や集会広場、観光客は寄席や資料室、それぞれがこの施設を廻りながら、中心階の温泉を介して両者が混ざりあうような構成をつくる











優秀の山口薫平さん（左）と建築家の久野さん（中央）、森さん（右）

的形態を引用しつつ、意味を付加しているという見方も多く、最終的な評価につながった。

コンバージョンの意味を建築的な操作で表現できるか

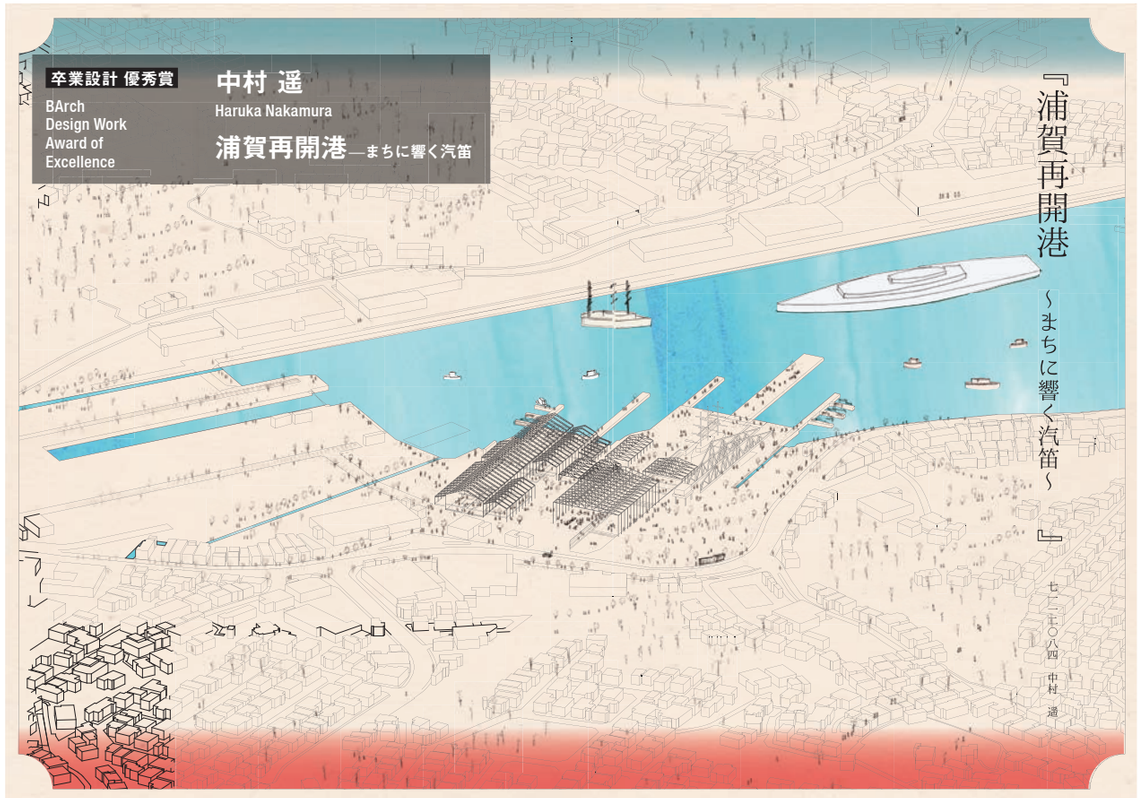
「浦賀再開港―まちに響く汽笛」（優秀）

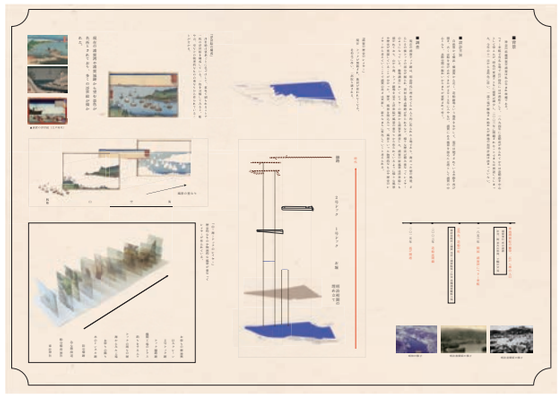
1894年に造船所が作られて以降、造船業が栄えた横須賀市浦賀だが、2003年に造船所は閉し、跡地利用が決まらぬまま、一部取り壊しも始まっている。その造船所のドックをコンバージョンし、マーケットや劇場、レストラン、カフェなど水際の賑わい施設をつくるというのが中村遥案である。地域の祭りや地形など周辺環境もリサーチを行い、時間や地形に対するレイヤーを建築でつくることを試みた。

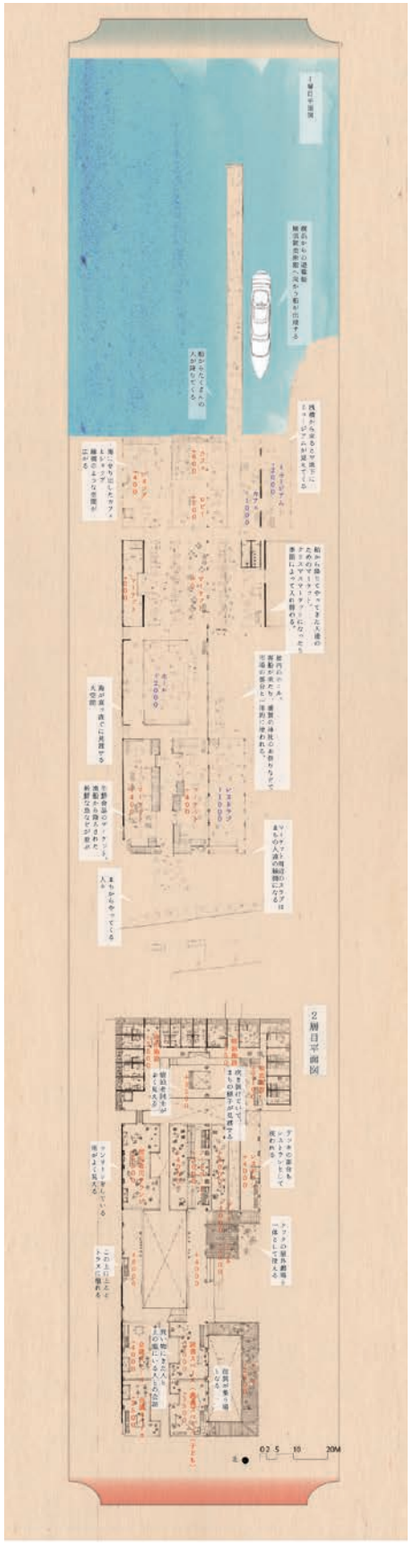
「歴史的なものを生かしつつ新しいものを挿入する難しいテーマだが、全体にバランスがよい（川向）」「海からドックヤードの軸に対して直交する軸を設け、その交点に新しいものを入れることでまちを変えていこうという発想がよい。模型だけでなく図面もきちんと描かれている（駒田）」と、着想、表現共に評価が高かった。しかし、「過去の状態に対する具体的な建築的操作と、それによって今後どうなるかを分かりやすく表現をすることが重要（岩岡）」「既存の骨格とコンバージョンで新しくつくる箇所との関係性がデザインされていないのではないか（大成）」など、建物を再生する具体的な方法に関する意見が頻出した。「既存と新しくつくるものの関係性は現代的な問い（西田）」であるがゆえに、道後温泉に対する山口案と共に議論の俎上に上がった。

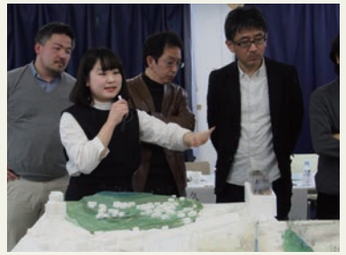
また、中村さんが浮世絵の着彩になぞらえた、〈レイヤー〉というコンセプトに関しては、空間的レイヤーと時間的レイヤーの概念が混淆していると複数の審査員から指摘があったが、「山から海への長辺方向の連続性を、桟橋や、ドッグの屋根を連続的に見せることで空間の〈レイヤー〉を表現している。ガラス屋根を一体的にかけることで、短辺方向の重なりも見られる（内藤）」、「モノそのものが記憶を喚起することを期待したい（川向）」と、時空間の層を空間の中に内包しているという見方もあった。「だれからも文句をいわれないように案を整理するよりも、弱みになりそうなことに取り込んでいく先に可能性があることもある（高橋）」と、建築デザインが果たす役割の根幹に触れる発言もあった。

27 頁に続く









優秀の中村遥さん（左から２人目）

テーマ設定、プレゼンテーション、講評会に求められること

上位3作品以外にもさまざまな視点から議論がなされた。

「**HOTEL SHINJUKU**」（**丸山良太**）は、ビジネスパーソン、飲食街の店員、ホームレスなど多様な人が日常を過ごす新宿に、「泊まる」という行為を通じて人が集まる施設を提案。高級ホテルやカプセルホテルなどさまざまなグレードのホテルを一棟に集約してするプログラムに対し、「行動がひとつのグレードに固定しない現代の生活に合っている。1棟に集約したときに何を起こすかが空間的な課題（安原）」など肯定的な意見が多数あった。「ネーミングにワクワクと期待が持てる案。低層のメガストラクチャが上部では小割になるデザインが面白い。(村井)」「テラスが囲む構成が周辺の超高層とは異なる表情をつくる(久野)」と評価された。

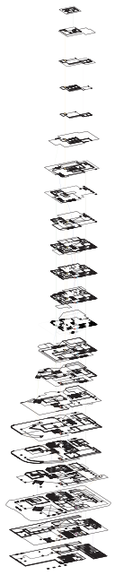
渋谷駅近くに計画された「**広場か建築か。**」（**中村駿介**）は、「ランドスケープの提案としてよく考えられている(金城)」「この場所にこの形態をつくるのは、発明のように思える(細矢)」「周囲が建て込んでいる中に小さな構造物を入れることで場が生き生きと変化した(大成)」など独特の造形が作り出す公共空間の可能性が語られた。

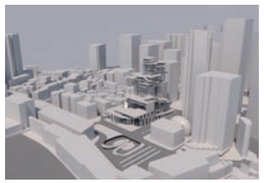
タワーマンションが乱立する川崎市武蔵小杉に、そのオルタナティブとして提案された「**路地に生きる**」（**三上陽平**）は、「超高層の集合住宅に隙間を挟んでいくという形式は可能性がある(駒田)」とされた。

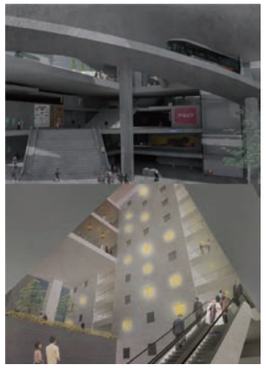
*

3段階で行う審査は例年、数時間に及ぶ議論が公開で行われる。2015年度は作品に関する議論に加え、審査基準や講評会のあり方についても意見が交わされた。「卒業制作としての建築的な問いかけが、いかなる意味を含んでいるかを審査会ではディスカッションしたい(西田)」「卒業設計は、問題解決型よりも、違和感を感じている事に対して向き合って欲しい(駒田)」、「採点基準は、発明的なものや発見的なものが作品にあるかどうかが重要（細矢）」など、今後の卒業設計・修士設計を考える上で、参考となるであろう発言も多くあった。３年生以下のより多くの学生諸氏が講評審査会に参加して、発想力やプレゼンテーションについて考えるきっかけとし、建築に関わる議論が活発化することが望まれる。

丸山良太 | Ryota Maruyama
HOTEL SHINJUKU

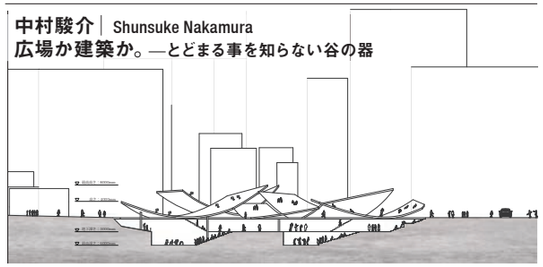


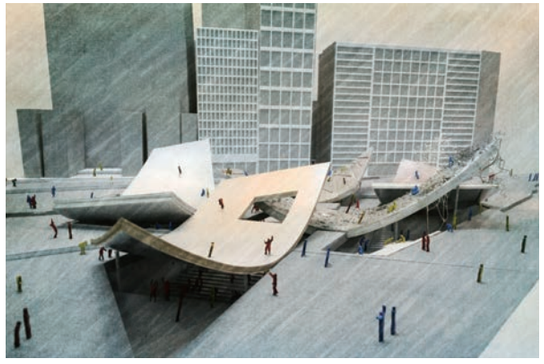




ビジネスパーソン、観光客、繁華街で働く人など新宿のまちの多様性をヒントに、「泊まる」をテーマとしてさまざまなグレードのホテルを1棟に集約する案

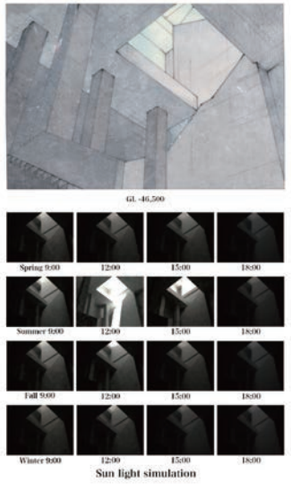
中村駿介 | Shunsuke Nakamura
広場か建築か。—とどまる事を知らない谷の器





渋谷・宇田川町、センター街の奥の三角地帯を敷地に、路上でのアクティビティの受け皿となる空間を提案。集うこと、場所性とは何かをテーマとしている

森 知史 | Satoshi Mori
歪みの可視化



麻布十番一橋公園にある古川地下調整池、発進立杭（縦穴）の中に土木的スケールの親水空間を提案

小室龍昭 | Tatsuaki Komuro
余白な建築—その余白は風景を吸い込む

台湾新北市、日本の統治時代につくられた高密度街区のリノベーション。ボイドを内包し、かつ裏側に開くアイデア

三上陽平 | Yohei Mikami
路地に生きる

神奈川県川崎市武蔵小杉駅周辺。林立するタワーマンションのオルタナティブとして生活がにじみ出すような路地空間を提案

酒井 諒 | Ryo Sakai
賑わい生み出す結節点

岐阜市北部に流れる長良川にかかる長良橋を、賑わいの場となるように橋の下などに親水空間を設けた。対岸同士をつなぐだけではない橋の在り方をテーマとしている

半澤 薫 | Kaoru Hanzawa
かわりゆく街に寄り添う

開発から約 25 年経過したさいたま市の住宅街の新陳代謝がテーマ。小中学校施設が、数十年後に住宅街でなくなることを展望し、コンバージョン可能な柱・梁構造の建築とした

曽我章悟 | Shogo Soga
バウンダリーから再考する郊外住宅

住宅の内部が外部環境から切り離されていることに問題意識をもち、過去に生活した海外の住宅（ブラハ、ロサンゼルス、ウィルムスロー）のバウンダリーを分析。日本の郊外住宅のバウンダリーとして再構成を行った

小野塚 直 | Nao Onozuka
屋根の下　流入し、共有する

葛飾区の工業地帯の一角に、ものづくりのプラットホームをつくろうと、町工場のはいった複合施設を提案

協働することの大切さ

川向正人（教授／2016 〜名誉教授）

2016年3月に卒業していく人々に向けて、その卒業アルバムに、2015-2016年の今を語るというテーマで拙文を書きました。その内容は、私自身が、長野県小布施町の「東京理科大学・小布施町まちづくり研究所」の所長、あるいはオフィス家具メーカーの岡村製作所が毎年7月に開催する「オカムラデザインスペースR」の企画実行委員長として、前者では10年間、後者では13年間にわたって体験した事柄を、史的展望のかたちで、大づかみに描いたものです。
その主旨をもう少し詳しく言えば、2015-2016年の今は、20世紀を支えたモダニズムの単純なモデル、たとえば、それぞれの〈個〉が頑張れば必ず良い結果に到達するという、「頑張る〈個〉の神話とか単純なモデル」が完全に崩壊して、多様な要素が生み出す〈場〉〈ワークショップ〉〈協働（コラボレーション）〉〈まちづくり〉などが現れ、社会に定着していく時代だということです。

この『UNGA BOOK』の文章で学生のみなさんに伝えたいのは、その中でも協働の大切さ、あるいは、トモダチというのとは違う協働者を意識的につくっていくことの大切さです。モダニズムの時代には、この大切さが強調されなかった。とくに建築は、必ず〈場〉があって、多様な要素を扱いながら同じ目標にむかって仕事をしますので、力を合わせて働く協働者が不可欠です。逆に、意識すれば、非常に良い協働者を何人もつくれるのが建築だということを強調しておきたい。
良い仕事をする建築家も研究者も、良い協働者をたくさん持っています。これは断言して良いと思いますが、昔と違って、外で近所の子供たちと一緒に遊んだり、隠れ家をつくったり、力を合わせて何かをなし遂げたりする機会が格段に少なくなった現代っ子は、大学に入ってくるまでに「良い協働者をつくる」体験を重ねていません。いつも独りで頑張ってきた。

気軽に会って話をして、なんとなく時間を共有して、じゃあねと言って別れる。空気みたいで、存在することをことさらに意識しないが、なくてはならないのがトモダチ。そういうトモダチとも、ここで大切さを強調する協働者は、根本的に違います。

たとえば、小布施のまちづくり研究所は、この10年間、「大学とまちとの協働のまちづくり」を基本理念に掲げて活動してきました。〈まちづくり〉全体が〈協働〉であって、〈協働〉なくして〈まちづくり〉はあり得ない。良いまちをつくるという目標は同じでも、大学は現状を調査し分析して問題点を究明し、その解決策を見つけ出そうと努めます。一方、行政や住民たちによるまちづくりは、多分に問題を見つけ出すのも解決策を見つけ出すのも直観的です。多くの場合、既にどこかで見出され何度か試されて評判の良い解決策が使い回されます。その結果、解決策と言われるものに既視感があり、それが二番煎じであることが少なくありません。ですが、行政や住民たちは直観的に問題の本質を捉えています。そして、良くても悪くても解決策を事業化して完成すれば、それを使い、運営管理するのは住民であり行政です。だから、住民、行政、大学、専門家たちが、できるだけ最初から最後まで〈協働〉するのが正しく、現代の〈まちづくり〉のあるべき姿だと言えます。

オカムラデザインスペースRもまた、建築・彫刻・絵画などの現代アートの世界で〈協働〉の可能性を問う企画です。ここでは、「建築家と建築以外の領域の表現者との協働」が基本テーマです。ニューオータニのガーデンコート3階にあるオカムラ・ショールームを会場とし、2003年から始めて2016年で第14回になります。第6回から12回までの記録が『Collaboration』（川向正人+オカムラデザインスペースR、彰国社、2015年）という本になって刊行され、伊東豊雄、妹島和世、青木淳、小嶋一浩などの建築家が、協働者に選んだアーティストと、〈協働〉について詳細に語り合っていますので、ぜひ読んでみてください。〈協働〉の地平が見えてくると思います。

川向先生ありがとうございました!

2016 年 2 月 9 日、卒業設計審査講評会の後、学生より花束贈呈（左）。退任のあいさつをする川向教授（右）

運河生活を振り返って

水野貴博（助教／2016 〜西日本工業大学准教授）

5年間の理科大助教の任期が終わり、この春から北九州の西日本工業大学の准教授に着任しました。研究室を始動するだけで目まぐるしく3カ月が経ってしまいましたが、近現代建築の名作が豊富で魚の美味しいこの地で、純朴な学生たちに囲まれて、新鮮な日々を過ごしています。理科大では3年生の設計製図を担当していたので、3年生になって初めて接する学生が多かったのですが、今は1、2年生の演習も担当していて、これから建築の勉強に取り組み始める期待で胸を膨らませている学生の初々しさに、初心を思い出させられることが多々あります。
理科大在任中、川向先生はじめ学科の先生方には大変お世話になりました。今の大学で担当している業務の中で、理科大で体験しておいてよかったと感じる場面が早速何度もありました。貴重な経験を積ませていただき、深く感謝しています。
理科大の学生の皆さんには、3月に盛大に送り出してもらいました。20年近く過ごした関東での生活を締めくくる、とても良い思い出になりました。今の自分のゼミの学生も可愛いものですが、廊下で気軽に呼び掛けてきた理科大生と違い、少し改まった態度になってしまうのが、ちょっと寂しい気もします。
振り返ってみると、理科大には優秀で努力家の学生が揃っていたと改めて感じます。先輩後輩の絆が強く、学生同士で互いを高め合うことが自然にできていて、積極的にまちに出て社会を動かしていこうとするパワーも持ち合わせています。あまり比べてはいけないと思いつつも、シャイで学年間の交流も少ない私の研究室の学生たちにも見習ってほしい部分で、こういう理科大の良い伝統がますます発展していくことを願っています。
九州に移って、こちらの地元の都市史研究も始め、まちづくりの策を練っているところです。皆さんもこれから社会に出て第一線で活躍することと思いますが、ひょっとして仕事で繋がる機会があるかもしれません。教員と学生という関係が、頼もしい仕事のパートナーになるときほど嬉しい瞬間はありません。皆さんといつかそんな日が来ることを願っています。

学生へのメッセージ

丹羽由佳理（助教／2016 〜森記念財団都市整備研究所）

私は2012年4月から5年間、助教として理工学部建築学科でお世話になりました。助教を退任することに伴い、「学生さんへメッセージをお願いします!」と言われましたので、私なりのメッセージをここに書きたいと思います。

1. 表現するパワーを大事に!
まず1つ目のメッセージは、東京理科大学理工学部建築学科の学生が持っている、表現するパワーを大事にしてください。皆さんは、考え抜くパワー、そして表現するパワーを持っています。個別エスキスや調査の段階では考えがまとまらず、モヤモヤしている学生が多いですが、最終講評会が近づいてくると、どこからかパワーが出てくるように感じていました。卒業設計でも、修士設計でも、最終的には仕上げられるパワーがあると思います。
2. コトバのキャッチボールができるように!
そして2つ目のメッセージは、コトバのキャッチボールができるようになりましょう！　例えば、講評会のときには非常勤講師の先生から、「なぜこのような形に行き着いたのか?」、「この状況をどう捉えているのですか?」という質問があったとき、その質問に対してノーリアクションの場合が多くあります。自分本位な発言ではなく、話している相手とコトバのキャッチボールを大事にしてください。相手の言葉に耳を傾けることで、自分の作品がもっと素晴らしいものになると思います。
3. クリエイティブな作業を楽しんで!
そして最後のメッセージは、クリエイティブな作業を十分楽しんでください。空間を考えること、未来を考えることは、とてもクリエイティブな作業です。私は「作業」というのは、研究活動、設計活動どちらにおいても大変重要な行為だと思っています。頭ではなく手によって感覚的な記憶が構築されていくからです。作業を通して様々な知識を吸収できたり、さまざまな人に出会うチャンスが訪れると思います。いまの作業を十分楽しんでくださいね。

学生からの花束と記念品のバスローブに身を包まれた丹羽助教（左）と水野助教（右）

教員紹介

教授・准教授・助教

川向正人（教授）
Masato Kawamukai

1950 年香川県生まれ／1974 年東京大学工学部建築学科卒業／1977 ～ 79 年オーストリア政府給費留学生 /1981 年東京大学大学院工学系研究科建築学博士課程単位取得満期退学／明治大学建築学科助手、東北工業大学建築学科助教授を経て、1993 年～東京理科大学理工学部建築学科助教授／2002 年～同教授、2016 年～同名誉教授／2005 年～東京理科大学・小布施町まちづくり研究所所長／研究分野：近現代建築史・建築論（住まい、有機体、メタボリズム、批判的地域主義）、まちづくり／博士（工学）

岩岡竜夫（教授）
Tatsuo Iwaoka

1960 年長崎県生まれ／1983 年武蔵野美術大学建築学科卒業／1985 年同大学院修了／1988 年パリ建築大学ベルヴィル校留学／1990 年東京工業大学大学院博士課程修了／1992 ～ 2003 年東海大学工学部建築学科講師、助教授、教授を歴任／2003 年株式会社アトリエ・アンド・アイ岩岡竜夫研究室設立／2011 年～東京理科大学理工学部建築学科教授／研究分野：都市計画・建築計画、建築史・意匠／博士（工学）

山名善之（教授）
Yoshiyuki Yamana

1966 年東京都生まれ／1990 年東京理科大学工学部第一部建築学科卒業／1990 ～ 94 年香山アトリエ／環境造形研究所／1995 年～ 1998 年パリ・ベルヴィル建築大学 dplg 課程／1997 年～ 2002 年パリ大学パンテオン・ソルボンヌ校博士課程／1998 年～ 2000 年文化庁在外派遣芸術家研修員（アンリ・シリアニ・アトリエ）／1999 年～ 2001 年国立ナント建築大学講師／2002 年～東京理科大学工学部第二部建築学科専任講師を経て同准教授／2014 年同大学理工学部建築学科准教授／2015 年～現職／研究分野：建築意匠・建築史／Architecte dplg, 博士（美術史）

伊藤香織（教授）
Kaori Ito

1971 年東京都生まれ／1994 年東京大学工学部建築学科卒業／2001 年同大学院工学系研究科建築学専攻博士課程修了／1999 ～ 2002 年日本学術振興会特別研究員／2002 ～ 05 年東京大学空間情報科学研究センター助手／2005 ～ 08 年東京理科大学理工学部建築学科専任講師／2008 ～ 15 年同准教授／2015 年～同教授／研究分野：都市デザイン、空間情報科学／博士（工学）

安原 幹（准教授）
Motoki Yasuhara

1972 年大阪府生まれ／1996 年東京大学工学部建築学科卒業／1998 年同大学院修士課程修了／1998 年～ 2007 年山本理顕設計工場／2008 年～日野雅司、栃澤麻利と SALHAUS 一級建築士事務所共同主宰／2011 年～東京理科大学理工学部建築学科准教授

丹羽由佳理（助教）
Yukari Niwa

1979 年愛知県生まれ／2002 年名古屋市立大学卒業／2004 年東京大学大学院修士課程修了／2007 年同大学院博士課程満期修了／2007 ～ 10 年 UDCK 柏の葉アーバンデザインセンターディレクター、早稲田大学助手を経て 2012 年～ 2015 年度東京理科大学理工学部建築学科助教／2016 年～森記念財団都市整備研究所／研究分野：都市計画・建築計画（都市デザイン）、博士（環境学）

水野貴博（助教）
Takahiro Mizuno

1974 年愛知県生まれ／1997 年東京大学工学部建築学科卒業／2001 ～ 2003 年ハンガリー政府給費留学生としてブダペスト工科経済大学留学／2007 年同大学院工学系研究科建築学専攻博士課程修了／2007 ～ 08 年同大学院客員研究員／2008 ～ 2012 年跡見学園女子大学非常勤講師／2011 ～ 2015 年度東京理科大学理工学部建築学科助教、慶應義塾大学非常勤講師／2016 年～西日本工業大学デザイン学部准教授／研究分野：建築史・都市史、博士（工学）

柄沢祐輔（助教）
Yuusuke Karasawa

1976 年東京都生まれ／1999 年慶應義塾大学環境情報学部卒業／2001 年堂大学院政策・メディア研究科建築・都市デザインコース修了／2002 ～ 2003 年文化庁派遣芸術家在外研修制度にてオランダの MVRDV 在籍／2004 ～ 05 年坂茂建築設計勤務／2006 年柄沢祐輔建築設計事務所設立／2012 年～東京理科大学理工学部建築学科助教

1年生担当（非常勤講師）

岩崎整人
Yoshihito Iwasaki

1973年岡山県生まれ／1996年東京大学工学部建築学科卒業／1998年同大学院工学系研究科建築学専攻修士課程修了／1998～2006年原広司＋アトリエ・ファイ建築研究所／2006年岩崎整人建築設計事務所設立／現在東京理科大学理工学部非常勤講師

大成優子
Yuko Onari

1974年東京都生まれ／1997年東京工業大学工学部建築学科卒業／1997 ～ 2002年妹島和世建築設計事務所／2002年大成優子建築設計事務所設立／2012年～ 14年芝浦工業大学デザイン工学部特任准教授、現在同非常勤講師／2010年～東京理科大学 理工学部非常勤講師（2016年～ 2年生も担当）

小池ひろの
Hirono Koike

1964年生まれ／1987年武蔵野美術造形学部建築学科卒業／1987～93年伊東豊雄建築設計事務所／1994年一級建築士事務所アトリエP設立／1997年手塚義明とケイティアーキテクチャー一級建築士事務所を共同で設立／東京理科大学理工学部非常勤講師

中畑昌之
Masayuki Nakahata

1979年静岡県生まれ／2004年東京理科大学理工学部建築学科卒業／2006年同大学院修士課程修了／2007年ロンドン大学バートレット校MArch／東京理科大学理工学部建築学科助教を経て2010年にhtmn共同設立／2013年～東京理科大学理工学部非常勤講師　（2年生も担当）

山中悠嗣
Yuji Yamanaka

1980年京都府生まれ／2003年京都府立大学環境デザイン学科住環境学専攻卒業／2006年東京工業大学大学院修了／2004年～ＧＥＮＥＴＯ建築設計事務所／2008年～東京理科大学理工学部非常勤講師

2年生担当（非常勤講師）

久野靖広
Yasuhiro Kuno

1972年茨城県生まれ／1996年東京工業大学工学部建築学科卒業／スイス連邦工科大学奨学生を経て東京工業大学大学院修士課程修了／2005年同大学院博士課程単位取得退学／2011年～アトリエ・アンド・アイ パートナー／2014年～東京理科大学理工学部非常勤講師

高橋 堅
Ken Takahashi

1969年東京都生まれ／1993年東京理科大学理工学部建築学科卒業／1995年同大学大学院修士課程修了／1996年コロンビア大学建築都市修景学部大学院修了（M.S.A.A.D.）／1997 ～ 2000年青木淳建築計画事務所／2000年高橋堅建築設計事務所設立／2002年～東京理科大学理工学部非常勤講師

塚田修大
Nobuhiro Tsukada

1969年千葉県生まれ／1993年東京理科大学理工学部建築学科卒業／1995年早稲田大学修士課程修了／1996年コロンビア大学建築都市修景学部大学院修了（M.S.A.A.D.）／1996 ～ 2000年伊藤豊雄建築設計事務所／2001年塚田修大建築設計事務所設立／2014年～東京理科大学理工学部非常勤講師

宮原 亮
Akira Miyahara

1963年長野県生まれ／1986年東京理科大学理工学部建築学科卒業／1986年松田平田坂本設計事務所（現松田平田設計）入社、同社総合設計室第二建築設計部長を経て2011年エムアーキ設立／2013年～東京理科大学工学部、2014年～同理工学部非常勤講師

細矢 仁
Jin Hosoya

1968年滋賀県生まれ／1991年東京理科大学工学部建築学科卒業／1995年同大学大学院修了／1995 ～ 2000年妹島和世建築設計事務所／2003年細矢仁建築設計事務所設立／2003年～東京理科大学工学部、2015年～同理工学部非常勤講師／2006年～武蔵野美術大学造形学部建築学科非常勤講師

村井達也
Tatsuya Murai

1964年岐阜県生まれ／1990年東京理科大学工学研究科建築学専攻修了／1990年株式会社日建設計入社現在に至る／2015年～東京理科大学理工学部非常勤講師

森清敏
Kiyotoshi Mori

1968年静岡県生まれ／1992年東京理科大学理工学部建築学科卒業／1994年同大学院修士課程修了／1994 ～ 2003年大成建設設計部／2003年～ MDS共同主宰／2009年～東京理科大学理工学部建築学科非常勤講師

3年生担当（非常勤講師）

石橋利彦
Toshihiko Ishibashi

1947年愛知県生まれ／1970年東京理科大学工学部建築学科卒業／1972年同大学院修士課程修了／1972 ～ 85年大成建設株式会社／1985年石橋徳川建築設計所設立／1991年～東京理科大学工学部非常勤講師、東京理科大学評議員／2002年～同大学理工学部非常勤講師

郡 裕美
Yumi Kori

1983年京都府立大学住居学科卒業／1983 ～ 86年一級建築士事務所共同制作／1987 ～ 90年アルテック建築研究所／1991年、遠藤敏也と一級建築士事務所スタジオ宙設立／1994年コロンビア大学建築都市修景学部大学院修了（M.S.A.A.D.）／1996 ～ 2004年コロンビア大学准助教授／2011年～東京理科大学理工学部非常勤講師

齋藤精一
Seiichi Saito

1975年神奈川県生まれ／1999年東京理科大学工学部建築学科卒業／2001年コロンビア大学建築都市修景学部大学院修了（M.S.A.A.D.）／2000年からNYで建築、プロダクトデザイン、映像、インタラクティブデザインなどさまざまな活動を開始／2006年ライゾマティクス設立／2005年～東京理科大学理工学部非常勤講師

提 祐輝
Yuki Sage

1974年埼玉県生まれ／1997年東京理科大学理工学部建築学科卒業／1999年同大学院修士課程修了／1999年坂茂建築設計／2000 ～ 07年エリア総合計画事務所／2008年一級建築士事務所ユーキテクト設立／2013年～ 2015年度東京理科大学理工学部非常勤講師

内藤将俊
Masatoshi Naito

1972年埼玉県生まれ／1996年東京理科大学理工学部建築学科卒業／1998年同大学院修士課程修了／1999年コロンビア大学建築都市修景学部大学院修了（M.S.A.A.D.）／2000～ 09年新居千秋都市建築設計／2009年内藤将俊建築設計事務所設立／2008年～ 2015年度東京理科大学理工学部非常勤講師

廣瀬大祐
Daisuke Hirose

1974年長崎県生まれ／2000年東京理科大学大学院修了／隈研吾都市建築事務所勤務後、2002年コロンビア大学建築都市修景学部大学院修了（M.S.A.A.D.）／2005年アーキコンプレックス設立／2007年～東京理科大学理工学部建築学科非常勤講師、2010年～同大学デジタル・スタジオ スタジオマスター／現在、明治大学大学院（I-AUD）講師、コロンビア大学GSAPP Studio X Tokyo ディレクター

宮下信頭
Nobuaki Miyashita

1972年長野県生まれ／1995年東京理科大学理工学部建築学科卒業／1997年同大学院修士課程修了／1997年竹中工務店入社／現在東京本店設計部第1部門副部長／2011年～東京理科大学理工学部建築学科非常勤講師

〈設計演習〉

有岡三恵
Mie Arioka

1967年香川県生まれ／1990年東京理科大学理工学部建築学科卒業／新建築社を経て2011年Studio SETO設立／2014 ～日本建築学会会誌編集委員／2014年～東京理科大学非常勤講師

横尾 真
Shin Yokoo

1975年山梨県生まれ／東海大学大学院工学研究科修士課程修了／池田昌弘建築研究所を経て、OUVI設立／2008年よりヨコヲノ森／2011年～東京理科大学非常勤講師

1
年生

空間デザイン及び演習 —— 課題1 Assignment 1

光の箱

Light Box

この課題では、単純で十分なボリュームのある箱を出発点として、そこに光を満たし、風を呼び込む事で空間をつくってもらう。箱にさまざまな操作を加えることにより、光の扱い方を習得。また内部空間を、一眼レフカメラを使って接写で撮影することを学んでもらう。視点を3つ設定し、魅力的な光の表現を求める。

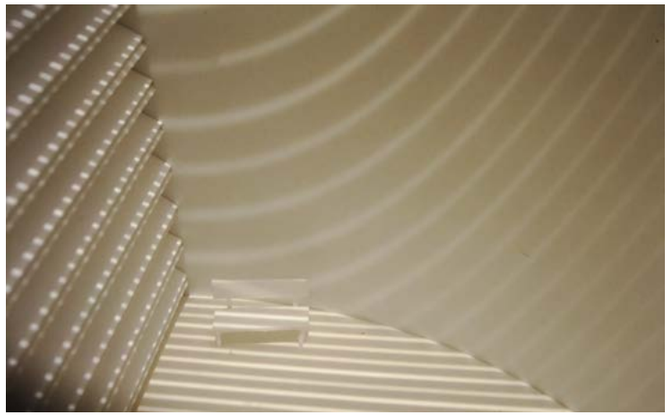
This assignment starts from a box, a simple but generous volume. The task is to create a space by filling the box with light and bringing in the air. Through various operations on the box, learn how to handle light. Learn how to make close–up photos by photographing the interior with a single–lens reflex camera. Establish three viewpoints and design an attractive expression of light.

担当教員 Supervisors

安原 幹 Motoki Yasuhara
岩崎整人 Yoshihito Iwasaki
小池ひろの Hirono Koike
山中悠嗣 Yuji Yamanaka
丹羽由佳理 Yukari Niwa

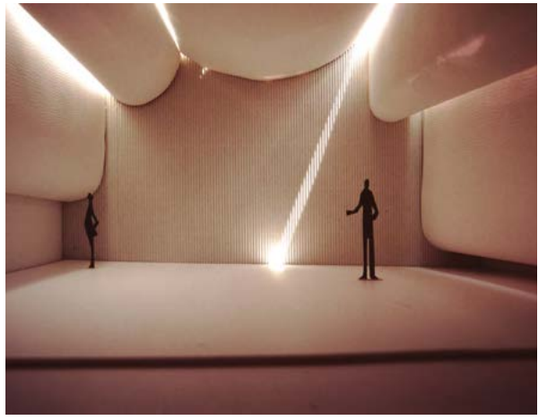
辻川 樹
Tatsuki Tsujikawa

坂本達哉
Tatsuya Sakamoto

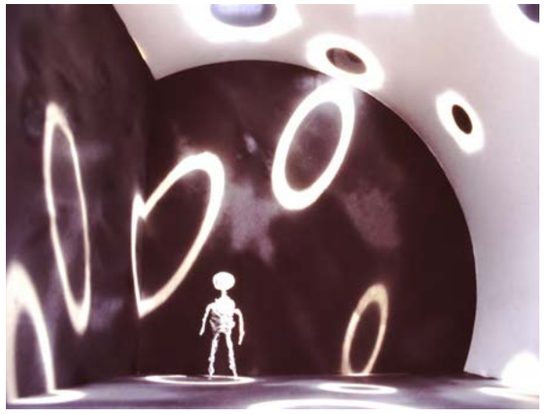


羽場航希
Kouki Haba

雨宮真史
Masafumi Amemiya



石原光太郎
Kotaro Ishihara



黒田健斗
Kento Kuroda

講評：

辻川樹案：上方にオーロラのような面が浮遊している空間である。光沢のある布を天井から吊るし、その上部にカラーフィルムをランダムに配置することで色彩豊かな美しい天井面をつくりだすという卓抜したアイディアを評価した。布の垂れ下がり具合が場所により異なっていて、床まで届きそうなところもあり、空間に多様な場をつくりだしている。また、アイディアに見合ったスケールの空間を実現するために、大きな模型をつくったことが功を奏していて、その労力も評価したい。（中畑）

坂本達哉案：取り入れられた直射光がつくる光の模様。壁の隙間から入る光が壁面につくる反射光の表情。この課題で用いられる代表的な2つの手法をシンプルに用いて、効果的な空間の表現を実現している作品である。面ごとに施されているデザインはそれぞれ単純なものだが、規則的に反復される山形の凸凹や傾斜した三角形の壁など施工の精度が高いために、抽象的で緊張感のある空間の雰囲気をつくり上げている。しっかりと3つのシーンがつくり出されていて、人ではなくベンチでスケール感を表現するなど、最終的な写真までよく考えれらている。（岩崎）

羽場航希案：いくつかの筒を挿入することで箱の中に内部と外部の関係をつくり出す。いわゆる「入れ子」の手法であるが、それにより筒の外側（外部）に落ちる光、筒の内側（内部）に落ちる光、さらに内部から外部に漏れ出す光、という複数の光が同時に存在する状態を捉えることに成功している。極めて建築的な回答。それぞれの筒の、開口の開け方をより意図的にデザインすれば、さらに奥行きのある空間をつくることができるだろう。（安原）

雨宮真史案：梁状に架け渡した曲面ボリュームの間から光が落ちてくる。柔らかくにじむようにやってくる光と、強く差し込む光のコントラストも美しい。表面の素材感もよく検討されており、J.ウツソンのバウスヴェア教会を思わせる。（安原）

石原光太郎案：ドーナツ状の開口をランダムに空け、光の輪がさまざまな形態で現れる空間をつくった。黒い床・壁と、白い曲面壁・天井との間でコントラストをつけることで、虚と実が入り交じったような状態の光を実現している。（安原）

黒田健斗案：早い段階で最終型を見据えた進め方がよかったと思う。最後の段階で、つくり込みの制度を見直し、完成度を上げられたこともよかった。空間の中での多角形の面への光の当たり具合の調整や黒い面を利用し、影と面が一体になったようなつくりも効果的だった。多角形の空間づくりを目指した学生が数名いた中で、最も形態とつくり込みのバランスが良かった。（山中）

1年生

空間デザイン及び演習 —— 課題2 Assignment 2

ピクニック

Picnic

ピクニックは社交の場である。集まる、座る、飲食する、歓談するといった行為を成立させるためには多面的なデザインを必要とする。またそれは社交空間であると同時に都市の中の公共空間でもある。自分たちの存在がその場の風景をどのように変え、道行く人びとからどのように見えるのかも含めてデザインしなくてはならない。この課題では、屋外で人と過ごす空間と時間をデザインし、実際につくって体験してもらう。

A picnic is a place for social interaction. It requires a multifaceted design to enable activities such as gathering, sitting, eating, drinking, and conversing. But while being a space for social interaction, it is also a public space in the midst of the city. The design must be conscious of how the presence of participants changes the landscape, of how it looks to passers–by. The assignment is to design a place to spend time with others outdoors, and to actually build and experience it.

担当教員 Supervisors

伊藤香織 Kaori Ito
安原 幹 Motoki Yasuhara
大成優子 Yuko Onari
小池ひろの Hirono Koike
中畑昌之 Masayuki Nakahata
丹羽由佳理 Yukari Niwa

1 班

淺井健矢 / 浅野 稜 / 河原井沙紀 / 篠原麻衣 / 高橋良輔 / 髙平友博 / 竹下功祐 / 田村真子 / 中村浩司 / 藤田有琳 / 宮下竜輔 / 松下耕太
Kenya Asai/ Ryo Asano/ Saki Kawarai/ Mai Shinohara/Ryosuke Takahashi/ Tomohiro Takahira/ Kousuke Takeshita/ Mako Tamura/ Koji Nakamura/ Yuri Fujita/ Ryusuke Miyashita/ Kota Matsushita

講評:昼間でなく夜空に着目したピクニック。場所の選び方とラグのサイズ感ツヤツヤ感が秀逸。少し奥まった大きな階段下は、適度な開放感をもちつつ光が制御された場で、サテンのラグで光がほんのり反射されている。青空の気配を感じつつ、足元に静かな夜空がひろがり、少し暗いからこそ居心地のよさを感じる魅力的な場だ。黄色い食材でまとめ、ペットボトルを望遠鏡に見立ててたのも効果的。(大成)

9 班

内田怜汰 / 小幡智実 / 栗原 就 / 小檜山寛人 / 七五三掛義和 / 永川美雪 / 那須瑞早 / 西川 慎 / 堀内僚介 / 松浦由樹 / 密田岳秀 / 山崎慧
Reita Uchida/ Tomomi Obata/ Shu Kurihara/ Hiroto Kohiyama/ Yoshikazu Shimekake/ Miyuki Nagakawa/ Mizusa Nasu/ Shin Nishikawa/ Ryosuke Horiuchi/ Yuki Matsuura/ Takehide Mitsuda/ Kei Yamazaki

10 班

大野向輝 / 金子修史 / 小宮克仁 / 小山朝子 / 櫻田晃市 / 千代航平 / 常泉佑太 / テイ・ケンエイ / 野邊 茜 / 平島裕大 / 望月綾乃 / 米倉裕修
Koki Ohno/ Shuji Kaneko/ Katsuhito Komiya/ Asako Koyama/ Koichi Sakurada/ Kohei Chiyo/ Yuta Tsuneizumi/ Kenei Tei/ Akane Nobe/ Yudai Hirashima/ Ayano Mochizuki/ Yusuke Yonekura

講評(10班):木の下に、樹木型と葉っぱ型のラグを展開した案。原寸スタディで決定した形状・寸法が絶妙で、自由な振る舞いを許容する、おおらかな居場所を実現した。食べ物や食器など細部にまで行き届いたデザインも、周辺環境とのなじみ方も秀逸。(安原)

講評(9班):階段を活かして具材を配し、好みのパフェを完成させる参加性に富んだ作品。広げた布は、思い切った広い幅と絶妙な配色バランスで、大らかで楽しい空間を創出。ファニチャや小物のデザインも行き届いている。(伊藤)

1年生

空間デザイン及び演習 —— 課題3 Assignment 3

あなたの部屋を空間化せよ

Transform your room into space!

1年生の「空間デザイン」の最後は、いよいよ実物（原寸大）への挑戦となる。自分の部屋を敷地と見立て、空間としてデザインすることを課題とする。〈空間化〉とは〈模様替え〉や〈改装〉とは違う。何をどうすれば今までの〈ただの部屋〉が〈空間〉と呼べるものになるのか、ということに1年間のトレーニングの成果をぶつけてもらいたい。

The final assignment for 1st–year “Spatial Design” is a life–size challenge. Think of your own room as a project site, and design it as a space. Transformation into a space is not the same as redecorating or remodeling. What needs to be done to transform what was “just a room” into a “space”? And how? The assignment is to apply the insights learned over the past year of training.

担当教員 Supervisors

伊藤香織 Kaori Ito
安原 幹 Motoki Yasuhara
大成優子 Yuko Onari
小池ひろの Hirono Koike
中畑昌之 Masayuki Nakahata
丹羽由佳理 Yukari Niwa

辻川 樹 | たまる

Tatsuki Tsujikawa

講評：前期課題「光の箱」において1/20スケールでつくった自らの作品（34頁参照）を、原寸で実現してみせた。十分にスタディされた完成度の高いアイデアを、素材や施工性を吟味してつくりあげたことが評価された。（安原）

七五三掛義和 | 額縁

Yoshikazu Shimekake

講評:「フレーミング」をテーマにした作品。フレームの重なりによって切り取られる複数の空間に、それぞれ固有のテクスチャがあしらわれ、その分節は、ある地点からのパースペクティブの中でのみ成立する。模型での丁寧なスタディが功を奏し、狙い通りの空間を実現した。狭い部屋の中に複雑な奥行きをつくり出した、知的な案である。(安原)

坂本達哉 | 生活の「あと」

Tatsuya Sakamoto

講評：室内の表面という表面を、建築・家具もろとも同一の素材(皺をつけた紙)で包み込んだ。徹底した手作業の結果、日常の痕跡を残したまま、極めて強度の高い空間をつくりだしている。（安原）

一谷和希 | 建具

Kazuki Ichiya

講評：狭小で間口も狭いワンルームを、色だけを使ってゾーン分けする案。最小限の手数で、青と赤の空間と、手つかずの日常空間の3つに分節した。日常と非日常は、いとも簡単に踏み越えられる状態で隣接しているが、その激しいコントラストゆえ狭い一室の中に大変な距離感が生まれている。写真からでさえ、高い強度が伝わって来る鮮烈な案である。（安原）

2年生

設計製図 Ⅰ ── 課題1 Assignment 1

上を向いて住もう――自分とパートナーのための都市型住居とアトリエ

Let's Live Looking Up – An Urban Residence for Yourself and Your Partner

東京郊外の住宅地に、10.8m×10.8m、高さ5.3mのコンクリート造の住宅を設計する。住人は、設計者とパートナーで、それぞれのアトリエを併設。道路に面する壁面以外には通風開口を設けず、吹き抜けを設けて、トップライトから採光する。道路との間には、幅2mの緑地を設け、まちとの関係をデザインする。（出題：阿部 勤／特別講師）

Design a concrete residence, 10.8 m × 10.8 m, height 5.3 m, on a site in the suburbs of Tokyo. The residents are you (the designer) and your partner, and each of you has an atelier. Except for the wall on the street, do not make any openings for ventilation. But do make an atrium with a toplight that admits natural light. Design the relationship with the town via a green space 2m wide between the residence and the street. (Tsutomu Abe/ Guest Critique)

担当教員 Supervisors

阿部 勤　Tsutomu Abe
山名善之　Yoshiyuki Yamana
中畑昌之　Masayuki Nakahata
宮原 亮　Akira Miyahara
村井達也　Tatsuya Murai
森 清敏　Kiyotoshi Mori
柄沢祐輔　Yuusuke Karasawa

所在地：東京郊外の造成地
敷地面積：160.8 m²

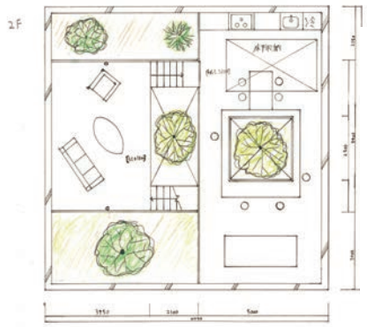
面積・高さ：10.8m×10.8m、
H＝5.3m、壁厚200mm

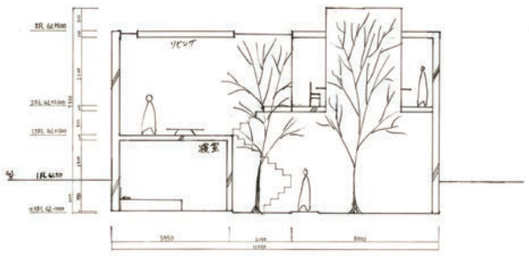
構造：RC造　壁構造とする
建ぺい率：60%　容積率：100%

総評 外形条件など厳格な課題設定であったこともあり、設計初学者である学生たちは、基礎となる採光のあり方や住まい方に集中することができたようだ。住宅を構想する際、間取りを考えることのみになりがちな学生の思考を警戒したゲスト出題者の建築家・阿部勤氏は、自然光が如何に生活を豊かにするかを念頭に断面エスキスを行うようにと力説された。また、キッチン、ダイニングなど、「食べること」が生活において重要であり、住まいを考えるうえでも設計の中心に据えたほうが良いのではと学生に問いかけた。結果、正方形平面ではあるが、豊かで多様な生活が見える住宅がいくつも提案された。課題後に学生らは阿部勤自邸に招待され豊かな住生活空間を体験する幸運にも恵まれた。（山名）

太田孝一郎｜ 木々とスキップフロアに上りゆるくしきられた家

Koichiro Ota





講評：太田さんは早い段階で最終形の型ができており、模型に引き込まれて空間の気持ち良さを体現できた案でした。空間構成は一見シンプルですが、パブリックからパンチングウォールを通しセミパブリックの中庭、階段を内包するスリット状の中庭を経て、プライベートな坪庭或いは光庭に至る空間変化が表現できており、そのシークエンス上に光を浴びる開放的なリビング、柔らかい光を感じる和室などを巧みに配置できている案です。（村井）

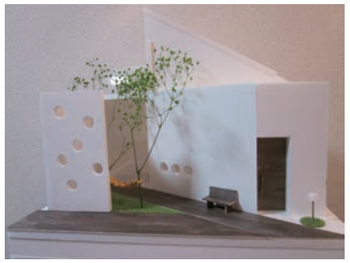
福永有花 ｜ 動くと景色が変わる家

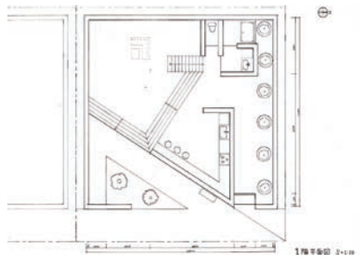
Yuka Fukunaga

周囲を取り囲む正方形の壁に対して一回り小さな正方形の中庭を45° 回転して配置し、中庭の周囲を巡るような動きがある内部空間となった。
動線そのものを生活空間としてスパイラル状に巻き上げたことで、壁を設けずとも各スペースの分節とつながりが実現できていて良い。
また入れ子の関係性から導かれた3次曲面の屋根の造形が、断面、平面とも高いレベルで呼応している点を評価した。
屋根・スラブを支える構造についての検討があるとさらによい。（中畑）

鈴木麻夕｜ ハンモックが似合う家

Mayu Suzuki

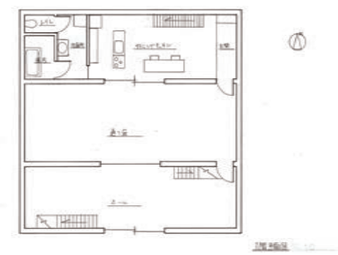




講評：「住宅街とのつながり」、「内部空間のつながり」が一体となり、豊かな空間を創っている。街との間に残された2mの部分も含めて、敷地全体をのびやかに上手に使っている。一見大胆に見える近隣への開き方も、斜めに入り込む壁によってプライバシーを守れるように計画されており、それぞれに空間的要素があるのが好ましい。
内部空間は、解放間のあるBoxの中に、オープンゾーンと小さなBoxを儲け、階段だけで立体的に連結し、上に向かって空間が開けている。ハンモックで本が読めるような、豊かな生活を想像して計画された優れた案である。（宮原）

伊藤昌志｜ 層の家

Masashi Ito



講評：前面の道路に対して平行するように、住宅の平面をレイヤーに分けて、街に近いところにアトリエを奥まったところにプライベートな居住空間を配置している。ややもすると図式的になりがちな提案であるが、内部にも開口を設けそれを連続させたり、中庭を効果的に配置するなど、レイヤーを破るように手前と奥をグラデーション状に繋げ、街との距離感が多様に感じられる住宅となった点が良いと思った。
街並に馴染んだヴォリュームとなるよう切妻屋根とし、周囲との関係を考慮している点も評価したい。（中畑）

2
年生

設計製図 Ⅰ ── 課題2 Assignment 2

表参道ライブラリー

Omotesando Library

表参道に地域の図書館を計画する。敷地は表参道の通りから一本内側に入ったところで、地下鉄出口から近く、比較的人通りの多い場所。地元の人の利用とともに、立地の利便さをいかして幅広い利用者層のための施設が望まれる。書架や閲覧席など建築物を構成する単位空間を理解し、単位空間の寸法とそのレイアウトの仕方を習得することを課題の目的とする。公共施設として、周辺環境への配慮や、2種類の異なる動線計画（来館者とサービス）が必要になることも理解してほしい。（出題：山名善之）

Design a library for the Omotesando area. The site is on a back street one block in from the main Omotesando boulevard. It is close to a subway exit and has relatively heavy foot traffic. The library will of course serve the immediate neighborhood, but it should also take advantage of the convenient location to welcome a wide range of users. The objective of this assignment is to understand, via the bookshelves and reading seats, how architecture is configured from unit spaces, and to learn how unit spaces are dimensioned and laid out. Further, as public architecture, the library must take the surrounding environment into consideration, and it will require two types of circulation – one for visitors and one for services. Understanding these two requirements is another objective of this assignment. (Yoshiyuki Yamana)

担当教員 Supervisors

山名善之　Yoshiyuki Yamana
中畑昌之　Masayuki Nakahata
宮原 亮　Akira Miyahara
村井達也　Tatsuya Murai
森 清敏　Kiyotoshi Mori
柄沢祐輔　Yuusuke Karasawa

所在地：東京都渋谷区神宮前
敷地面積：約1,190m²

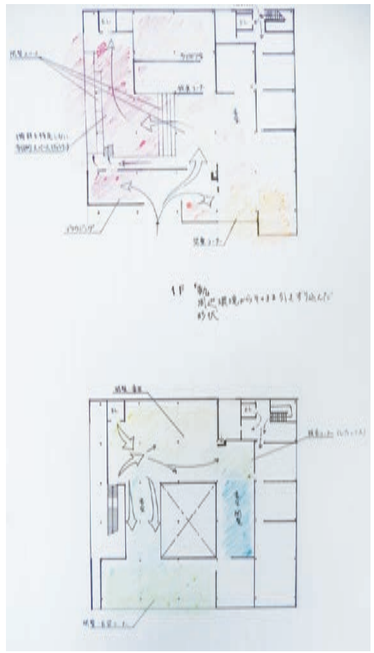
延床面積：1,500m²程度
鉄骨造で柱のスパン：5,500±300mm

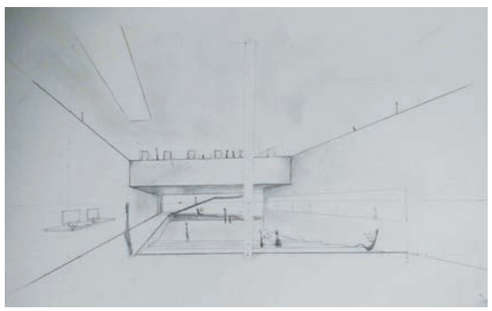
各階階高：3,750mm
各階天井高：3,000mm

総評 一点透視図法と陰影により空間をイメージし、シークエンスとゾーニングを組み立てながら30m×30mの平面図を描き進める方法論的な定番課題。2年前期課題としては難易度の高い課題ではあるが多くの学生が果敢に取り組んだ。合理的思考が求められ、厳格な設計条件が示されるこの課題は、指導する側の能力も試されるような側面も持つ。ほとんどの設計スタジオにおいて、概ねスケジュールに従って、学生たちは短期間に課題の求める高い習熟レベルまで達成することができた。画一的な要素を求め自由度の低い課題設定にも見えるが、求められる建築言語がシンプルであるがゆえに習得する点も絞られ、その点から建築基礎造形における訓練的性格の強い設計課題とも言える。（山名）

大澤真生子 ｜都市に融ける図書館

Makiko Ohsawa

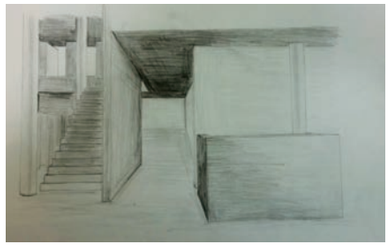


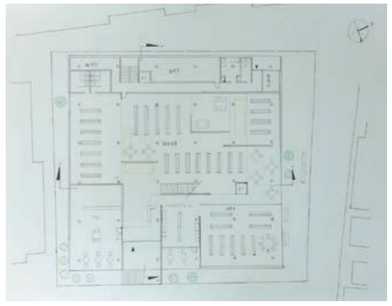


講評：都市に溶ける図書館というコンセプトのもと、低層部が敷地周辺と一体となった、開かれた図書館となっている。利用者を、外部、エントランスから内部へと誘い回遊させるための動線的な要素(スロープやステップによるレベル差の処理、2階へ向かう階段の位置・勾配)が上手く配置されていて、歩き回ってみたくなるような空間構成となっている。そして、それらの要素が単に機能的であるだけでなく、多様なシーンを生み出している点を評価した。（中畑）

福永有花 ｜壁と光から生まれる空間

Yuka Fukunaga

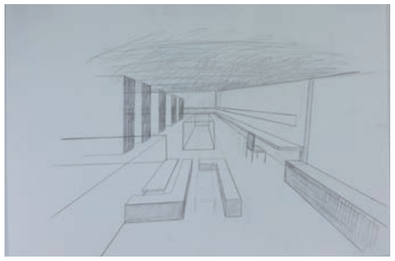


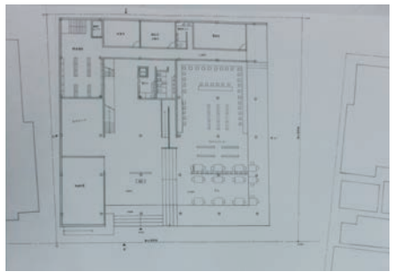


講評：エントランスから奥へ奥へと誘うように壁と吹き抜けを巧みに配置することで変化に富んだ空間をつくりあげている。吹き抜け沿いの大壁に沿った階段や、半島のように突き出したところに設けた閲覧スペースなど、見せ場もあちらこちらに散りばめられ、それらが人の動きに緩急を与えている。また、大きな開口部を効果的な場所のみに設けることで、光の強弱のある魅力的な空間をつくっている。（森）

山名美月｜flow

Mizuki Yamana





講評：「流動空間を創る」という、課題の本質に正面から挑んだ作品。近年敷地の北側に表参道の商業エリアが広がりつつあることから、敷地のコーナーへの人の流れのスピードが上がっている。その流れを引き込む「見せる図書館」を、視線が抜けた先の緑へ誘うように展開。敷地の高低差を上手に利用し、空間のヒエラルキーを創りつつ、見せる図書館の舞台を演出。エントランス上部の大開口が、滞留する空間を示し、流れを呼ぶ効果を生んでいる。２階の図書室は吹き抜けを中心に、図書館を訪れる人に多様な場所を与え、また2つの吹き抜けが期待感とflowを生み出している。（宮原）

2
年生

設計製図 Ⅱ ── 課題3 Assignment 3

旧岩崎邸と不忍池の美術館

Art Museum at Former Iwasaki Residence and Shinobazu Pond

上野恩師公園の東側に位置する不忍池周辺もしくは隣接する旧岩崎邸庭園内に美術館を提案する。現在建っている旧岩崎邸の建物と、敷地南端の2つの大きなマンションを残し、その他のすべての建物を撤去した上で、新たに延床面積3,000 ～ 4,500㎡の美術館を計画する。美術館の内容は、デザインミュージアム、特定の作家、現代美術館など、各自で設定すること。敷地は不忍池周辺を選んでもよい。（出題:山名善之）

Propose an art museum near Shinobazu Pond on the east side of Ueno Park, or on the neighboring grounds of the Former Iwasaki Residence and Gardens (Kyu–Iwasaki–tei Gardens). The buildings of the Former Iwasaki Residence are to be left unchanged, along with the two large apartment buildings at the south end of the site. But clear all other buildings, and plan an art museum with 3,000 to 4,500 m² of floor space. It is up to you to decide the type of museum – a design museum, a museum devoted to specific artist, a museum of modern art, or something else. (Yoshiyuki Yamana)

担当教員 Supervisors

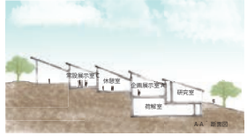
山名善之　Yoshiyuki Yamana
久野靖広　Yasuhiro Kuno
高橋 堅　Ken Takahashi
塚田修大　Nobuhiro Tsukada
細矢 仁　Jin Hosoya
森 清敏　Kiyotoshi Mori
柄沢祐輔　Yuusuke Karasawa

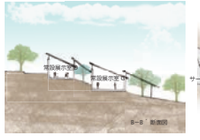
所在地:東京都台東区池之端1丁目
用途地域:第二種住居地域
地域地区:準防火地域
敷地面積:約16,900㎡
延床面積:3,000 ～ 4,000㎡程度

総評 重要文化財である旧岩崎邸や敷地の高低差、或いは不忍池といった水面を持つ周辺環境から、設計の取っ掛かりになり得る要素を各自が見つけ出し、それらを出発点としながら設計を進めるという課題であった。また美術館施設としての動線計画、ゾーニング計画、展示計画、搬入計画、事務エリア計画等を念頭に設計エスキスが進められた。これらの建築計画的要素のみでなく、設計の手がかりが建築的要素に結び付きやすい具体的な着想を得た学生が良い結果をのこせたようだ。また、設計の規模が少し大きくなったこともあって、スケールを敷地全体レベルから部屋レベルまで段階ごとに把握することが早くできた学生が、より設計を容易に進めることができたようだ。（山名）

太田孝一郎 ｜ながれるような、くものような

Koichiro Ota

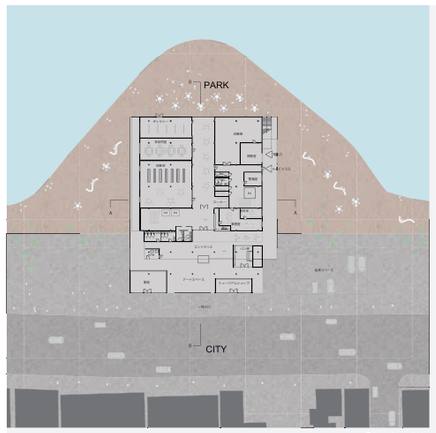




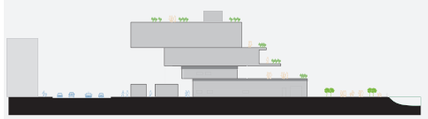
講評:高低差のある旧岩崎邸の敷地のエッジの部分に美術館を計画することを決めた太田案は、敷地の等高線を建築造形の根拠のひとつとしている。展示室を基本単位として、部屋の連鎖による流れるような空間を連続的に体験できる美術館を設計することを試み、それが成功している。エスキスを通して部屋である単位空間を、内側からも外側からも認識できるようにすることに関心をよせ、それが屋根の造形に繋がった。台地の縁に全体屋根シルエットが美しい風景を創出している。（山名）

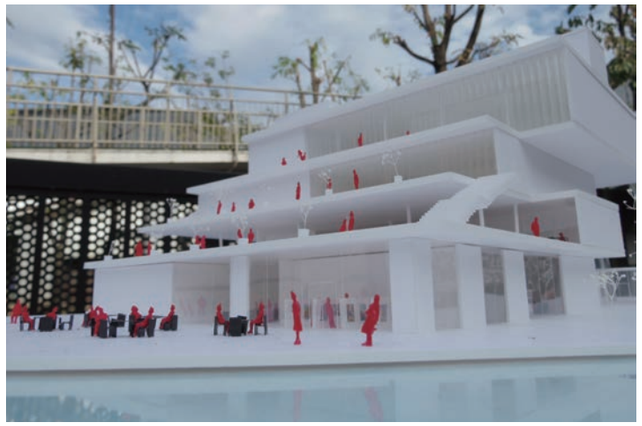
伊藤昌志｜ 都市↔美術館↔公園

Masashi Ito



Plan level 1

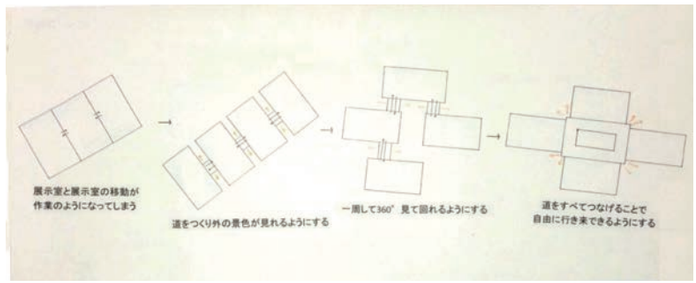


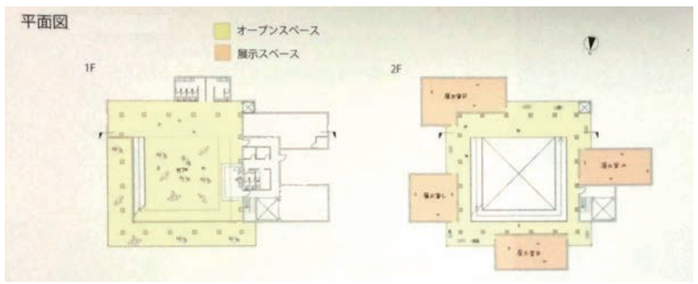


講評：一方を上野の街、もう一方を不忍の池に面した境界上にある建築である。この場合、建築の境界としての強度設定が重要で、強い境界は両者を分離しそれぞれを単独の存在としてしまうし、弱い境界は両者の存在自体を無意味化してしまう場合がある。伊藤案ではその境界の強度設定が秀逸。池と街を区別しながら混ぜ合わせるような両義的な境界としている。前後にズレを伴って積層された特徴的な断面によって、下層では街が内部に入り込んだ吹き抜け空間となり、上層では不忍の池を臨む立体的なデッキテラスとなる。街から不忍の池へと連続的かつ多様に変化する空間を背景に美術館を巡る体験は大変魅力的だと思い評価した。（塚田）

都築 澪 ｜ 中心をもつ美術館

Mio Tsuzuki





講評:不忍池の真ん中に敷地を設定し、周囲を360°見渡せるようにした美術館。ロの字型のオープンスペースに複数の展示スペースが取り付くという構成となっており、各階はスロープによって緩やかに繋がる。搬出入の動線も考えられ、空間的にはバランスの良い作品であるが、オープンスペースで行われるプログラムが不明瞭であることなどは再考の余地有り。（高橋）

2年生

設計製図 Ⅱ —— 課題4 Assignment 4

プールを内包した集合住宅

Condominium with Indoor Pool

敷地は柏の駅から徒歩15分ほどの場所に位置し、現在は立体駐車場が建てられている国道に面している1,350㎡の面積の敷地である。この敷地に延床面積2,500㎡の、1階に屋内プールを内包した集合住宅を設計して欲しい。高さは最大4層で、全体は15戸の住戸が収まるものとする。（出題：山名善之）

The site is about 15 minutes by foot from Kashiwa Station, area 1,350 m², facing a highway, currently occupied by a mechanical parking structure. For this site, design a condominium with a total floor space of 2,500 m² and an indoor pool on the ground floor. The building should be 4 stories high and have a total of 15 apartments. (Yoshiyuki Yamana)

担当教員 Supervisors

山名善之　Yoshiyuki Yamana
久野靖広　Yasuhiro Kuno
高橋 堅　Ken Takahashi
塚田修大　Nobuhiro Tsukada
細矢 仁　Jin Hosoya
森 清敏　Kiyotoshi Mori
柄沢祐輔　Yuusuke Karasawa

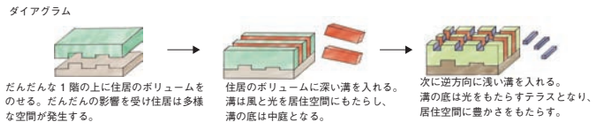
所在地：千葉県柏市中央1丁目
用途地域：近隣商業地域
敷地面積：約1,350㎡
建ぺい率：80%
容積率：200%

総評 四層の建物全体に15住戸を配し、それによってプールを内包させ、且つプールに自然光を取り入れることを要求条件とした。各住戸を設計すると共に、要素にあたる各住戸とプールが組み合わさった建物全体を構想するといった、「全体と要素」の建築構成を念頭にエスキスを進めなくてはならない課題であった。そして、ラーメン構造を基本とした全体の構造計画と、集合住宅の住人のための動線、プール利用者の動線の確保も併せて考えることが求められた。2年生最後の設計課題として、このような構造計画、動線計画に加えて、構成レベルまでを踏まえた設計能力が求められ、そのレベルに達している学生が良い結果を得ることができた。（山名）

太田孝一郎 ｜ だんだんとみぞ

Koichiro Ota

ダイアグラム



だんだんな１階の上に住居のボリュームをのせる。だんだんの影響を受け住居は多様な空間が発生する。

住居のボリュームに深い溝を入れる。溝は風と光を居住空間にもたらし、溝の底は中庭となる。

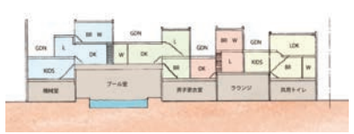
次に逆方向に浅い溝を入れる。溝の底は光をもたらすテラスとなり、居住空間に豊かさをもたらす。

プランA

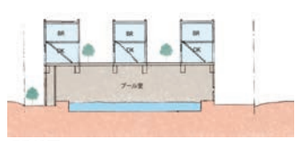
プランB

プランC

プランD



長手断面

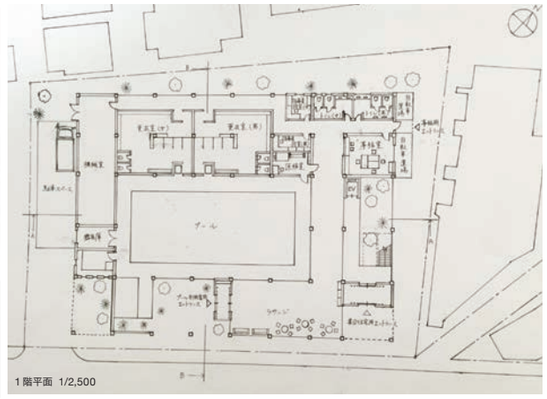


短手断面

講評：プールと集合住宅のそれぞれにとって良い関係が生まれるように、その両者の組み合わせ方のスタディを重ねた結果、リニアな住棟を大空間のプールの短辺方向にまたがせるように組み合わせた斬新なものになっている。前面道路に対して住棟が平行にすべきか、あるいは直交すべきかが悩ましいところだが、前者を選択した現状の案は、街に対してプールと集合住宅の二つを組み合わせた特徴的な立面をつくることに成功している。明快なコンセプトに基づき空間をスタディして、プライバシーや採光といった機能的なところまでおさえた完成度の高い秀作である。（森）

黒澤未来 ｜ 光と風の通り道

Miku Kurosawa



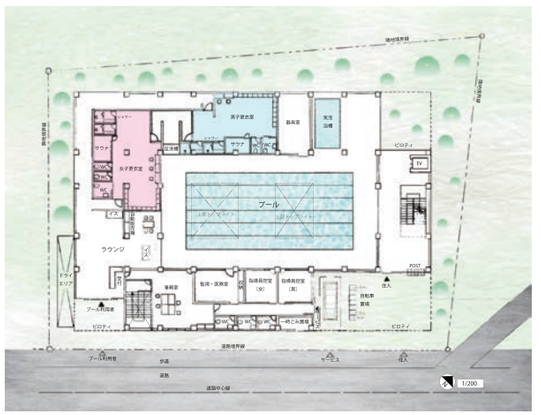
1階平面 1/2,500

立面 1/2,500

講評：ラーメン構造による整然とした架構を施し、そこにプールの大空間とその他の所室群を、視線の抜けを意識しながら配置していった作品。スパン割の調整等、随所に細やかな配慮も見られるが、平面図はもちろん、立断面の図面表記が稚拙なところがもったいない。空間の雰囲気が分かるような図面を描きましょう。（高橋）

姫野滉一朗 ｜ Real Network

Koichiro Himeno



□ Type A for Couple

□ Type A' for Couple

講評：1階平面図における動線処理が秀逸。他方メゾネットにした住居階は、試みは面白いが若干窮屈に感じられる。水平／垂直の動きがどのように展開されれば心地よい空間が生まれるのかをよく考えよう。自分が設計した空間を頭の中で歩き回れるまでイメージしていくと、空間はどんどん良くなっていきます。（高橋）

3年生

設計製図 III —— 課題1 Assignment 1

アキバ・クリエイティブ・パーク

Akiba Creative Park

本課題では、東京のクリエイティブの巣窟、秋葉原で現在解体中のビル跡地に、クリエイティブな物事が生まれる作業場を計画する。大学生、外国人、政府、民間そして子供達が集まれる公共性のある空間創造をめざして、「パーク」として位置づける。GoogleやAppleなど大手IT企業のオフィス計画、クールジャパン政策、千代田区マスタープラン、敷地周辺の建物現況を参考に、提案せよ。機能は自由とする。（出題：廣瀬大祐）

The assignment is to plan a creative space in the Akihabara district, lair of Tokyo's creatives, on a site where a building is currently being demolished. It should aim to become a creative "park", public in nature, where students, foreigners, people from government and the private sector, and children can gather. For inspiration, refer to the office plans of Google, Apple, and other major IT companies, the government's Cool Japan policies, the Chiyoda–ku master plan, and the buildings around the site. The functions can be freely decided. (Daisuke Hirose)

担当教員 Supervisors

川向正人 Masato Kawamukai
岩岡竜夫 Tatsuo Iwaoka
石橋利彦 Toshihiko Ishibashi
齋藤精一 Seiichi Saito
提 祐輝 Yuki Sage
内藤将俊 Masatoshi Naito
廣瀬大祐 Daisuke Hirose
宮下信顕 Nobuaki Miyashita
水野貴博 Takahiro Mizuno

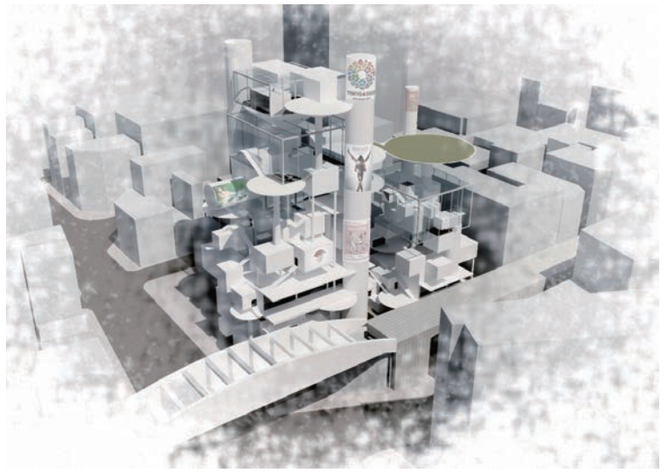
敷地：東京都千代田区外神田1-9（旧石丸電気本店）および千代田区外神田1-5（旧ヤマギワビル）
敷地面積：1,223m² + 1349m²

用途地域：商業地域
建ぺい率：80%
容積率：600%
その他：防火地域。2つの敷地を分断する

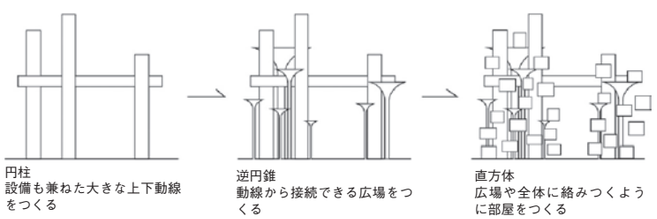
道路は残す。上空での連結は可
共用部門（ロビー、食堂、厨房など）
管理部門（事務室、管理人室）

小浦幸平 | Angel Capital

Kouhei Koura



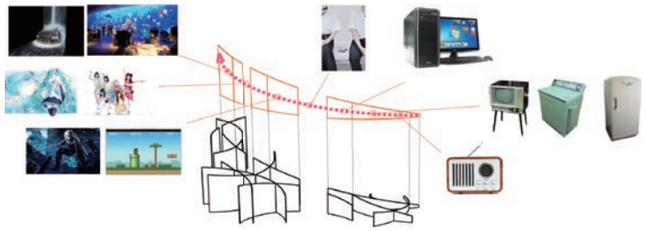
□ Diagram

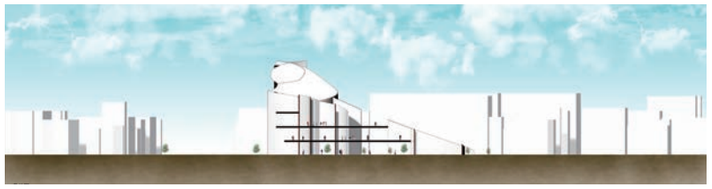


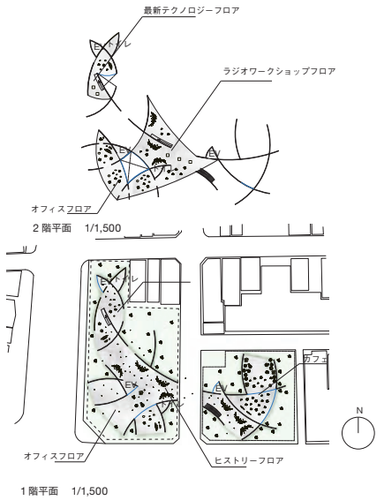
講評：本人はこの作品を〈エンジェル・キャピタル〉と名付けた。〈エンジェル〉とは「創業まもない企業に対し資金を提供する裕福な個人投資家」（ウィキペディアより）のことであり、こうした投資家の居城をアキバに建てようというわけだ。つまりこのプロジェクトは若いベンチャー起業家たちを店子とする巨大なオーナーズマンションであるといえる。オフィスや工場、公園や広場のような提案が多い中、〈住宅〉の延長として課題に応えようとする視点が、この作品のユニークな造形として現れているのではないか。（岩岡）

河鰭公晃 | PLANT

Kinteru Kawabata



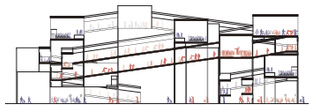


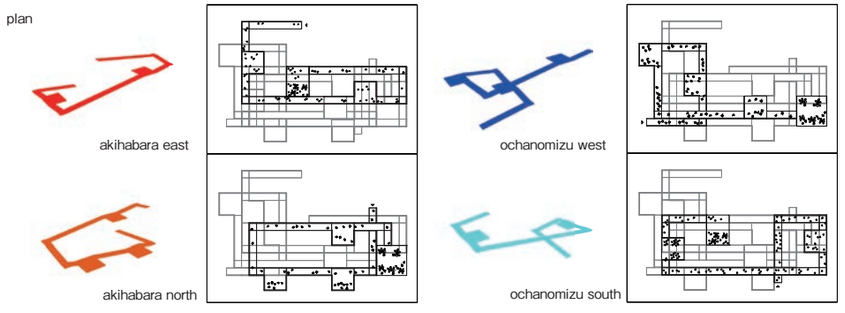


講評：河鰭案は、葉から連想されるスタディ模型をいくつもつくり、形態の可能性を模索していた。葉脈を抽象化したような平面により、内部・外部・半外部空間を緩やかに区切りつつ、それらを貫通する視点を設け、さまざまな活動（秋葉原の歴史の変遷）を垣間みられるようにした。
外観は葉が風で舞い上がっているような形状でもあり、屋根スリットからは木漏れ日のように光が落ちている。「一枚の葉」のスケッチから、森が生まれた。（提）

酒井健太郎 | Sub Cul Spiral

Kentarou Sakai





講評：新たに建築を建てることによって都市が開かれ、心地よい風が吹き抜ける。誰もが願いながら実現するのは難しいテーマに取り組んだ酒井くんの作品が、９人の指導教員から最も多くの支持を集めた。地上レベルは都市広場として開放され、何本かのチューブ状の空間が螺旋を描きつつ上昇していく。床が緩やかな斜路となり、壁面と天井面は展示に使われる。そして、チューブ状の流動空間に対して要所に箱状の滞留空間が設けられ、そこは様々なアクティヴィティの場となるが、箱の側面あるいは上面がガラス張りで、人々の視界を大きく開く。その効果は絶大で、実に多様な都市との出合いがあり天空への眺望も生み出されている。（川向）

3
年生

設計製図 Ⅲ ── 課題2 Assignment 2

東京理科大学野田キャンパスの再生

Renewal of TUS Noda Campus

豊かな自然と閑静な住宅地に囲まれた東京理科大学野田キャンパスは、2017年に創設50周年を迎える。理工学部の諸施設の老朽化が激しく早急にリニューアルする必要に迫られており、その校舎を再整備するための提案を求める。従来の施設計画にとらわれない新たなキャンパスデザインの提案を期待する。提案は約３名のチームによる共同作業で行う。（出題者：岩岡竜夫）

The Tokyo University of Science Noda Campus is surrounded by quiet residential districts. In 2017, it will mark the 50th anniversary of its founding. The facilities of the Faculty of Science and Technology have deteriorated and are in urgent need of renewal. This assignment is to propose replacements for these buildings. Propose a new campus design, without being bound by the plans for the existing facilities. Proposals will be joint efforts by teams of about three persons. (Tatsyo Iwaoka)

担当教員 Supervisors

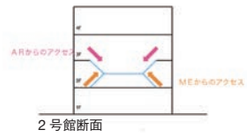
川向正人 Masato Kawamukai
岩岡竜夫 Tatsuo Iwaoka
石橋利彦 Toshihiko Ishibashi
齋藤精一 Seiichi Saito
提 祐輝 Yuki Sage
内藤将俊 Masatoshi Naito
廣瀬大祐 Daisuke Hirose
宮下信顕 Nobuaki Miyashita
水野貴博 Takahiro Mizuno

敷地:東京理科大学野田キャンパス内
提出物:設計概要書、模型

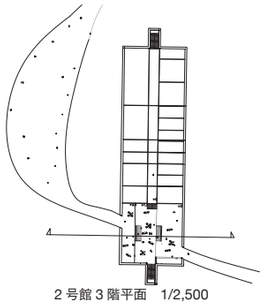
発表形式:報告書、模型、パワーポイント等の映像を用いて、各チーム６分以内で発表する。口頭発表用の原稿を準備しておくこと。

植松里緒／小原綾也那／菅野 碧｜ 楽食小道

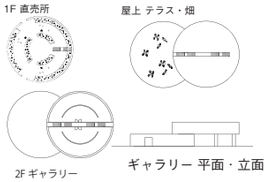
Rio Uematsu/ Ayana Obara/ Aoi Kanno



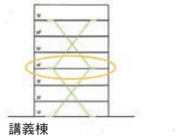
2 号館断面



2 号館３階平面　1/2,500



ギャラリー 平面・立面　1/2,000

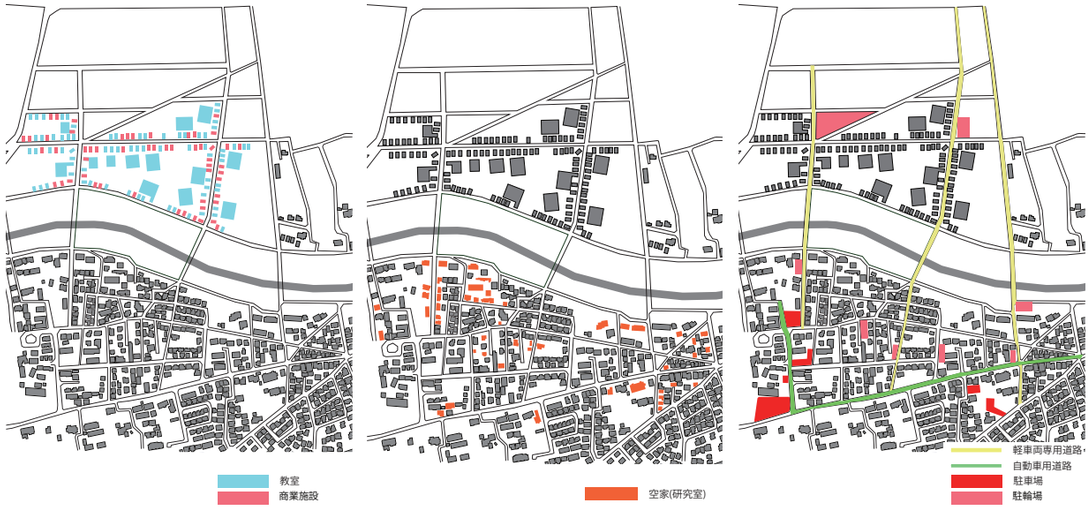


講義棟

講評：スクラップアンドビルドではなく、リニューアルによって新たな価値を付加しようとする計画。既存の各棟を繋ぐ有機的な回廊には「農業と食」をテーマとした機能空間を連続して配し、学生生活で手薄になりがちな食生活の豊かさの向上を狙いとしている。同時に、減築と構造補強による耐震性の強化も期待される。理工学部の10学科と薬学部の英知を結集し、各々の得意分野を生かした個性的な仕掛けが、異分野交流を促す強力なエンジンとして魅力的な空間となっているだけでなく、タイトル「楽食小道」も提案の楽しさを際立たせ、着眼点のよさも高く評価できる。（宮下）

武永かなえ／塩塚瑶子／藤本夏樹 ｜ しゃっふる

Kanae Takenaga/ Yoko Shiotsuka/ Natsuki Fujimoto

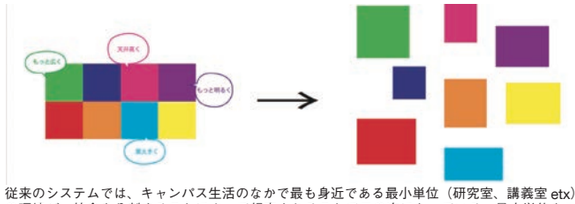


講評：この案は、既設の「ふれあい橋」に加え、対岸の住宅地域内の既存道を延長してキャンパス内へと導くための2本の橋を新設することから始まる。3本の橋が枝分かれする11本の既存道に沿う空き家を各学科の研究室へと巧みに改修し、遊歩道や広場、駐輪場、駐車場を的確に計画することで活気を創出している。さらに、各橋を延長する動線をキャンパス内に設け、その道に沿って開放性の高い講義室やカフェ等を、その背後に研究施設を計画している。結果的に対岸域の空家問題は解消され、新設キャンパスは最小化し、そして学生と市民が触発しあう、極めて画期的で独創性の高い案となっている。（内藤）

浦 望／小浦幸平／棚橋優樹｜ Cube Project

Nozomi Ura/ Kouhei Koura/ Yuki Tanahashi

■コンセプト　分解による最小単位の充実



従来のシステムでは、キャンパス生活のなかで最も身近である最小単位（研究室、講義室 etc）の環境が、校舎を分割することによって規定されることで二の次になっている。最小単位をエレメントに分割することによって自由度をあげ、最も身近な環境を充実させる

講評：これは、3人でチームを組んだ設計である。20世紀初頭にル・コルビュジエが示した「ドミノ・システム」が21世紀になっても建築を支配し続けている。「ドミノ」を排除して建築が成立するか否か。現代建築のこのホットなテーマに、住宅ではなく、10学科もある大学キャンパスの設計で挑戦して、相当に高い水準に到達している。彼らは建築が好きでよく勉強し、スタディを重ねており、プレゼンテーションもよかった。（川向）

3 年生

設計製図 Ⅲ ── 課題3 Assignment 3

自分の通った小学校の現代化プロジェクト

Project to Modernize Your Own Grade School

誰でも通ったことのある慣れ親しんだ施設、小学校を題材として、公共施設のデザイン・計画を学ぶ課題。自身が通った小学校の改築を通じて、これからあるべき小学校の提案を求める。留意点として、下記が挙げられた。

1) 新しい教育に対応した学校施設
2) 生活の視点から見た学校施設
3) 地域社会と学校施設
4) エコロジーに配慮した学校施設

（出題：Cリーグ）

This assignment approached the design and planning of public facilities by choosing a subject that everyone is familiar with – the grade school that they attended themselves. Via a project to modernize the school that they attended, students were asked to propose a grade school as it should be in the future. Special attention was requested for the following points.
1) Support for new types of education
2) The school as seen from daily life
3) The school and the community
4) Consideration for ecology
(Assigned by:C–League)

担当教員 Supervisors

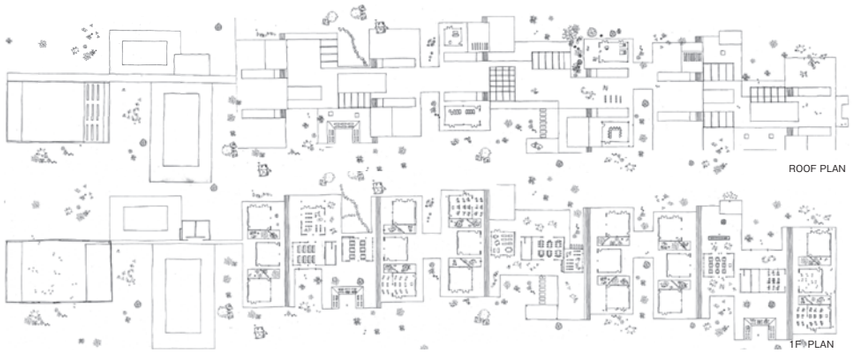
川向正人 Masato Kawamukai
岩岡竜夫 Tatsuo Iwaoka
郡 裕美 Yumi Kori
内藤将俊 Masatoshi Naito
水野貴博 Takahiro Mizuno

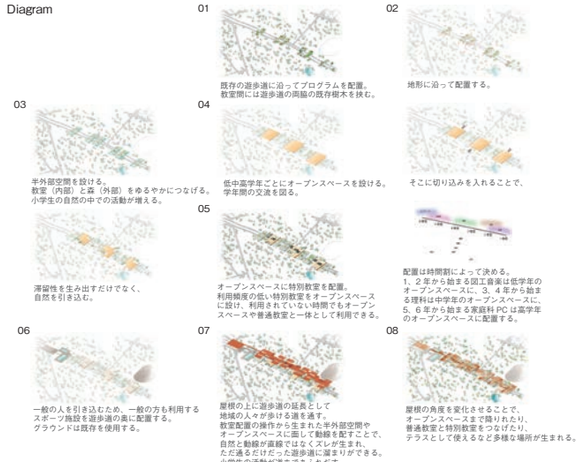
所在地:各自選択
主要用途:小学校

＊千葉県にある5大学の建築系学科（Cリーグ）で共通の課題を出し、合同講評会などを行っている。関連記事74頁

植松里緒｜森道で学ぶ

Rio Uematsu





講評：校庭に隣接する森の中の寂しい遊歩道を敷地に選定し、その既存樹や地形を巧みに活用することで子供達のみならず、教員や地域住民の想像力をもかきたてる意欲的な作品である。上部や下部の半外部空間を隣接する内部空間（教室）と一体的に活用できるようコントロールされた屋根の配置や勾配は特筆すべきものがあり、子供達が大自然の中で抵抗なく活動できる案となっている。更に、この空間は、散策可能な遊歩道として、或いは、オープンスペースと繋がる広場として、更に、普通教室と特別教室を連続させるテラスとしても機能しており、シンプルなゾーニングにも関わらずあまりにも多様な空間性をもたらすことに成功している。（内藤）

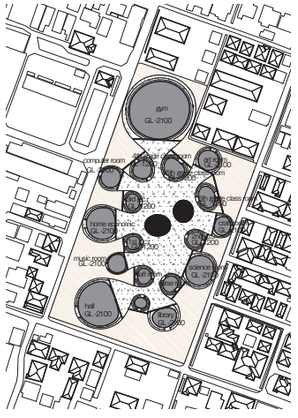
酒井健太郎 ｜ 余白で育つ色

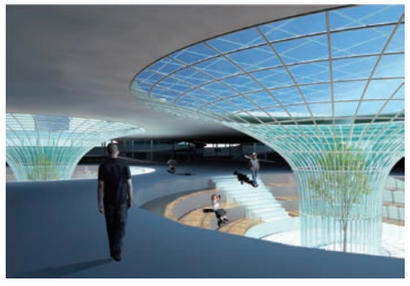
Kentaro Sakai

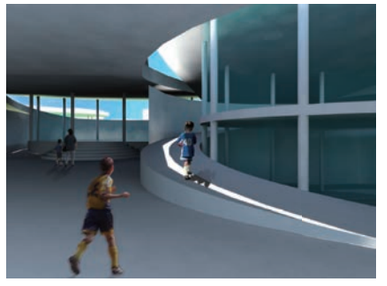
講評：教室以外に、学年全体の学習の場、学年を超えた子供同士の交流の場として用いられる二種類のオープンスペースを想定している。この三種類の場を大きさの異なる正方形で表現し、それらを噛み合わせながら繋げていくことで、多様な学習の可能性を提示している。また、迷宮的な平面計画が把握しづらい難点はあるものの、教室とレベル差のあるオープンスペースの下に低学年の子供しか入れない余剰スペースが広がるなど、豊かな回遊性が生まれている。（水野）
＊Cリーグ最優秀案（75頁に詳報）

小浦幸平 ｜ Topographical Square

Kouhei Koura



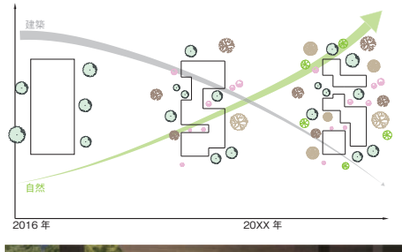


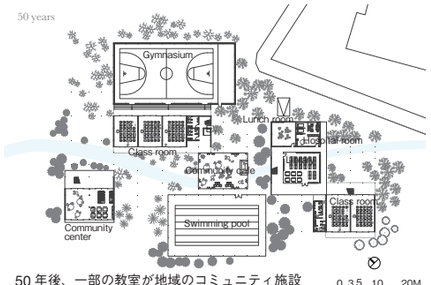


中核都市の住宅街に囲まれた長方形の平坦な敷地に建つ小学校を、敷地全体をダイナミックに造成することでランドスケープと一体化したおおらかな施設を提案している。大きさの異なる円形のスロープ広場と地下の内部スペースが異なるアクティビティをそれぞれ誘発させることを意図していると思われるが、そこの部分がやや曖昧であった。（岩岡）

照井飛翔 ｜ 消えゆく小学校

Tsubasa Terui





50 年後、一部の教室が地域のコミュニティ施設になると想定した平面

講評:照井案の最も優れている点は、現在は暗渠となっている川を地上に出し、その周囲の自然と共に蘇らせ、それを骨格にして、学びの空間を構成し直そうとしたところにある。川面の上に巧みにテラスを張り巡らせ、勾配屋根の庇や樹木の緑で適切に覆えば、それだけで、この場所のもつ魅力が何倍も強化されるであろう。学校らしい精神性豊かな空間を生み出すことも不可能ではない。その意味で、もう少しつくり込んでよい作品である。（川向）

3 年生

設計製図 Ⅲ —— 課題4 Assignment 4

SAWARA MIRAI——歴史的町並みの再生と新たな価値の創造

SAWARA MIRAI – Creating New Value by Renewing a Historical Streetscape

佐原は利根川水運の中継基地として栄え、小野川沿いとその周辺には歴史的町並みが点在する。現在でも当時の商売を続けている店舗が多く、重要伝統的建造物群保存地区として町並み整備事業が遂行されている。伝統的な建造物の持つ空間性や魅力に注目し、それを現代にいかし、さらに未来につなげる提案をしてほしい。海外に向けて日本の文化を発信する場としても期待する。プログラムは自由。（出題:郡裕美）

The town of Sawara flourished in the Edo period as a way station on the Tone River transportation route, and well–preserved historical streets still exist along the Ono River. Many merchants are still doing business is shops from that time. The district has been designated an Important Preservation District for Groups of Traditional Buildings and a program to improve the streets and restore the buildings is underway. The assignment is to focus on the spatial characteristics and attractive features of traditional buildings, and suggest how to use them in a contemporary way. The proposals should also have implications for the future. It is also an opportunity to reach out to the world with a message about Japanese culture. The program can be freely chosen.(Yumi Kori)

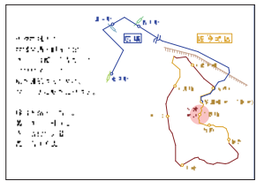
担当教員 Supervisors

川向正人 Masato Kawamukai
岩岡竜夫 Tatsuo Iwaoka
郡 裕美 Yumi Kori
内藤将俊 Masatoshi Naito
水野貴博 Takahiro Mizuno

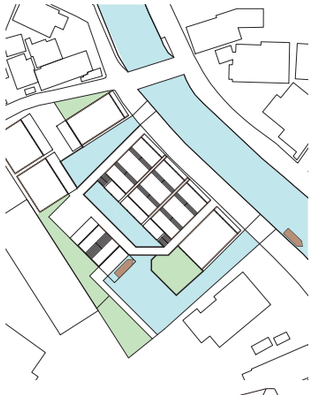
所在地:千葉県香取市佐原
敷地:以下の4カ所の敷地を想定。実際に佐原の町を歩き、どの場所提案するか、各自のコンセプトに応じて選択
敷地A:JR佐原駅北口の空地
敷地B:伝建地区の中心地にある空地
敷地C:小野川沿いの伝建地区のはずれの空地
敷地D:景観形成地区の空地

粥川知宏 ｜ 水運の復興

Tomohiro Kayukawa



講評：道路を挟んで既存の水路と隣接する敷地であることを最大限に生かした作品である。道路の真下に背の低いトンネルを貫通させて水路を敷地内まで引き込むことで、敷地内に観光船の発着場と土産店などを提案している。さらにそれぞれの施設の床面の高さを水面の高さに合わせてデザインすることで、魅力的な場所が展開している。（岩岡）



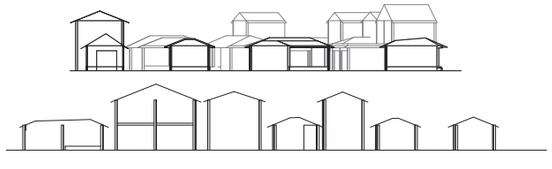
北立面　縮尺：1/400

断面　縮尺：1/400

柴田浩志 ｜町屋の変幻

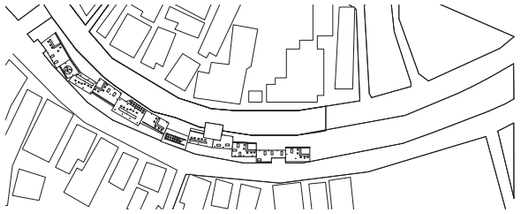
Hiroshi Shibata

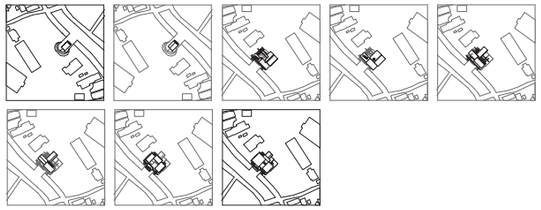
講評：シャッターを下ろした店舗や空き地が多くなっている佐原で、廃業した商店をコンパクトに凝縮して再生することで、まちの賑わいを取り戻そうとしている。伝統的な町家のミセ、イエ、ニワ、クラといった空間それぞれに、外部への開かれ方や光の取り入れ方などの特性の違いがあることに着目しつつ、単に町家の構成を踏襲するのではなく、接道から線状に繋がる組み合わせを一旦解体し、店舗ごとに適切な空間を利用できるように再編成した点に、新しい可能性を感じる。（水野）



牛尾朋聖 ｜佐原プロジェクト

Tomoki Ushio

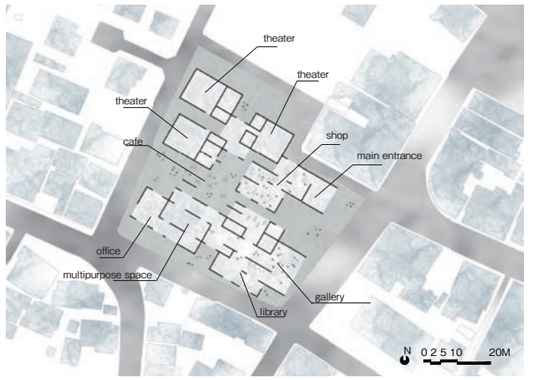




講評：水面を移動する十数隻の建築（小舟）が連結されることで小野川上に仮設の商業施設が現れる案である。連続する屋根が対岸の道を繋ぐ起伏のある広場として機能し、水面では歴史的に重要な両岸の複数の荷揚用階段（だし）を結ぶように計画されている。建築の収納場所である川の隣接地に水を引き込み、機械式立体駐車場のように建築を積層させることで一棟の資料館としても機能する。その際は、各々の屋根が上下階を結ぶ動線となるよう計算しつくされている点も高く評価できる。重要伝統的建造物群保存地区の川沿いの景観を保存しつつ、商業性を高めることで地域の発展を目指した秀逸な作品と言える。（内藤）

河鰭公晃 ｜境界の向こう側

Kinteru Kawabata

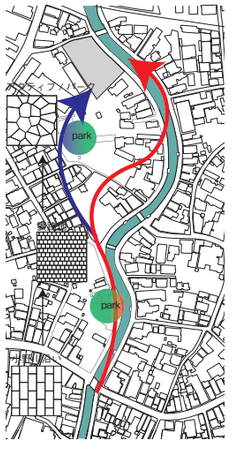


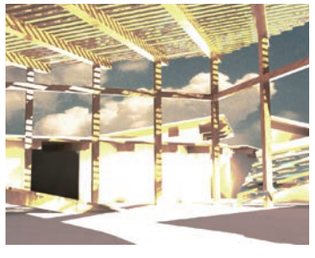
講評：指定された敷地の中で最も広大かつ歴史的文脈の曖昧な駅前の敷地を選択している。それだけ自立したプログラムと造形の統合力が必要とされるが、この作品では主題を＜映画＞に置き、それに関連する諸施設を敷地内に連続屋根の下に分散させている。その配置方法を周辺の既存の街並みとの隣接関係から構築しているところが面白い。（岩岡）

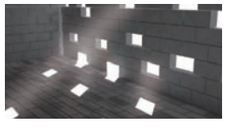
酒井健太郎｜ 石の記憶を嗣ぐ

Sakai Kentaro

全体提案 - 石の公園
さまざまなスケールの石が使われている佐原のまちにおいて、リサーチをもとに３種類の石のスケールをアイコン化し、設計に用いる。小野川沿いに沿って石畳（スケール 300 × 600）を敷いていくとともに、plot 4、11 のような裏路地に入っていくにつれて、細かい石（スケール 150 × 150）を用いて地面を舗装していく。また現在２つしかない石の公園を伝統的建造物群保存地区を繋ぐように配置し、人の滞在、交流をつくる。







講評：この案では、周辺地域の街路を拠り所とした軸線を用いて敷地を14のブロックに分割し、各々に広場やギャラリー、レストラン、ホテルなどの役割を与えている。そして、その開放性に応じて壁面を大型、小型、乱型の3種類の石板で組み上げて開口率をコントロールしており、更に、観光客が自由に散策できる屋根面にまでその役割に応じて3種の石板を使い分けている。建ち並ぶ木造建築のみに着目しがちなこの地域で、石材の重要性を説くことで、石と木によって構成された真の佐原の理想像を具現化した力作である。（内藤）

設計演習

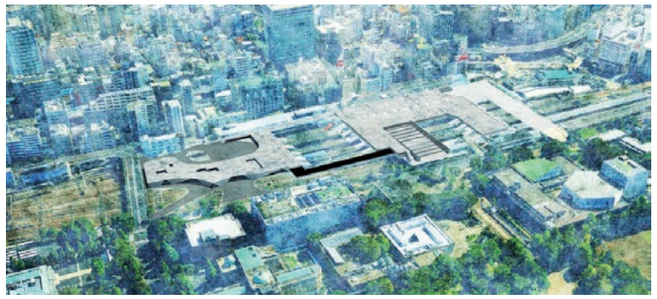
山名善之＋有岡三恵ユニット
Yoshiyuki Yamana & Mie Arioka Unit

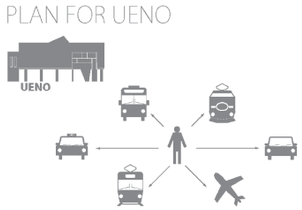
まちづくりをめざした 上野駅公園口のデザイン

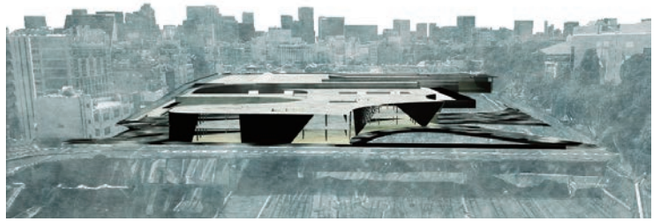
上野駅の公園口は、国立西洋美術館（設計:ル・コルビュジエ／実施設計:前川國男・坂倉準三・吉阪隆正／1959 年）の世界遺産登録などを見据え、国際的な観光地として改修が検討されている。正面に東京文化会館（設計:前川國男／1961 年）があり、周辺は都美術館、博物館、上野動物園などの文化施設や娯楽施設が密集しているエリアにある。周辺地域の将来的な利用イメージとともに、駅周辺のデザインを提案してほしい。駅舎のハードデザインにとどまらず、駅や周辺の道路、公園などの利用方法、空間を構成する多くのファクターを分析し、新しい人の流れやアクティビティをイメージしてほしい。

福田泰之｜ RENOVATION INOVATION RELATION → STATION

Yasuyuki Fukuda



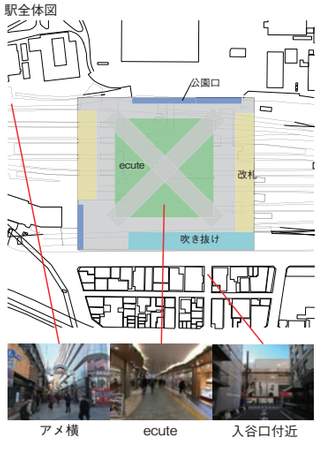




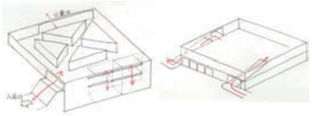
講評：東京の中での上野の位置づけに着目し、寛永寺や谷根千、浅草との関係を考慮した提案。観光客が主に昇降する公園口に加え、寛永寺側にも人工地盤をつくることで、観光客と地元住民の動線を分散させることに成功している。地域分析とCGのプレゼンテーションはともに秀逸だが、平面・断面の検討が不足しているように見受けられ、建築として解けているのかはいささか疑問が残る。高低差のある上野の地形を補助するような屋上公園は、周囲の高層化と対比的に、上野の杜周辺の将来的なあり方を上手く表現している。（有岡）

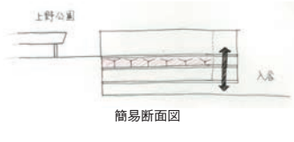
柴田浩志 ｜ 複合体としての公園口

Hiroshi Shibata



視点場からの眺望





簡易断面図

講評：2020 年東京オリンピックパラリンピックに向けた上野「文化の杜」新構想、国立西洋美術館の世界遺産登録を念頭におきつつも、あくまでも東京文化会館から西洋美術館を見た前川國男の斜めの視点にこだわってコンセプトに据えた案。その奥にある東京都美術館の雁行配置とも関連させるごとく、対角状の動線をもつ人工地盤を提案している。文化の杜を取り囲む谷根千、アメ横、浅草など地域の多面性を関連づけた配置計画だといえる。プレゼンテーションにかける時間が不足したのが残念だ。（有岡）

設計演習

伊藤香織＋丹羽由佳理ユニット
Kaori Ito & Yukari Niwa Unit

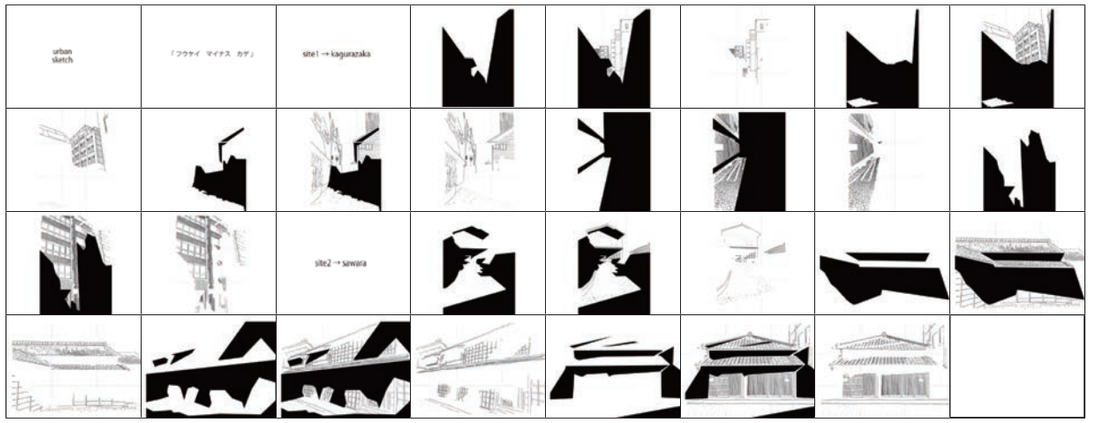
アーバンスケッチ

街路をじっくり観察しよう

この課題の主旨は、街路をじっくりと観察して道の特性を見つけることである。街路には、植栽、電柱、看板、排水溝、マンホール、看板など様々なモノがある。まずは、街路には何があるのか？をじっくり観察し、そこに佇む人々や動線などをリサーチしする。そして、街路の特性を文字ではなく「スケッチ」で表現する。実際の街路を風景画のようにスケッチしてもよいが、抽象的なダイアグラムの方が魅力的だ。自分らしいスケッチの表現技術を身につけて欲しい。提出物は、それらのスケッチをブックレットにまとめる。書店で販売できるような魅力的なブックレットを期待。

酒井健太郎 ｜「フウケイ マイナス　カゲ」

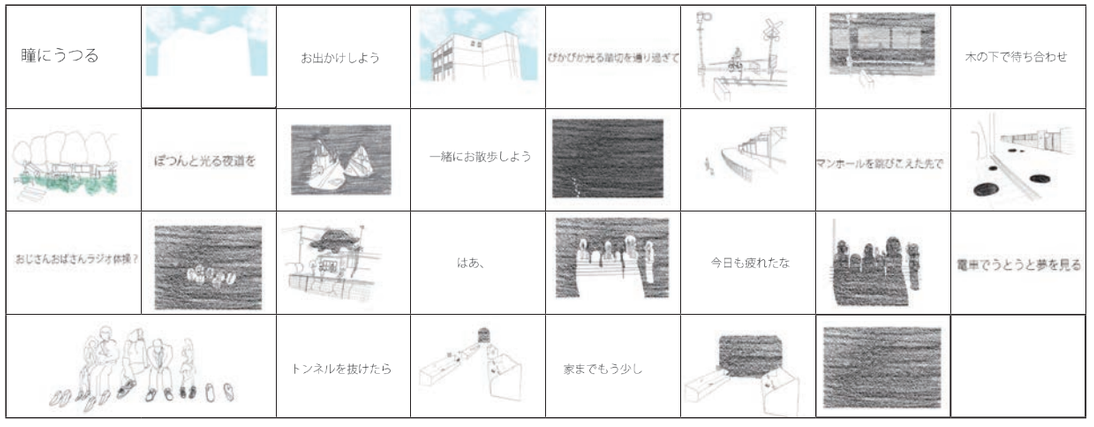
Kentaro Sakai



講評：風景のなかから影になっている部分を引くという行為は、大変面白い。アーバンスケッチは、いつもと違った視点で都市を観察することが重要であり、酒井くんは影という視点を見つけた。影には、時間的変化や建物のシルエットなどが含まれる。ブックレットでは、様々なシーンを抽出し、2本の黒いペンを使い分けることで、「風景 — (マイナス) 影」を見事に表現している。特に、風景を描いた紙や、影を描いたトレーシングペーパーの質感など細部まで丁寧に創作している。（丹羽）

竹内さや香｜ 瞳にうつる

Sayaka Takeuchi



日常生活のなかにある何気ないエピソードを、上手に切り取っている。敢えて描かないことによりその部分が豊かにイメージされるような表現となっていることが巧みである。街灯の照らす明かりや、踏切にある遮断機など、個人のもつ特有の空間がぽかんと切り取られ0たようにスケッチされており、その表現方法も独特である。クレヨンをうまく使って、2次元にも3次元にも感じられる独自の世界観を作り出している。（丹羽）

設計演習

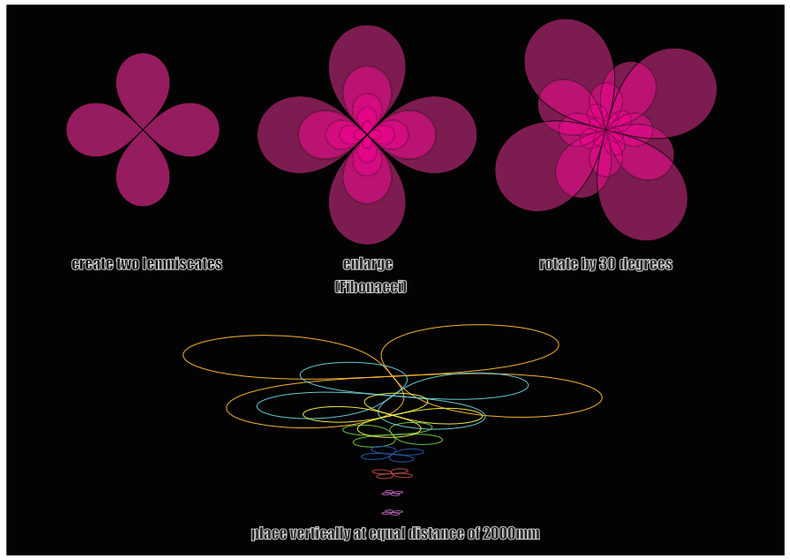
柄沢祐輔ユニット
Yuusuke Karasawa Unit

ダイアグラム生成

アルゴリズム的な方法論に基づくパターンの生成と立体化のプロセスによる設計演習である。このようなアプローチは、まだ建築の世界では馴染みが薄いものであるが、そのために却って新鮮な立体化や平面パターンのスタディを参加した学生たちが先例にとらわれることなく縦横に行っている姿が印象的だった。とくに演習の中で皆がすぐに方法論を体得し、アイデアを縦横に展開している姿にはこの分野と方法論の将来における展開の可能性が垣間見えた。

磯貝直人 ｜レムニスケートの森—A forest of lemniscate

Naoto Isogai



講評:極座標の方程式で表されるレムニスケートと呼ばれる幾何学図形に注目し、その図形に大きさの変化と向きにズレを与え積層させ、新たな立体的な幾何学のあり方を生成するという独自のアプローチを生み出した点が注目に値する。その新しい幾何学のあり方を構造体として利用し、結果として生み出された空間のあり方も造形として極めて迫力があり、幾何学の合間に設けられたトップライトから降り注ぐ光も美しい。地下鉄の駅というパブリックトランスポーテーションの空間に相応しいダイナミックな建築の形式が生み出されたと言える。（柄沢）

設計演習

川向正人+廣瀬大祐＋水野貴博ユニット
Masato Kawamukai, Daisuke Hirose & Takahiro Mizuno Unit

柏 ふるさと ネットワークマッピング

柏市の各地域に構成されている「ふるさと協議会」に、学生が出向き、会議やお祭りに参加させていただくことで地域の現状に触れ、他の地域との比較を通し、まちの活性化のための提案を行った。「松葉町」「永楽台」「柏駅周辺」「手賀」の4つの地域を、設計演習のメンバーが毎週訪れ、まちの方々と交流を行った演習である。調査・提案の発表は、2015年12月16日に大学内セミナーハウスにて「柏まちづくり大学」として開催し、柏市行政、民間企業、応援頂いた大勢の各地域の方々にもご参集いただいた。

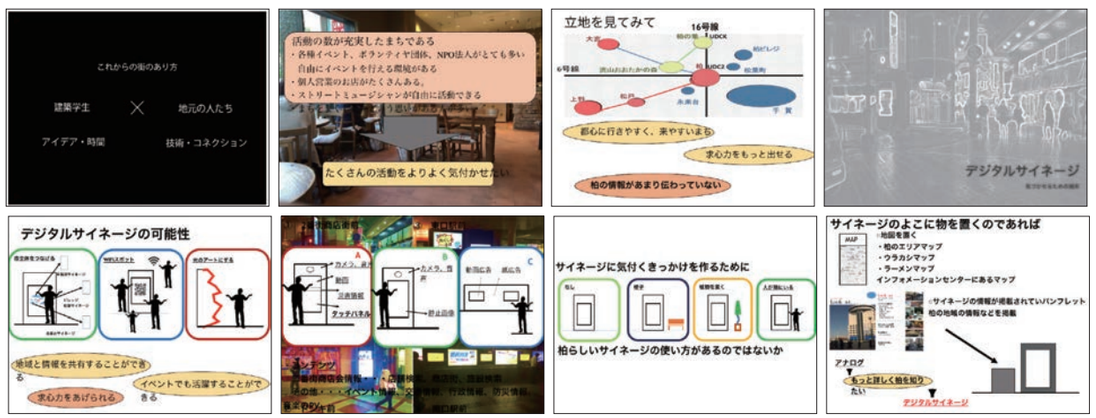
伊藤貴哉｜手賀沼地域—農業を中心にした街づくり

Takaya Ito

自転車に乗って、手賀の農家を学生が自ら訪れ、近隣都市部と手賀農業との密接な関係について教えていただき、農作業も手伝わせていただいた。都市部からアクセスのよい手賀では、農業体験が盛んになりつつあるが、若者が農業に根付くにはまだ課題が多いことを知った。その過程で、若者が農業 に触れる機会をもっと増やせるのではないかと考え、サイクリング・ツーリズムをベースに、農作物の即売所を兼ねたフォリーの点在設置を提案。手賀の雄大な景色を、自転車に乗って見るだけではなく、地域の果実を絞ったジュースを飲みながら眺められるフォリーは、現実的なアプ ローチだ。（廣瀬）

中野拓朗｜柏二番街商店街におけるデジタルサイネージの可能性

Takuro Nakano



他大学の学生らによるアート交流活動が盛んな柏駅周辺の活動に参加し、駅周辺の多様な活動を経験した学生は、この活動が市の他の地域に伝わっているのか、駅にある街頭サインの情報は行き交う人々に伝達しているのかという問いが生まれた。さらに課題となる「松葉町」「永楽台」「柏駅周辺」「手賀」の活動もより認知されるべきだと考え、駅前の既存4か所のデジタルサイネージと、他地域のデジタルサイネージを用い、市内各地域情報を紹介することを提案。デジタルサイネージという双方向 ツールを、設置するだけでなく照明装置として広場を形成し、まちの連続性に寄与する提案となった。（廣瀬）

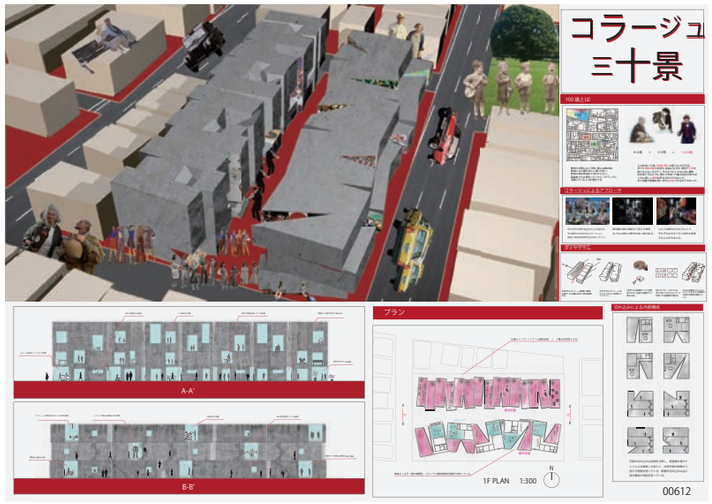
設計演習

安原 幹ユニット
Motoki Yasuhara Unit

コンペティションに挑戦しよう

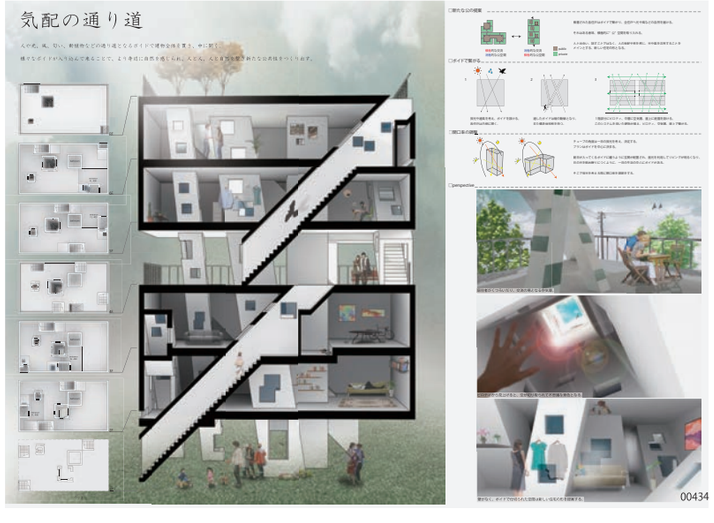
開催中のアイデアコンペ「第9回 長谷工住まいのデザインコンペティション」「第4回大東建託賃貸住宅コンペ」をそのまま課題として出題した。通常の設計課題のまとめ方とは違って、1枚のパネルによるプレゼンテーションから逆算して短期間で建築のアイデアを研ぎすます訓練である。

佐藤康行｜ コラージュ三十景（コンペテーマ：100 歳の集合住宅）
Yasuyuki Sato



講評：30戸=30人の生き様のコラージュを、風景として立ち上げるというアイデアは面白い。住戸ユニットに、外部に開く芽のようなものを与え、それらの集合の仕方を模索したスタディも方向性としては正しい。しかしながら最終のプレゼンテーションでは、表現手法としてのコラージュに逃げるのではなく、そこに現れる風景そのものを描かないと、建築の提案としては不満が残る。（安原）

酒井健太郎｜ 気配の通り道（集合住宅の公）
Kentaro Sakai



講評：光や風、人の気配が通り抜けるチューブが何本も貫通する建築をイメージし、その状態を都市における「公」と呼んだ。建築の形式としては既視感があるが、集合住宅としてみれば新しい意味や可能性が大いに生まれている。着実にスタディを進め建築として定着させたことを評価したい。（安原）

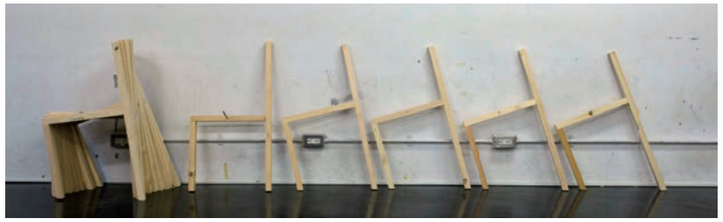
設計演習

岩岡竜夫＋横尾 真ユニット
Tatsuo Iwaoka + Shin Yokoo Unit

Learn About the Structure Design

構造デザインについて学ぶ。電卓を使用して、たわみや座屈を計算(シミュレーション)する。そうした構造力学の原理を、デザインする椅子に統合する。つまり、この授業における構造デザインとは、テクトニックな視点をもって、椅子のデザインと機能性を考えることを意味する。

佐藤康行｜ h Chair
Yasuyuki Sato



講評：座面を３度ずつ傾かせ、脚部の長さを調整することで、曲面を有する椅子を製作した。ボルト1本で固定されている組立ての容易性や、部品を増やすことでベンチとなる展開性を評価した。（横尾）

伊賀峻也｜ ECO Chair
Shunya Iga

講評：椅子の重心がやや後方になっていることで、耐久性に不安を残すものの、指定された使える角材の長さから、端材をださずに最も実用性のある椅子を製作したことを評価した。(横尾)

4
年生

建築設計·都市設計 Ⅰ&Ⅱ

ユニットマスター
Unit Masters

安原 幹 (32頁参照)
Motoki Yasuhara

長田直之
Naoyuki Nagata
1968年愛知県生まれ/1990年福井大学工学部建築学科卒業/1990〜94年安藤忠雄建築研究所/1994年ICU一級建築士事務所共同設立/2002〜03年フィレンツェ大学留学（文化庁新進芸術家海外留学制度研修）/2008年〜奈良女子大学住環境学科准教授/現在、東京理科大学理工学部建築学科非常勤講師

駒田剛司
Takeshi Komada
1965年神奈川県生まれ/1989年東京大学工学部建築学科卒業/1995年東京大学工学系研究科建築学専攻助手/2000年駒田建築設計事務所を駒田由香と共同設立/2014年〜東京理科大学理工学部建築学科非常勤講師/現在東京大学大学院、東京工芸大学大学院、昭和女子大学非常勤講師

伊藤香織 (32頁参照)
Kaori Ito

嶋田洋平
Yohei Shimada
1976年福岡県生まれ/1999年東京理科大学理工学部建築学科卒業/2001年同大学院修士課程修了/みかんぐみを経て、2008年らいおん建築事務所創業/2012年北九州家守舎設立/2013年リノベリング設立/2013年都電家守舎設立/2014年〜東京理科大学理工学部建築学科非常勤講師/2015年〜東洋大学非常勤講師

西田 司／オンデザイン
Osamu Nishida
1976年神奈川県生まれ/1999年横浜国立大学卒業後、スピードスタジオ設立/2004年オンデザインパートナーズ設立/2002年以降、東京都立大学大学院助手、首都大学東京研究員、横浜国立大学大学院（Y-GSA）助手、神奈川大学、東京理科大学（工学部）、東北大学、東京大学非常勤講師など/2013年〜東京理科大学理工学部非常勤講師

安原幹ユニット　Motoki Yasuhara Unit

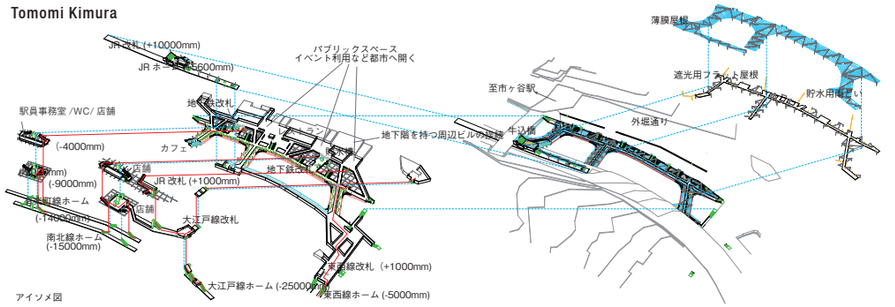
建築の中のパブリック·スペース
Public Space in Architecture

パブリック・スペースを内包した建築の設計を求める。パブリック・スペースは、建築のプログラムと密接に関係してデザインされていると同時に、空間として周辺の都市環境とダイナミックに応答が必要。敷地は、市ヶ谷駅から飯田橋駅間の外濠に面したエリアから、各自敷地を選んで設定。延床面積5,000㎡以上。プログラムは、居住系、オフィス、学校、商業施設など各自が自由に設定する。

所在地:市ヶ谷から飯田橋の外濠に面したエリアから、各自敷地を選んで設定
用途:居住系、オフィス、学校、商業施設など自由。ただし建築の中に、多数の人に開かれたパブリック・スペースを必ず含むこと。内部、外部は問わない。
規模:延床面積5,000㎡以上

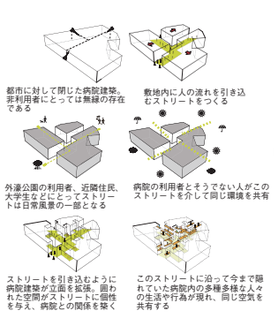
Design architecture containing public space. In addition to being closely related to the program of the architecture, the public space must be a dynamic response as space to the surrounding urban environment. Select the site yourself from the area in Tokyo that faces the outer moat of the Imperial Palace, from Ichigaya Station to Iidabashi Station. The floor space should be 5,000 m² or more. The program can be freely selected from residential, office, school, and commercial.

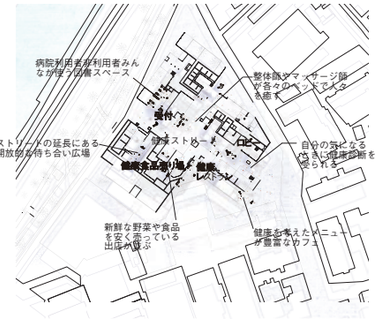
木村友美｜ 飯田濠駅
Tomomi Kimura

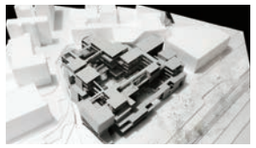


講評：飯田橋駅前の埋め立てられた掘を再生すると同時に、鉄道、地下鉄駅の人の流れのネットワークを構築する提案。環境・交通など取り上げた多くのテーマをまとめきれなかった感はあるが、土木スケールの対象物に切り込んで、建築的発想で都市のパブリック空間を描いている。狭い意味での建築的フォーマットから離れ、都市的なコンテクストの中から建築の「機能」を見いだそうとした姿勢を評価したい。（安原）

山口薫平｜ とある道際の賑わい
Kumpei Yamaguchi







講評：外濠に面した東京逓信病院の建て替え計画。病院は誰もが訪れる場所であるが、都市の日常とは明確な一線が引かれている。しかしながら内包する機能や人の数に思いを馳せると、巨大病院はひとつの都市のようなものである。それを周辺に対して開くことで、都市のパブリックスペースとしての可能性を引き出している。計画学的には最も「固い」ビルディングタイプを、自由な発想で取り扱った手際を評価する。（安原）

長田直之ユニット　Naoyuki Nagata Unit

New Farm New Form

New Farm New Form

調査:既存の生産システムを調査し新しい生産形態のリサーチと提案を行う
敷地:任意。ただし具体的な敷地を設定すること
規模:任意

イタリア発祥のスローフードの運動は、流通やグローバリゼーションに対する批判的な視点を提供し世界各地に広がった。「食」（農業）の問題として始まった運動だが、「食」に限らず、その地域の新しい（潜在的な）「文化」や「生活形式」への考察である。富山県氷見市の「SAYS FARM」は、「生産」の場所や空間へのイメージを一新させる。大量生産、大量消費、流通の仕組みを再度定義することによって、ものが生まれる（Farm）場所や空間に生まれる—古く・新しい—（Form）を考えよう。

From its origins in Italy, the slow food movement has spread around the world, offering a critical viewpoint on distribution and globalization. It began as a movement centered on issues of food (agriculture), but is now an examination of the (latent) cultures and lifestyles of specific regions. SAYS FARM in Himi, Toyama Prefecture, offers a new image of a site and space for production. The assignment is to think about the old and new Forms that are born in the site and space of production (Farm) when the mechanisms of mass production, mass consumption, and distribution are redefined.

小野塚 直｜ 人が創る風景

Nao Onozuka

講評:今回の課題は、インターネットやロジスティクスをはじめとするテクノロジーの変化とソーシャルな関係の変化に着目し、新しい「生産」や「流通」にカタチを与えることであった。小野塚案は、衰退する大田区の町工場に着目し、地域外にも開かれた新しい「ものづくり」の場をつくり出すことだった。周辺環境との関係、建築内部の空間構成、特に街路に面する外皮の在り方は魅力的空間をつくり出していた。（長田）

駒田剛司ユニット　Takeshi Komada Unit

東京理科大学野田キャンパス@2060

TUS Faculty of Noda Campus @2060

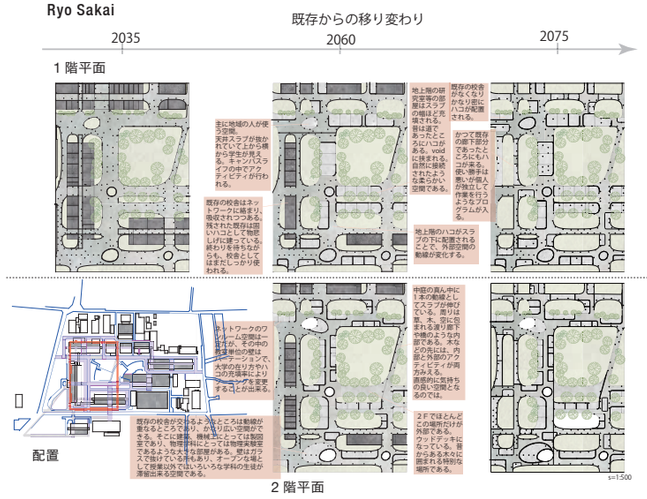
計画範囲:理工学部キャンパス基本とするが、必要に応じて敷地を越えることも可
調査:現地のサーベイを全員で行う。キャンパスの施設配置が分かる資料を大学から入手し、全ての建物のスケルトン図を作成

**少子高齢化を伴う人口減少が進む中での、母校の「明るい未来」の在り方を考える。
学生数が減少し続ける現実に対して、大学はその活力をどのように得ればよいのか？クローズドなコミュニティとしての大学ではなく、よりユニバーサルで、領域横断的で、社会に開かれた姿が求められる。2060年のキャンパスを、「新しい大学の在り方」を実現する場としての構想を求める。**

Against the background of an aging society and falling birthrates, think about a “bright future” for your alma mater.
Given the reality that the number of students will continue to decline, where will the university get its vitality? Instead of a closed community, the university is called on to become more universal, interdisciplinary, and open to society. Imagine the campus of 2060 as a place to realize a new vision of the university.

酒井諒｜ その道に、生きる。

Ryo Sakai



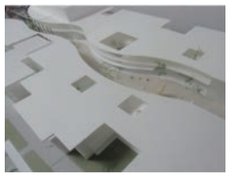
講評：既存校舎をアメーバ状のスラブが取り囲み、耐用年数を越えた既存校舎は徐々に解体される。新しいスラブはキャンパスを覆うネットワークとなり、旧校舎の跡地は、大小のオープンスペースとなって、その周囲にあらたなまとまりを生み出す核となる。既存校舎が所在なく建ち並ぶ現状キャンパスの、無個性かつ貧弱な空間を文字通り反転させるこのアイデアは、キャンパスの持続性と現状への根本的な介入という難しい課題に応えている。ただ、45年後の組織としての大学の姿を描くまでには至っていないのは残念。ネットワーク化されたキャンパス空間が、より開かれたコミュニティーとしの大学をどう実現するのかを示して欲しかった。（駒田）

平山雄太｜ 賃貸型キャンパス

Yuta Hirayama

2F, 3F　+5000mm

1F　+0mm



講評：大学を賃貸化するという案。その是非はともかく、多くの大学がこのままでは立ち行かなくなる現実を前にして、いまの大学の組織的、空間的な運営を根本から批判的に問い直すことの意味は大きい。一方で、過度な経済原理の優先が、大学の目指すところではないのは明らかだ。平山君自身が直感的に「街」というキーワードをたてたように、一見して経済原理一辺倒に見える街が、実はより複雑で多様な形成原理が作用する場であることをふまえた、つまり価値体系の多様性が担保され、それぞれの研究主体がより自律的に振る舞うことが出来る大学の姿を描いて欲しかった。今後の展開を期待したい。（駒田）

伊藤香織ユニット　Kaori Ito Unit

水辺で働く/水辺で暮らす

Working by the Water / Living by the Water

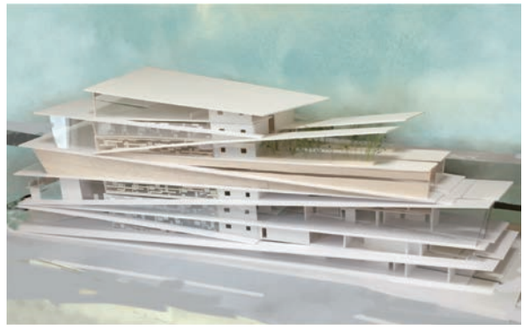
敷地1:ライオン株式会社 本社ビル(東京都墨田区本所 1-3-7)
敷地2:隅田川沿いを中心にもう 1 カ所以上

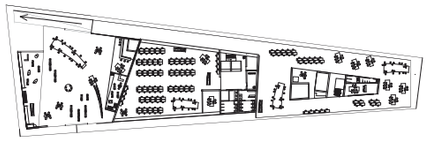
本課題は、東京における水辺に親しむ生活のデザイン。具体的には、「水辺に建つオフィスビルの建て替えと水辺活性化デザイン」である。ポイントは以下の3点。
1）「働く」ことを中心に生活のシーンを広げる。
2）民間企業や市民が水辺を活用していくメリットを考える。
3）オフィスビルの敷地に加え、もう1カ所以上の場所も設計の対象に加え、広がりを持った水辺の空間の活用を考える。
新たなまちと生活を創出することを設計の目標として欲しい。

The assignment is to design a lifestyle for living by the water's edge. Specifically, "replacement of an office building located by the water's edge, and design to rejuvenate the water's edge". Focus on three key points: 1) Broaden the scenes in people's lives beyond working; 2) Think about the merits for private corporations and citizens of using the water's edge; and 3) In addition to the office building site, add one or more sites to the design target, and think about broader uses for space at the water's edge. The design should aim to create a new way to live in the city.

原 彩乃｜まちひとえ

Ayano Hara



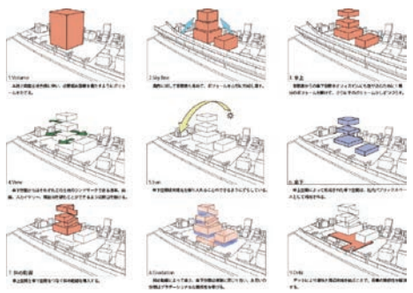


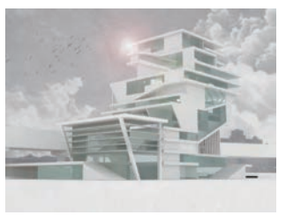
2 階平面　テナント×コワーキングスペース

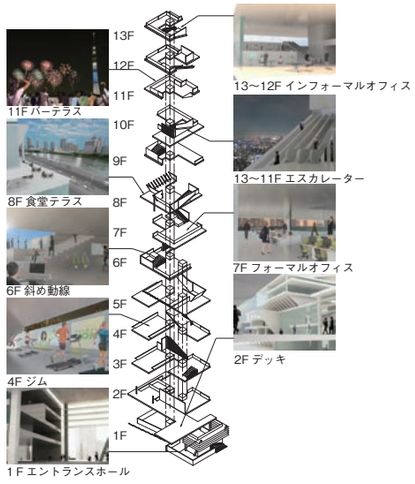
講評：オフィスビルのファサードで顔を作り出すこと、オフィス空間の両隣に観光客や市民の用に供する自由な空間を付随させることで、両国駅・国技館前に対する構えをつくった。また、周囲に巻き上がるスロープは、歩道や河川敷から導かれ、駅前と川辺を緩やかにつなぐ。国際的な観光地と川辺が接しながらも関係性の希薄な敷地で、オフィスビルという異質な機能を用いながらつなごうとした案である。（伊藤）

森 知史｜傘下のオフィス—植物的階層構造建築

Satoshi Mori







講評：川辺の首都高下空間の意外な心地よさに着目し、オフィス建築の中間階に首都高下の空間を模す「傘下空間」を取り入れた本社ビルを設計した。傘下空間は、水辺への眺望を確保するとともに、ミーティングスペース、食堂、バーなどの社内パブリックスペースとして機能し、社員同士の出会う場になる。併せて、稠密な市街地から川辺へと人を導く公共空間を用意した。水辺からまちを遮る首都高高架に新たなポテンシャルを見出している。（伊藤）

嶋田洋平ユニット　Yohei Shimada Unit

縮退地域の「まち再生プロジェクト」

"Neighborhood Regeneration Project" for Declining Areas

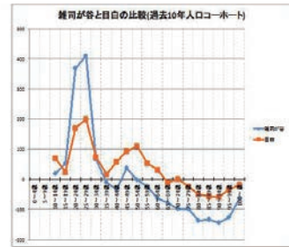
所在地:東京都豊島区雑司が谷、旧高田小学校とその周辺

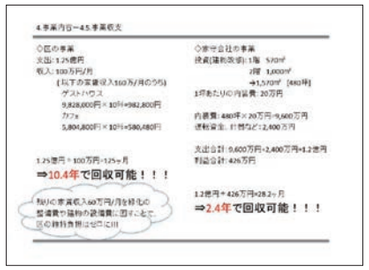
建築リノベーションの事業構築、収支計画、デザイン、事業提案の実践。人口減少時代の日本は、ストック活用型社会へ舵を切らなければならない。遊休不動産の活用、建築のリノベーション、公共施設のマネジメント、行政の都市経営課題、コミュニティの再生、木造密集地域の防災、などさまざまな課題にが複層している。それに対して、エリアのリノベーションまちづくりを行政や税金や補助金に頼らない手法を考えたい。敷地は、東京都豊島区雑司が谷の旧高田小学校の廃校跡地とその周辺。

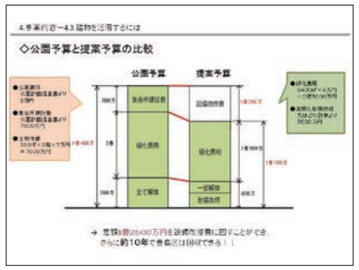
Development of an architectural renovation project, budget planning, design, practical project proposal.The population of Japan is declining. A change in course is needed, toward a society based on the utilization of its stock. Putting idle real estate to use, renovation of buildings, management of public facilities, city management challenges, community regeneration, disaster prevention in area of dense wooden houses – the issues are numerous and many layered. Think about ways to respond to these issues through area renovation and neighborhood development that does not depend on the government, taxes, or subsidies. The site is the grounds of the former Takada Elementary School and the surrounding area in the Zoshigaya neighborhood of Toshima–ku, Tokyo.

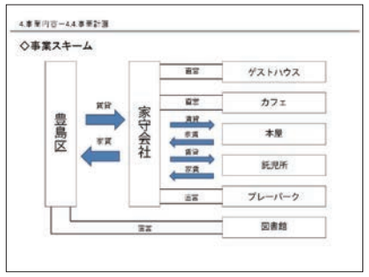
加藤 茜／熊谷洋輝／田中 愛／山口 翼｜ Mimizuku

Akane Kato/ Hiroki Kumagai/ Ai Tanaka/ Tsubasa Yamaguchi









講評：社会的な要請によって、モノのデザインとしての建築の設計の仕事は、大きな転換を求められている。大学の建築学科の建築教育のあり方も根本的に見直されるべき時期に差し掛かっているが、残念ながら国土交通省も文部科学省も当の大学も無頓着に数十年前に作られた制度と仕組みのなかでの建築士の役割から全く脱却できていないようで、少なくとも四年生の設計課題ぐらいは社会の現実と真実を学生に伝えるべきと考え出題した、学生はリアルに触れ課題に応えることができているので、安心している。（嶋田）

西田司ユニット　Ondesign Unit

2015年、日本

2015, Japan

2015年の日本では、“ローカル”という概念を掲げ、まちをフィールドとした実践が行われている。共通の趣味でてつながるネットワーク、異なる分野が横断して生まれる試み、現代の感覚で文化を継承することで起こる多世代交流など。過去と現在をどのように繋ぎ、未来をつくっていくのか。本課題では、“今”や“この場所”に目を向け、都市を社会的課題や共有価値から分析し、人の集まる環境を考え、そこから生まれる新しい建築を考える。また日本を客観的に位置づけ、次世代につなぐべき日本観を掘り下げる。

テーマ、敷地、プログラム、構造、規模は各自自由。下記に留意すること
・自分の身近なこと、実感がもてることからテーマを発見すること
・敷地はどこでも良いが、実際に行って周辺はもちろんまちも含めて体験的なリサーチをすること
・共有可能性があり、新しい与条件設定をすることから、未来の建築を考えること。

In 2015, in Japan, various kinds of action were taken in the city under the rubric of “local”. Networks of people with similar interests, experiments born from interactions between different fields, inter–generational relationships arising from the inheritance of culture in a contemporary way. How to inherit the past and the present and pass them along to the future? For this assignment, focus on the “here” and “now”. Analyze the city from the viewpoint of social issues and common values. Think about environments where people gather, and about new architecture born from such environments. Make an objective assessment of Japan’s current position, and develop a view of Japan to pass down to the next generation.

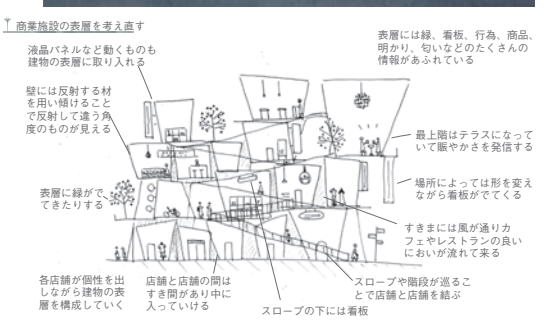
曽我章悟｜Kyojimaism

Shogo Soga

講評：京島をフィールドとした都市構造からライフスタイルまでがフラットに扱われたまちの更新手法の提案。曽我君流のリサーチから、京島の背骨となる商店街の一画に“アーバンファーム”という公共の共有空間と個人の専有空間が共存する未完成な建築を提案した。自然発生的に生まれた京島の住民がつくる路地空間の魅力をこれからの住民へ継承するために、あえて未完成な建築を用意する。その建築のスケールや共有と専有の混ざり合い、周辺との関係性について成長の余地は残るものの、都市や建築や生活を通じて社会と向き合う姿勢を全うしたプロセスは可能性を感じる。（西田）

丸山良太｜新宿イザナイ　—映り込みによる立体的に広がる建築—

Ryota Maruyama



講評：都市の大規模商業建築に向き合った非常にチャレンジ精神溢れる作品である。丸山くんは、現代人がスマホ等の情報ツール片手に都市生活を送っていること、建築物自体も看板をはじめとした情報で埋め尽くされていることに問題意識を感じている。人のアクティビティが都市に溢れると都市風景がもっと魅力的になり、人はリアルな体験に反応して活動の連鎖が起こるという仮説のもと、非常に迫力ある建築が提案された。商業というプログラム特有の時代のニーズに敏感な店舗のかたちがこの建築に加わると、さらにリアリティある都市風景の提案になっただろう。（西田）

建築設計実習 A&B
Master's 1st year

ユニットマスター
Unit Masters

末光弘和
Hirokazu Suemitsu
1976年愛媛県生まれ/1999年東京大学建築学科卒業/2001年同大学院修士課程修了/2001〜06年伊東豊雄建築設計事務所/2007年〜SUEP./2009〜12年横浜国立大学大学院Y-GSA設計助手/2011年〜東京理科大学理工学部建築学科非常勤講師/現在、東京大学、横浜国立大学非常勤講師

近藤哲雄
Tetsuo Kondo
1975年愛媛県生まれ/1999年名古屋工業大学卒業/1999〜2006/妹島和世建築設計事務所、SANAA/2006年近藤哲雄建築設計事務所設立/現在、東京理科大学理工学部建築学科、日本女子大学、法政大学、慶應義塾大学非常勤講師

青木弘司
Koji Aoki
1976年北海道生まれ/2003年室蘭工業大学大学院修了/藤本壮介建築設計事務所を経て、2011年青木弘司建築設計事務所設立/2014年〜東京理科大学理工学部建築学科非常勤講師/現在、武蔵野美術大学、東京造形大学、東京大学非常勤講師

安原 幹 〈32頁参照〉
Motoki Yasuhara

岩岡竜夫 〈32頁参照〉
Tatsuo Iwaoka

山代 悟
Satoru Yamashiro
1969年島根県生まれ/1993年東京大学工学部建築学科卒業/Responsive Environment共同主宰/1995年同大学院修士課程修了/1995〜2002年槇総合計画事務所/2002年〜ビルディングランドスケープ設立共同主宰/2002〜09年東京大学大学院建築学専攻助手・助教/2005年urban dynamics laboratory共同主宰/2012年〜東京理科大学理工学部建築学科非常勤講師/現在、大連理工大学建築与芸術学院客員教授、日本女子大学非常勤講師

末光弘和ユニット Hirokazu Suemitsu Unit

水のテリトリー —環境シミュレーションを使った設計プロセス—

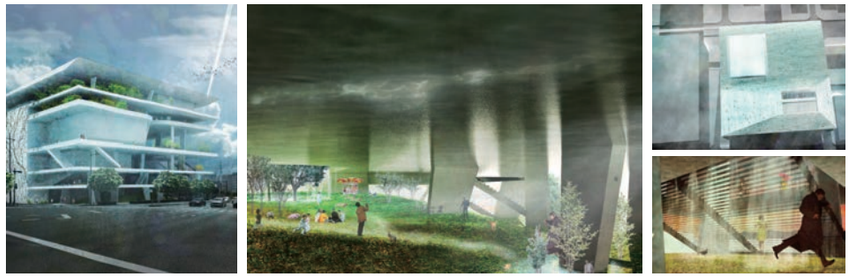
Water Territory – Design Process Using Environment Simulation

環境パラメーターとしての「水」に着目する。建築は、内部の空間を規定するだけでなく、同時に外部の環境を規定する。屋根の形状はそこに降り注ぐ雨の流れや速度を決定し、地面の形状は敷地内の水環境を決定し、基礎の形状は地下水など地域の水循環系との関係をつくる。本課題では、水のシミュレーションソフトを用いて、建築で水という流体をコントロールしながら、新しい環境をつくり出す事を目的とする。(本課題は、第42回日新工業建築設計競技と同テーマ。課題作品を発展させアイデアコンペに応募も可)

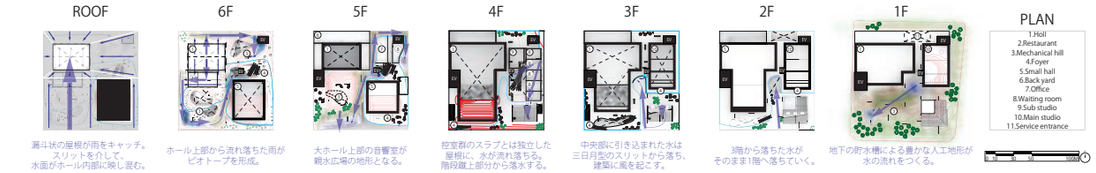
Focus on water as an environmental parameter. When architecture specifies an interior space, it also specifies the exterior environment. The shape of the roof determines the flow and speed of rainwater, the form of the ground determines the water environment at the site, and the shape of the foundation relates to the circulation of groundwater in the region. This assignment is to use water simulation software to create a new environment while controlling the flow of water with architecture.

影山真平｜ 呼吸する劇場

Shimpei Kageyama



講評:影山案は、積層された地形のような複合建築であるが、立体的な構造体を使って雨水を建物の中に流し、溜まりや流れをコントロールして、第二の自然をつくり出す、意欲的な案であった。地球を循環する自然の流体の中で、水は地形や気温、風などで常に様態を変化する最も美しい流体であることを再認識させてくれる案であった。(末光)

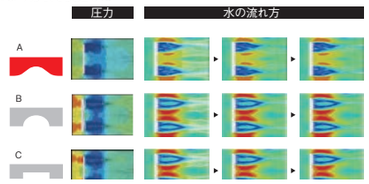


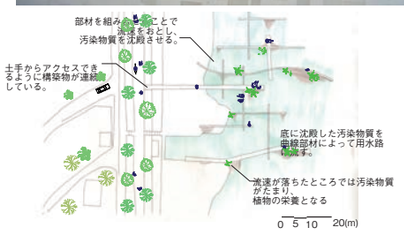
森島英子 ｜ 水の礎

Hanako Morishima

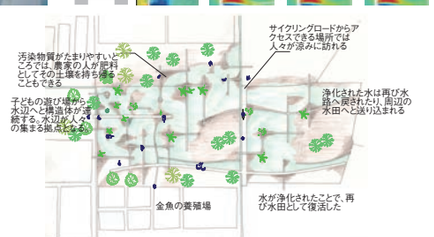
部材の形状の決定

次に組み合わせるもととなる水の通り道の開口部の形状を検討する。部材にかかる圧力、部材を通り抜けた後の流速、と水の流れ方の３つにより形状を決定した





フェーズ１



フェーズ２

講評:森島案は対照的に、社会問題に取り組んだ案である。霞ヶ浦の水質汚染の原因を丁寧にリサーチし、河口部の耕作放置された水田のネットワークを使って水を浄化しながら、人にとっても拠り所になる美しいランドスケープが印象的な案であった。こういった高い意識を持って建築をつくる姿勢を今度も持続して欲しい。(末光)

近藤哲雄ユニット Tetsuo Kondo Unit

ぎりぎりの建築

At the Limits of Architecture

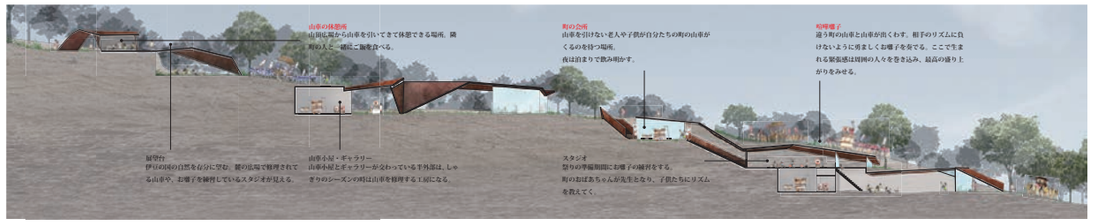
所在地:かつて温泉地として栄えた地方都市中心部
敷地面積:6,129m²
施設規模:800m²

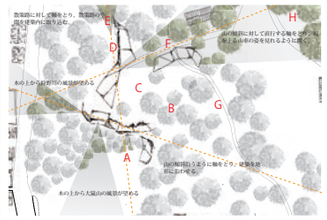
建築基準法では、建築物は「土地に定着する工作物のうち、屋根及び柱もしくは壁を有するもの」と定義されている。しかし私たちは、カッパドキアの洞窟住居やサーペンタインギャラリーなどのインスタレーションも建築であると認識している。なにを根拠に建築と呼ぶのか？この課題では、「建築と呼べるぎりぎりのもの」の提案を求める。具体的なプログラムは市民ホールである。

The Japanese Building Standards Act defines a building as “a structure permanently affixed to the ground that has a roof and columns or walls”. But we also think of the cave dwellings of Cappadocia and the Serpentine Gallery installations as buildings, or at least as architectural objects. On what basis do we call something architecture? For this assignment, propose something that pushes the limits of what can be called “architecture”. The concrete program is a civic hall.

林山赳大 ｜ 祭りと建築

Takehiro Hayashiyama

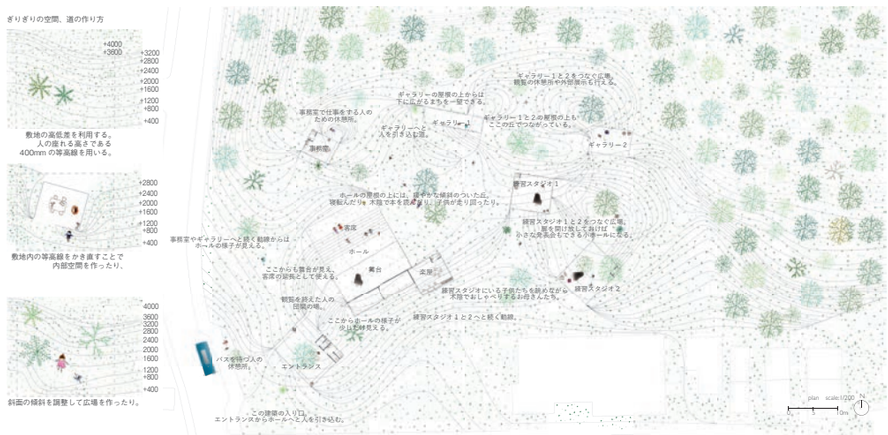




講評:敷地について綿密にリサーチを行い、地域に残る伝統的なお祭りに着目した案である。まず、衰退しつつある地方都市での公共空間のあり方について踏み込んで提案している点を評価した。指定された敷地を大きくはみ出し、周辺の山まで含めて一体的な計画とする大変意欲的な提案であり、また、お祭りをきっかけとして町全体の活性化を予期させる説得力がある。人と建築と環境が一体となった大変豊かな提案である。(近藤)

村松かなえ ｜ 地形に続く建築

Kanae Muramatsu



講評:林山案とは違ったアプローチで、環境と公共空間についてよく考えられた案である。地形をデザインすることで町と建築と環境を一体的につくろうとしており、抽象絵画のような美しい平面図がそれをよくあらわしている。階数では説明しきれないため高低差で平面図が描かれているが、それは自然に近い場所ができているという事のように思われる。造形力とともに、空間の強度に対する感覚も優れていると感じた。(近藤)

青木弘司ユニット Koji Aoki Unit

富浦寮 —小学校の臨海宿泊施設—

Tomiura Dormitory – Seaside Lodging for Primary School

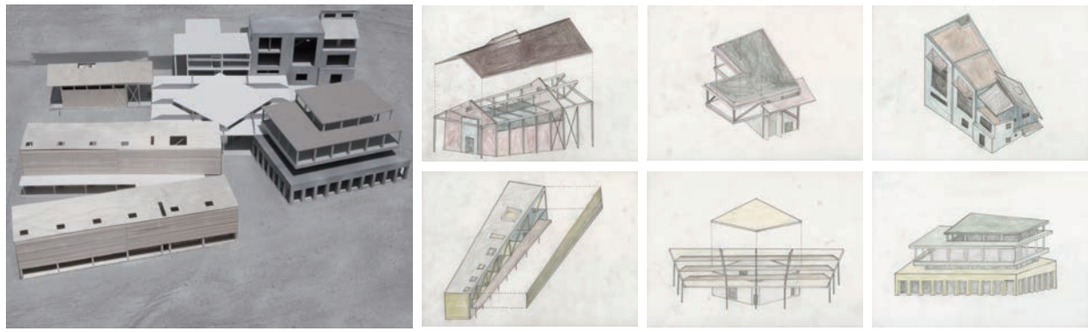
所在地:千葉県南房総市富浦町富岡字新宿 50
敷地面積:5,282.41 ㎡
想定規模:1,300 ㎡程度
用途:小学校の臨海宿泊施設
必要諸室:生徒用浴室、食堂、集会室、宿泊室、保険室、水泳本部室など

内房に面した温暖な気候で知られる千葉県南房総市富浦町。西は大房岬によって小さな湾を形づくり、東、北、南の三方は山で囲まれている。ここに、東京都内の小学校の行事として年に数回だけ利用する臨海宿泊施設を設計する。この富浦寮は、小学生にとって、非日常の舞台である。この富浦寮の経験が、生徒の特別な思い出になるような、魅力的な空間を提示して欲しい。

The Tomiura district of the city of Minamiboso, located at the southern tip of the Boso Peninsula across from Tokyo, is known for its warm climate. To the west, Cape Taibusa creates a small bay. It is surrounded by mountains on the east, north, and south. Design a seaside dormitory here to be used for trips several times a year by a Tokyo primary school. For the students, this Tomiura dormitory will be a special place. Design an attractive space, so that their memories of their experiences here will also be special.

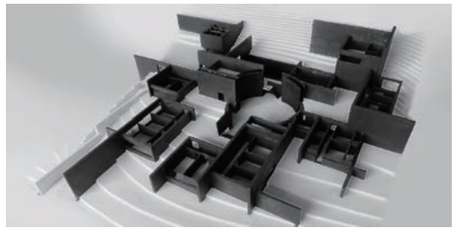
大村高広 ｜ 富浦の形式群

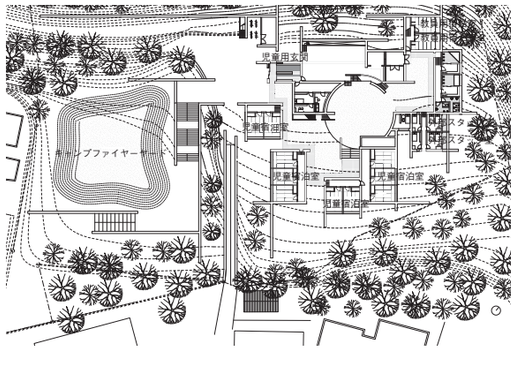
Takahiro Ohmura



國分元太 ｜富浦の前景—Architecture as the foreground

Genta Kokubu





講評:「シェア」に代表される場の共有やコミュニティの変革の問題は、昨今の建築界の主要なテーマとして取り上げられているが、それらの問題から一旦距離を置いた上で、建築に何か可能なのかを問う課題である。臨海学校というプログラムゆえに、児童のスケジュールは分刻みに定められている。必要諸室の面積や位置関係などはダイアグラムを用いて厳密に整理することを求めた。このような条件のもとで、予定調和的な日常を崩し、非日常的な不確かさを取り込みつつ、児童の大切な思い出に寄与するような、空間の冗長性や持続性を獲得することはできるのだろうか。優秀作品として選定した2作品は、このようなテーマに真摯に向き合いながら、その結果として、新しい自律性を表象した、あり得べき建築の姿を描き出そうとしている点が素晴らしい。(青木)

安原幹ユニット Motoki Yasuhara Unit

快適な建築

Delightful Architecture

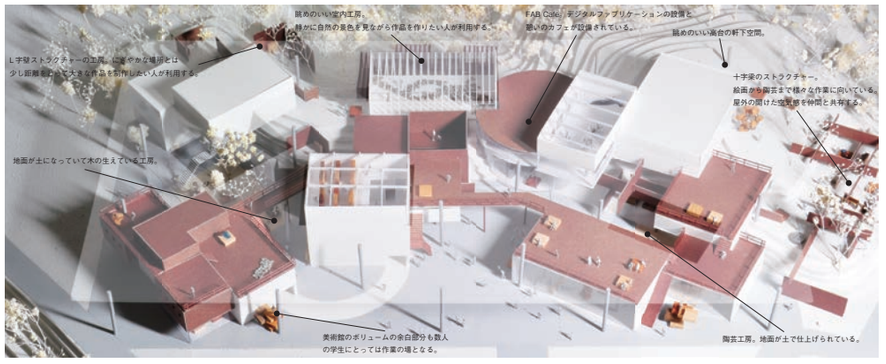
敷地・用途・規模は自由ですが、以下の条件を満たすこと。
①公共性をもつ建築であること。個人住宅の類ではなく、公共性を持つ建築を対象とする。個人的快適さではなく、必ず複数の人の間で共有しうる快適さを提案。
②具体的なシチュエーションを想定すること。住むための場、働く場、学びの場など、どのような周辺環境の中に建ち、誰が利用するかなど、徹底的に具体的に考える。

背景には、エネルギーの問題がある。建築だけでなく情報産業や家電・自動車業界など多分野で低エネルギーの都市設計に乗り出しているが、描かれている建築の姿は従来のものと変わらない。この現状を対し、建築における環境・エネルギーの問題から新しいアプローチをしたい。より空間的・身体的観点から新しい「空間」と新しい「快適さ」を同時に示し、生き生きとしたアクティビティを許容する建築の探求を目的とする。

In the background is the question of energy. Beyond architecture, the IT and automotive and many other industries are working to enable low–energy urban design. But the shape of architecture remains the same as always. Under these circumstances, I want to try new approaches, starting from the questions of energy and the environment. From a more spatial and bodily point of view, imagine a new kind of space at the same time as a new kind of pleasure. The goal is architecture that allows vibrant activities to take place.

宮坂岳見｜ 美術のすべて

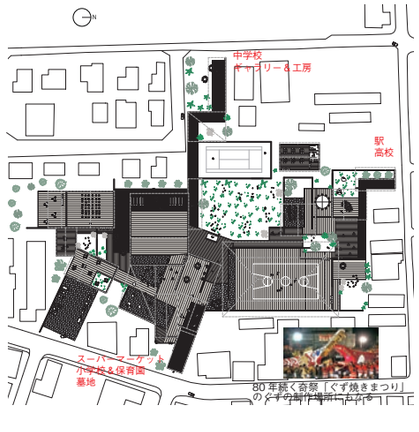
Takemi Miyasaka



講評:芸術系大学の工房と附属美術館を、一体の建築としてつくる提案。制作の場と発表の場、日常の場と非日常の場といった対比的な性格を持つ空間を組み合わせながら、最終的に、全てが工房でも美術館でもあり得るような、見慣れない全体を作り上げたことを評価したい。空間の大きさと人の密度の相関が、その空間の快適さに関係するのではないかという仮説のもと、性格の異なる空間同士の繋がりを地道にスタディした。最後の最後に全体に大屋根を架けるというので、安易過ぎると僕は止めたのだが、結局架けた。結果的に、なかなかいい建築である。(安原)

日野雄介 ｜ まちを横断するズレ

Yusuke Hino



講評:地方都市の公共スポーツ施設の提案。閉じられた巨大なボリュームとしての体育館ではなく、壁と屋根がつくる領域を巧みにずらしながら連続させることで、極めて身体に近い空間を手に入れた。またその手法は同時に、まちに溶け込み、都市空間の一部とも言えるような環境をつくり出すことにも寄与している。自由に通り抜けられること、身体を動かす体験をする施設であること、また災害時に多くの市民を受け入れることなど、身体的な快適性という切り口から、よくあるプログラムの公共施設を再解釈し、狙い通りの魅力的な空間の提案につなげた力を評価する。(安原)

岩岡竜夫ユニット Tatsuo Iwaoka Unit

〈外景〉としての都市住宅—建築と街並みとの関係を再考する—

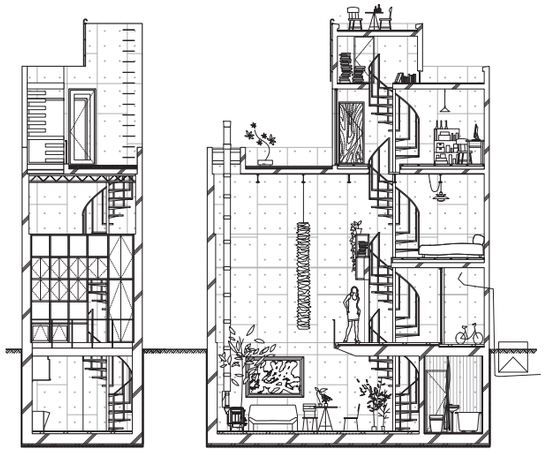
Urban Residence as Exterior – Rethinking the Relation Between Architecture and Streetscape

建築作品を一歩引いて眺めてみる。住宅によって新しい街並みの構築は可能か。具体的な街並み景観を構成している著名な〈住宅作品〉を1つ選定し、その住宅と周辺環境との関係を分析し、さらにその住宅作品に近接する敷地を借りて、そこに新たな住宅を提案する。

Take a step back to look at a work of architecture. Is it possible for a residence to create a new streetscape? Select one well–known work of residential architecture that comprises an element of a specific streetscape, and analyze the relation between that work and the surrounding environment. Then borrow a lot that adjoins the selected work and propose a new residence there.

堀越一希｜都市スパイ住居

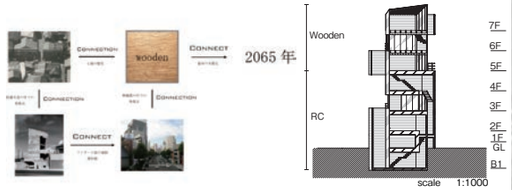
Kazuki Horikoshi

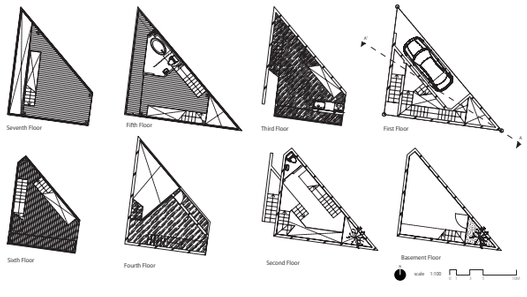


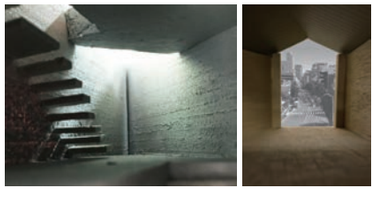
講評:単に新しい居住空間を提案するだけではなく、現状の街並みを十分に理解し、同時に隣接する著名な住宅作品に対峙するものとしての住宅を新たに設計することを求めた。特殊な住宅を含む一般的な街並みという、アンビバレントな環境の中に、どのような文脈（ストーリー）を打ち立て、建物の外形とその内部空間を構築できるかを課したものである。堀越案は、コンクリートの「住吉の長屋（1976）」の斜向いの敷地を選定し、外観上は左右に隣接する住居のヴォリュームとほぼ連続しながらも、内部に巨大な吹き抜け空間（ヴォイド）をつくることで、「住吉の長屋」の中庭空間との対比を生み出した。
齋藤案は、すでに半世紀前に建てられた塔状住居「塔の家（1966）」に対して、幹線街路を隔てた反対側の三角形の敷地に新たな住宅を提案。街路への視線の抜けを踏襲しながらも上層部を木質化することで、マテリアルによる新たな街並形成の可能性を提示した。
この2提案のほか、郊外の分譲住宅地で「今宿の家(1978)」と背中合わせに建つ北向きファサードの住宅、高級住宅街にある「上原通りの住宅（1976）」の正面に建ち架構を露出する住宅、「シュレーダー邸（1924）」に対峙して家具をモチーフとした住宅、コンクリートと木の混構造による箱が群をなす「松川ボックス（1971）」の増築など、それぞれ深いリサーチに裏付けされたユニークな提案がなされた。（岩岡）

齊藤誠司｜時をつなぐ家

Seiji Saito







山代悟ユニット Satoru Yamashiro Unit

D.I.Y. urbanism:都市と里山を結ぶ二地域居住を豊かにするための設え

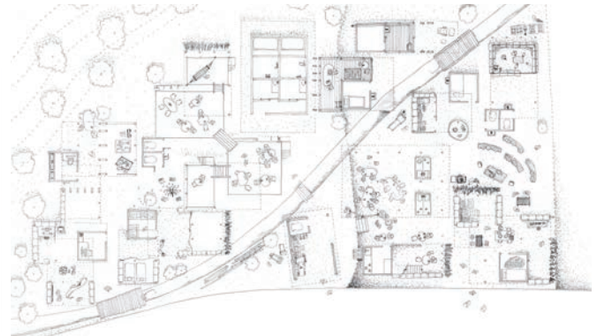
D.I.Y. Urbanism: Enriching a Dual Lifestyle Between City and *Satoyama*

「D.I.Y.=Do It Yourself」は、第二次世界大戦後のロンドンの戦後復興の際に、都市を自分たちの手で復興しようというスローガンの中から生まれ広まった。人々の暮らしを消費一辺倒のものから取り戻す「復興」に相応しい言葉である。敷地は、都市と里山を結ぶ二地域居住の推進を通じて、里山の環境を保全することに取り組むNPO南房総リパブリックの活動の場千葉県南房総市。二地域居住という生活を豊かにする設えをデザインして欲しい。条件は「自分たちで実際につくれること」。

The term D.I.Y. (Do It Yourself) was popularized in London after WWII when the citizens of the city took it upon themselves to rebuild and adopted it as a slogan. It is an appropriate expression for "recovery" that rescues people's lives from exclusive dedication to consumption. The site is the city of Minamiboso, where the NPO Minamiboso Republic is working to preserve the *satoyama* (intermediate wooded zone between village and wilderness) environment by encouraging people to live in two places – the city and a *satoyama*. The assignment is to design something to enrich this dual lifestyle. A condition is that they can make it themselves.

林山赳大 ｜ 野菜建築

Takehiro Hayashiyama



講評:南房総の里山の耕作放棄地に、プレファブ化されたコアを分散配置し、屋根を架け、様々な設えを利用者たちが自らD.I.Yする農業コミューンのあり方を提案。短期利用の体験型の利用者から、本格的な就農者までがひとつのコミュニティを作り上げていく姿を想像力豊かに構想している。「できてしまう」集落の姿をどう「計画」するのかというのは難題であるが、その課題に正面から取り組んでいるところを評価した。（山代）

柳原 仁 ｜

Jin Yanagihara

講評:耕作放棄地となった棚田に既成コンテナを手掛かりとした最小限の生活空間を配置し、それをゆるやかに繋ぐ蛇行する木を編み込んだ屋根を掛けている。もとの棚田は再び耕され畑として生まれ変わる部分と、自然に帰っていく耕地が市松状に配置される。建築的な生活の場だけでなく、農のランドスケープの提案としてイメージを喚起させられる提案となっていた。（山代）

Activity
01

千葉の建築学科合同講評会 C リーグを野田で開催

理科大の酒井健太郎さんが最優秀受賞！

高瀬結惟（岩岡研究室修士1年）

2016年2月22日、第8回Cリーグ（千葉4大学合同講評会）が本校にて行われました。

Cリーグの誕生

Cリーグは2008年、千葉県内に建築学科を持つ4大学（千葉大学、千葉工業大学、日本大学生産工学部、東京理科大学理工学部）から始まりました。

Cリーグ共通の「自ら卒業した小学校を改築する」という課題は、もともと千葉大学で出題されていたものでした。Cリーグが開催される前年、千葉工業大学の古市徹雄先生が千葉大学で非常勤講師として、この課題を担当したのをきっかけに、自分の大学でも出題しました。そこで両大学の考え方や表現方法などの違いに刺激を受け、古市先生と交流の深かった日本大学生産工学部の大内宏友先生、本校の川向正人先生に呼びかけ、4大学合同講評会が開催されました。翌年からは東京電機大学も加わり、千葉5大学合同講評会、称してC（千葉）リーグが誕生しました。

教員・クリティークが多視点から作品を議論

今年は千葉大学、千葉工業大学、東京電機大学、東京理科大学の4大学が参加し、各大学から優秀作品4点ずつ計16作品の発表が行われました。

ゲスト・クリティークとして、元倉真琴先生、古市徹雄先生（欠席）、神成健先生、高橋堅先生に参加していただきました。

例年、出場者たちは各大学のプライドと誇りを持ってクオリティの高い作品を模型やプレゼンボードなど各自持てる力を精一杯発揮してさまざまな方法で表現します。会場には日頃の設計授業では見られないクオリティの模型やボートなど各大学の力作が出揃い、その光景は圧巻です。

発表前、出場者たちは発表前、最後の最後まで模型やパワーポイントを修正、更新し、自分の力を出し切れるようギリギリまで努力します。発表前、緊張でガチガチだった発表者たちも講評の時には先生方の鋭い質問に食らいつき、自分の思いを、設計の意図を一生懸命伝えていました。その姿、姿勢は先生方からの厳しくも優しい質問を引き出し、講評会は終始和やかな雰囲気で行われました。

千葉大学から順に熱のこもったプレゼンテーションから開始しましたが、プレゼンテーション5分＋質疑応答7分の予定を越えて、学生たちの発表、そしてその気持ちに答えるように先生方からの鋭い質問や作品の良さを引き出すような質問、学生への援護射撃など予想以上に白熱しました。同じ作品に関しても先生によって捉え方や評価する箇所、考え方によって評価はさまざまであり、学生をよそに先生方同士で白熱した議論が繰り返される場面もありました。

社会的な問題について「小学校」をきっかけに考える

今年の案は、少子高齢化によって小学校が必要なくなった時に廃校にするのではなく継続可能施設とする案、地域の生涯学習センターや文化施設など社会問題や地域性を踏まえて長期計画を考えた案、環境問題の面から地域の素材を活かして再生可能エネルギーを利用する案、地域住民や児童がセルフビルドで学校を建てたり減築したりする案など、考え方や提案が例年に比べ幅広い印象を受けました。

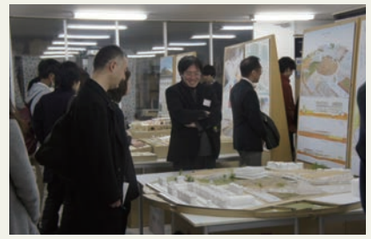
例年は、学校の建つ立地を活かした提案や児童の動きや視線の抜けに着目をした案が多い中、今年度は案が幅広く、捉え方も多様化したため、議論が白熱したと思います。出場した学生たちはもちろん、見に来ていた学生にとっても先生によって評価基準や捉え方が異なり、それを見聞きでき、また、各大学の特徴や評価基準が異なる作品を通じて見ることのできた、こういった機会は学生たちにとって良い刺激になったと思います。

経験が活力に

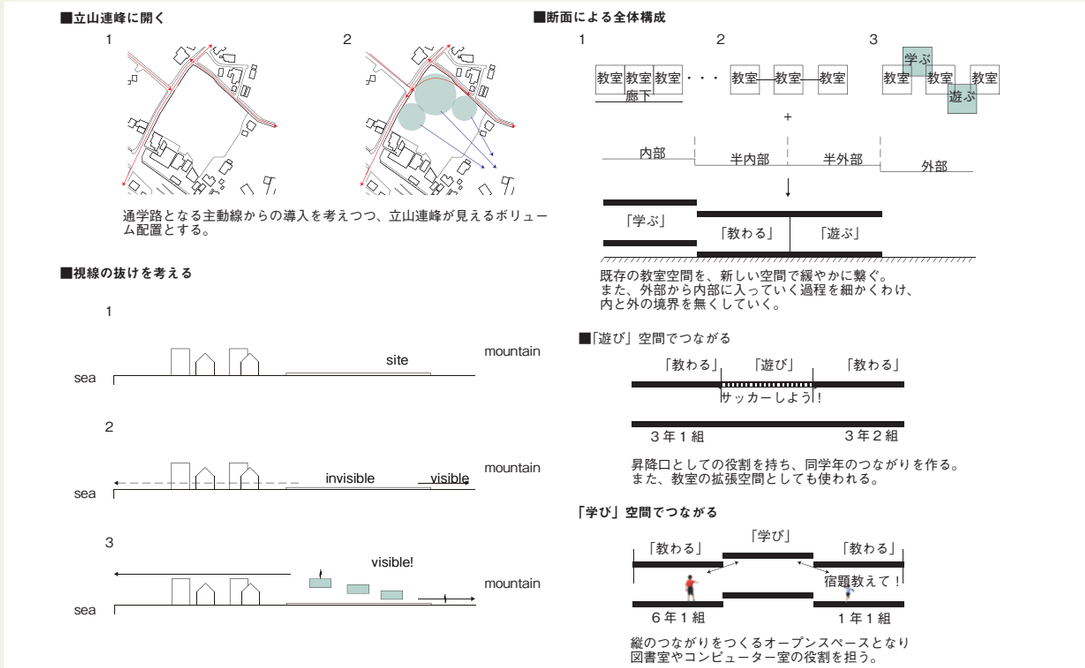
今年はCリーグ創設当時から参加していた川向先生が理科大学の教授として参加する最後の回であり、さらにホスト校ということで、今年のCリーグ出場者4名には例年とは違うプレッシャーがあったと思います。そのなかで酒井健太郎くんが「余白で育つ色」でみごと、最優秀賞に輝き、川向先生に最後の華をプレゼントしてくれました。

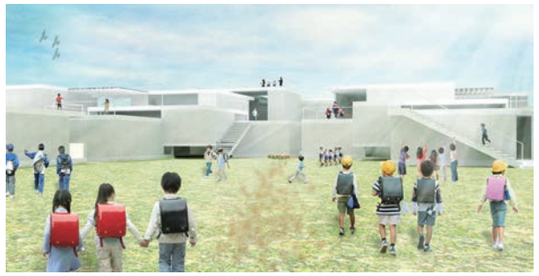
いつもとは違った環境での講評会は参加した全員にとって良い経験になり、今後の活力に変わっていくと思います。ここで得たものを今後に活かして、さらなる飛躍を期待しています。そして、この合同講評会がさらに広がり、千葉にある大学だけでなく、各地域で様々な大学が意見を交わし、全国に広がっていくことを願います。

学生によるプレゼンテーション


ゲストクリティーク、大学教員による審査風景

提案した模型を囲んで質疑応答が行われた





最優秀となった酒井健太郎案「余白で育つ色」（3 年生第 3 課題 51 頁）

Activity
02

ラーニング・アーキテクチャー 2015
建築、学びの冒険

関東11大学の建築設計教育の競演

齊藤誠司（安原研究室修士2年）　森島英子（安原研究室修士2年）

「ラーニング・アーキテクチャー2015｜建築、学びの冒険―大学の建築設計課題の動向展」が11月20日～12月26日、東京ミッドタウン・デザインハブで開催されました。武蔵野美術大学の企画により本校を含む11大学が招致され、各大学の建築設計課題が展示されました。
建築は社会の動向や技術革新と共に成長し、変化していくものであり、建築教育の現場では現代社会の動きを反映した取り組みが始められています。
関東圏を中心とした建築系大学の設計課題が出展された本展覧会では、新たな建設技術、デジタル技術の利用した造形表現、住民、利用者をプロセスに巻き込む計画・設計など、多様な試みが一同に鑑賞することができ、建築家のあり方や建築そのものを考えさせるものとなっていました。
展示は「課題とその意図」「設計の進め方と指導」、それに対する学生との「エスキス（スケッチやスタディ模型）」、「最終成果物（模型・図面・グラフィック）」を中心に、各大学が独自の方法で展示・解説しています。
建築学生や建築教育に関わる方々にとって刺激となったことはもちろんのこと、これから建築系大学に進学志望の受験生が、実際の建築教育の学びを知り、興味を持つことができる場となりました。
また会期中には出展大学の教授陣のレクチャーに加え、東京藝術大学准教授の中山英之先生によるワークショップとレクチャーが開催されました。これらのイベントも建築学生だけでなく、これから建築を学ぶ学生も楽しめる大変ユニークな内容で、大盛況を収めました。

会場風景。理科大は１年生の「空間デザイン及び演習」より「ピクニック」と「光の箱」を出展。手前は、これらの課題をもとに出版された『空間練習帳』。奥のモニタは、「光の箱」の映像を映す

「光の箱」の過去の秀作。作品を 35mm のポジフィルムで各自が撮影しスライド化

11 大学の教員、学生が集うオープニングの様子

REPORT 1：課題の多様さに驚き

設計課題は、建築系の大学では必ず行なわれているものですが、そこには大学ごとに異なる「テーマ」、「問題意識」、「教育的指導」が内包されており、各大学のキャラクターを表しています。しかし、実際に他大学の教育を知る機会はほとんどなく、それらはブラックボックスのような存在となっています。
本展覧会では、ブラックボックスがクリアになり、各課題をフラットに比較しながら鑑賞できる非常に新鮮な展示となっていました。社会のリアルな問題・要求に向き合う課題や最先端の技術を活かした課題、建築よりも身体に近いスケールに対する課題といったように各大学ごとに千差万別で、楽しく鑑賞出来ると共に、各課題のテーマを自分の問題として考えさせられるものでした。また、展示風景も印象的であり、与えられたテーブルの上を各大学が自由に使って展示構成することで、展示方法にも大学のキャラクターが現れ、会場全体で日本の建築教育の多様さと奥深さが感じられるものとなっていました。
本学は、「空間デザイン及び演習」で出題された課題を出展しましたが、理工学部建築学科の伝統ともいえる課題を他大学と並置して客観的に比較できたことは、非常に面白く興味深いものでした。「空間デザイン」の課題が、いかに「空間」自体を考えたものであるかが感じられ、私たちのキャラクターを生み出している大きな要因であると再認識できました。この課題が伝統である限り、理工学部らしさは生きていくのではないでしょうか。
本展覧会は出展者として自らが学んだ教育を顧みるきっかけになったと共に、展示を介して今後の建築に対する思考の一端を垣間見ることができるよい機会になったと考えています。（齊藤誠司）

会場設営を終えて、記念撮影する安原准教授（右）と学生

REPORT 2：空間とは何か、という教育法を再認識

今回の展示を通して普段あまり目にすることのない、他大学のユニークな課題や表現方法などに大変刺激を受けました。建築家の仕事の幅が多様化しているように、教育の現場でも直接社会と関わりながらの取り組みや、最先端の技術が学びの幅を広げていることを実感しました。そうした中で私たち東京理科大学理工学部の「空間デザイン及び演習」の展示はある種そういった流れとは異なる方向性の展示であったと思います。今まで受験勉強していた高校生、予備校生達が初めて建築に触れるスタートラインとしての授業、「建築とは何か」「空間とは何か」をどう学んでいくのか、これは今も昔もこれからも変わらずに非常に難しい問題だと思います。私もこの授業に育てられたひとりです。図面を引いたり模型をつくったりできると楽しみにしていた１年生の頃、与えられたのはひたすら段ボールをくりぬいたり、紙を張ったりして光の空間をつくる課題、チーム内でときには言い合いになりながら大まじめにピクニックをする課題。他の学科にも不思議がられる授業の目的を当時はきちんと理解していなかったように思いますが、知らず知らずのうちに「空間とは何か」「空間をつくるとは何か」を学んでいることに気がつきました。法規を守って設計をすること、きちんと図面が書けることはもちろん重要だと思います。しかしそれ以上に、これから建築を学んでいく上で「空間」に対しどう接するべきか、そしてそれを思考することが面白いと感じる心構えは、その後さまざまなことに直面する自分を奮い立たせてくれる大切な基盤となっていると思います。今回この展示に携わったことで、そうしたことを早くから学べる環境にいたことを改めて感じました。社会情勢や景気がダイレクトに反映される建築という職業だからこそ、初めてそれを学ぶ学生に対する教育は今後も考えていくべきだと思います。そしてこの「空間デザイン及び演習」が理工学部の学生にとってその建築へのスタートラインの授業としてずっと続いていく授業であってほしいと思います。（森島英子）

新任教員紹介

垣野義典
（准教授）

Yoshinori Kakino/1975 年京都生まれ /1999 年東京理科大学理工学部建築学科卒業 /2001 年東京理科大学大学院理工学研究科建築学専攻修了 (初見学研究室) /2004 年東京大学大学院工学研究科建築学専攻修了（長澤泰研究室）/2004 ～ 2008 年東京理科大学理工学部建築学科助教 /2008 ～ 2011 年フィンランド・アアルト大学（旧ヘルシンキ工科大学）客員研究員 /2011 ～ 2016 年豊橋技術科学大学建築・都市システム学系准教授 /2016 年～現職

この2016年4月より東京理科大学理工学部建築学科の准教授として着任しました。野田キャンパス2号館4階は私が修士課程まで過ごし、その後も4年間助教として過ごした特別な場所です。その場所に3度ご縁をいただいて戻ってきたこと、20歳下の後輩達の成長に関われることをとてもうれしく、光栄に思っています。

私の専門は「建築計画学」といって、実際の建築空間を利用する人々がどのような行動をしどのような心理的状況に置かれているかを読み解くことで、建築の設計に活かしていこうとする分野です。

1950年代、日本中で必要とされていた住宅、学校、病院の環境改善を目下の責務とし、東京大学・吉武泰水先生が中心となって確立されました。あまり取り上げられませんが、当時から「空間利用者」、特に最も社会的に困窮していた子どもや病気を抱えた人々、住環境を欲する人々など「弱者」の環境をなんとか良くしようという立場にたった分野です。

建築計画研究は、基本的には実地調査（フィールドワーク）から始まります。空間を利用している人達を観察・洞察し「なぜこの人達は、このような空間の使い方をするのか?」、その因果関係を考察するのです。

研究テーマは大きく、教育系、住居系、防災系にわかれます。教育系では、2005年からスウェーデンやフィンランド、オランダなど海外の魅力的な空間をもつ学校、保育園、児童館、図書館を研究してきました。それぞれ日本とは文化も歴史も異なる中で培われた魅力をもち、日本で建築を設計する際に参考にできるものばかりです。特に学校建築や保育園は日本で変革期にあり、新しい建築モデルが求められています。子ども一人一人が学習しやすい環境を得ることができるよう、少しでも研究結果を日本の社会に投影していきたいと思います。

住居系は、日本に居住している外国の人々が古い団地でどのように生活し住みこなしているかを、実際に自宅にお邪魔して調査してきました。また近年、日本にやってくる外国人観光客の宿泊場所として、「ゲストハウス」が注目されています。そこで、京都の町屋を改装したものや東京都心部で倉庫や商店街の一角を改装したゲストハウスなどに、実際に宿泊しながら実測したり、観光客にヒアリングしてその魅力を分析しています。

防災系は、東北や熊本、神戸など大きく被災した場所で起こった沢山の問題を調べ、今後、大災害時にどのように避難所を円滑に運営するか、もしくは避難生活を街全体でどのように支援していくか、その方策をたてる研究を行っています。

研究室のメンバーはこのようなテーマのもと、一年中海外をふくめた色々な所へ調査に出かけ、お互いに協力して研究を進めています。調査中、自分の予想もしていなかった事象をみつけ、新たな視野と視点を獲得できることが、フィールドワークの何よりの魅力だと思います。

垣野義典研究室ができました！

2016 年 4 月、研究室発足。第 1 期生メンバーと、フィールドワークの途中で立ち寄った「駒形どぜう」にて。江戸時代からの食べ方そのままです

Andrew Burgess
（助教）

バージェス・アンドリュー /1976 年ニュージーランド生まれ /2000 年オークランド大学 NICAI 学部建築学科卒業 /2000 ～ 01 年、2008 ～ 10 年同学科非常勤教師 /2006 ～ 2007 年 Pascall+Watson 設計事務所（ロンドン）/2008 ～ 10 年 Architectus 設計事務所（オークランド）/ 2012 年東京大学大学院新領域創成科学研究科社会文化環境学専攻修士課程修了 / 2015 年同大学院工学研究科建築学専攻博士課程修了 / 2016 年～東京理科大学理工学部建築学科助教（伊藤香織研究室）

2016年4月から東京理科大学理工学部建築学科の助教として伊藤香織研究室に着任しました。

ニュージーランド出身。大阪とロンドンにも住んだことがあり、さまざまな環境や文化に触れてきました。考え方、テクノロジーや情報などにより新しいライフスタイルが生まれ、どこの街でもコミュニティーが変化し続ける姿を感じてきました。

現在人口の変化や新しいテクノロジーなどにより、人々のつながり方が変化してきています。そして、コミュニティーと建築や都市環境の関係も変化してきています。建築は、建物だけではなくこれらのことにどのように関わっていくかが重要だと思います。

現在の研究では、都市環境の構造を分かりやすくするために、社会学、経済学、地理学、ネットワーク理論などからのアイデアを採用しています。これらの分野からのアイデアを活かし、人々が都市環境とどのように関係しているか貴重な情報を得ることができます。私は日常生活の中での人々の行動が都市環境を構築するのにどの様に関係しているのかということに興味をもっています。同時に建築はこれらの分野にどのように貢献できるかを検討することも必要だと思っています。

社会が直面している現在の問題を理解するために、GIS、ビッグデータ、プログラミング、社会ネットワーク分析などを使用することによって建築学科に貢献したいと考えています。お金、物品や人の移動などのデータは近年飛躍的に増加しています。今までより非常に細かい分析ができるようになってきました。私は現在食料の買い物行動が与える日常生活への影響を研究しています。食料は日常生活の重要な一部を構成します。人の動きは1つに限定されるものではありません。社会ネットワーク理論で人々のさまざまな動きや行動で都市とのつながりのを見ることができます。ライフスタイルの変化に応じて環境が社会一体性を維持し、新しいコミュニティーを形成するには、これに反応する必要があります。同時に、ライフスタイルは、街の環境の影響を受けます。建築と都市デザインの役割は複数のライフスタイルをサポートするための機会をつくることだと思います。生徒は建築と都市施設を設計するだけでなく、コミュニティーと社会的な問題に対しどのように解決していくかを考えることが大切だと思います。

有井淳生
（助教）

Atsuo Arii /1984 年神奈川県生まれ /2007 年東京大学工学部建築学科卒業 /2008 ～ 09 年 OMA ／ Office for Metropolitan Architecture（ロッテルダム）/ 2010 東京大学大学院新領域創生科学研究科修了 /2010 ～ 15 年 CAt ／シーラカンスアンドアソシエイツ /2015 年アリイイリエアーキテクツ設立 /2016 年～東京理科大学理工学部建築学科助教（安原幹研究室）

安原研究室の助教に４月より着任しました。私はこれまで建築設計の実務に７年間携わってきました。これまで関わってきた建物は、住宅、駅、工場、学校、オフィスなど、プログラムはさまざまです。プログラムについて、敷地について、プロジェクトの背景について学ぶ。新しく設計を始めるときは、学生時代の課題に取り組むことと似ています。異なるのは、課題では建物が実際に建ち上がることはない、ということ。学生の中には自分がやっていることが実際の設計の仕事にどうつながるのか、不安になる人もいるかもしれません。しかし、実務の設計をするときでも、建物の完成した姿を見ることができるのは最後の最後です。図面を描いては模型やCGをつくるというサイクルを繰り返し何度も行い、現場で実物を想像しながら細部のスケッチを何枚も描き、設計した建物がやっと建ち現れたと思ったら、あわただしく検査と引渡しが行われ、あっという間に建物は手元から離れていきます。

つまり設計ができるようになるためには、図面や模型やCGを見て、実物大の完成した姿をそこに見る想像力が必要なのです。そのためには実物と模型の間の行き来をすることが大事だと思います。学生時代にこのトレーニングを行い、基礎体力を養うことは非常に重要です。幸い、東京理科大学理工学部建築学科は、１年生の「空間デザイン及び演習」でさまざまなスケールの空間にふれることから設計の授業がスタートします。そのこともあり、理科大の学生は臆することなく手を動かし、アウトプットをする腕力があるという印象を受けます。

大学という場は、都市や建築の未来について考えることができる場だと思っています。未来を考えるということは、まず過去を学ぶというところから始まる。じっくり腰をすえて都市と建築の歴史について勉強することも、学生時代にしかできないことのひとつです。私も設計と研究の指導を通じて、明確な答えがない未来について、学生と一緒に考えていきたいと思っています。

体験と創作を重んじる歴史・意匠
川向正人研究室
［建築史・建築論］

Kawamukai Lab.
History and Theory of Architecture

Masato Kawamukai,
Professor

①退任記念講義「近現代の建築とまちの再考」祝賀パーティー（2016 年 5 月 14 日）
②記念冊子『川向正人教授の業績と川向研究室 23 年の軌跡』を刊行（同上）
③小布施まちづくり研究所の役場からまちなかへの引っ越し（3 月中旬）

近代の創造神話・機械美学を解体し「場所」「身体」の視点から建築を再構築するために、調査研究から各種のワークショップ（WS）まで幅広く活動しています。社会との多様な接点を求めて大学の外に飛び出し、長野県小布施町に「東京理科大学・小布施町まちづくり研究所」を創設して、行政や住民と協働するまちづくりに挑戦しています。大学の研究室では、建築史と建築論をむしろ理念的に、純粋に研究しながら、まちづくり研究所では、風土や生活環境やコミュニティといった生きた現実と取り組み、それを守り育てていくための研究を続けています。今年度は、町内の中学一年生の全員を対象に、扇状地の地形とそれを利用した昔の用水路との関係を現地で体験学習する WS を実施しました。なお、川向教授は 2015 年度末で退任です。

2015年度の研究テーマ
- 隈研吾における反オブジェクト概念
- 絵図の分析による小布施の水路とみちの研究
- 建築書に描かれた住宅における家具の研究
- 三州における瓦の生産形態
- 北信地域における空き家再生の現状と課題
- 小布施町における景観形成に関するコンセンサスの醸成過程と展開

建築デザインの理論と実践
岩岡竜夫研究室
［建築計画・意匠・設計］

Iwaoka Lab.
Architectural Planning and Design

Tatsuo Iwaoka,
Professor

① 2015 年度謝恩会
② TDW2015 参加作品
③日本建築学会大会 2015（関東）で〈山田守展〉の会場デザイン

すべての建物は「寸法」によってその形や空間が決定されています。建物や空間の寸法（サイズ）は、人びとの思考や行動に対してさまざまな影響を与えています。私の研究室では、特に建物のスケール（大きさ）やモジュール（単位空間）に関する調査をベースとして、建築物、外部空間、街並、集落、都市空間などにみられるデザインの解読を試みています。そうした調査研究と並行して、住宅を中心とした実際の設計活動を展開し、新しい建築空間の創造に挑戦しています。

2015年度の研究テーマ
- 住宅建築に関する研究および設計
- 建築の構法および素材に関する実践的研究
- 近代建築作品および伝統的集落に関する調査研究

史的連続性のなかで建築を捉える
山名善之研究室
［建築意匠・建築史］

YamanaLab.
Architectural Design and History

Yoshiyuki Yamana,
Professor

①住宅見学および懇親会（建築家阿部勤氏自邸にて）
②沖縄へのゼミ旅行にて國場組の方々をお招きしての勉強会
③ 2015 年度山名研究室 OB・OG 会

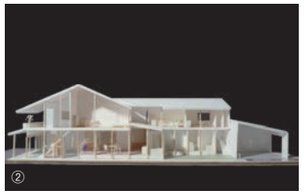
2015年度の研究テーマ
[卒業論文]
- 神奈川県立近代美術館・鎌倉館にみるル・コルビュジエの影響
- セイナヨキ・シティ・センターの建築群における価値の変遷
- ル・コルビュジエの展示空間における自然採光手法の研究
- オリンピック競技会場の用途・改修変遷におけるレガシー継承手法に関する研究
- タイにおける坂倉準三建築研究所による学校建築の現況調査
- 1937 年パリ国際博覧会における 3 つのパビリオン施設に関する考察

2014年4月にスタートした理工学部山名研究室には、理工学部山名研1期生となる卒研生8名と院生1名が集まり、旧山名研究室の院生も加わりゼミ活動を行いました。春の年度スタート時には、旧初見研究室の片付けから始まり、研究室ペンキ塗り、本棚、机づくりを行いました。電気配線工事のため、GWまでは照明はなく、夕方、日が落ちると全員終業という状況でした。山名研究室は近現代建築保存活用に関する調査を主に行っていますが、フィールドをアセアン諸国に拡げ14年度はカンボジア調査、インド調査などを行いました。6月26日～30日に理科大OBの建築家細矢仁さん協力による沖縄建築勉強会を兼ねた合宿を行い、瀬底島でBBQ、海水浴なども楽しみました。9月中旬からはソウルにてDOCOMOMO国際会議に併せて開催された国際WSに参加し、参加者全員が英語の討議にも果敢に挑戦しました。

三度の飯より、設計が好き!
安原幹研究室
［建築設計］

Yasuhara Lab.
Architectural Design

Motoki Yasuhara,
Associate Professor



①インド近現代建築の調査旅行
②新潟の町家改修プロジェクト
③広島へのゼミ旅行

2015年度の研究テーマ
[卒業論文]
- 厚みのある境界――インド近現代建築に見られる内外の関係性
- 「被災地における小さな公共スペース」の使われ方の変化と今後の展望に関する研究
- 現代木造建築における架構が空間に及ぼす影響

縮小社会の到来を背景として、日本における建築設計のフィールドは一見すると狭まりつつあります。しかしそうした時代だからこそ、設計のスキルを粛々と磨き上げ、それが真に求められているフィールドに分け入って有効に発揮することが、求められているのだと思います。本研究室では実社会との接点をもった活動を通して、都市空間や地域社会における建築設計の役割について思考を続けています。年間を通じて行うゼミは、単に個々人の論文や設計をまとめることを目的とするものではなく、設計をめぐる今日的なテーマをメンバーで共有し、議論するための場です。自由闊達な議論の中から、新しい建築空間のイメージや設計手法を開発していくことを目指しています。

都市への好奇心と創造性を培う
伊藤香織研究室
［都市デザイン］

Ito Lab.
Urban Planning

Kaori Ito,
Professor
写真：©Yosuke Suzuki

① OB/OG も集まる新年会
②芝公園でのピクニック
③学生有志による東京都庭園美術館での「あーととあそぶにわ」ワークショップ

2015年度の研究テーマ
- ●都市空間における高齢者の移動
- ●コミュニティサイクルの都市比較
- ●皇居周辺ランニングステーションの利用者評価
- ●地下鉄駅出入口付近の周辺案内図

21世紀は都市の時代と言われています。人びとの幸せな生活とサステイナブルな社会の実現のためには、都市がうまく機能していくようデザインされなければなりません。本研究室は、分析を通して都市の性質を捉え、デザインを通して都市のあり方を提案します。対象は、都市圏のような広域スケールから広場のベンチのような身近なスケールまで、インフラ整備や都市建築のようなハード面から都市ブランディング戦略のようなソフト面まで、広範にわたります。そのためにも、まず自分たちが積極的にまちに出て都市の喜びを発見し、都市の可能性を引き出していきたいと考えています。

照明よ、大志を抱け
吉澤望研究室
［建築光環境・照明環境］

Yoshizawa Lab.
Building Environmental Engineering

Nozomu Yoshizawa,
Professor

① 2015 年度ゼミ合宿風景
② 2015 年度 M2 修論発表
③ジェームズ・タレルの「光の館」にて

2015年度の研究テーマ
- ●LED を利用した美術館照明手法の研究
- ● 自然光の変動知覚を考慮した照明環境
- ●現象としての光照明知覚の仕組みの解明
- ● 次世代オフィス照明に向けた検討:明るさ感指標の提案
- ● フォトンマッピングを利用した照明・建築設計手法の開発
- ●有機EL照明を利用した新しい照明環境の検討

本研究室では、建築環境分野の中でも特に光に特化した研究をしています。光は建築空間の視覚的効果を考える上で欠かせない要素であり、また省エネルギー性といった観点から光の有効利用を検討することも重視されるようになってきています。さらに最近ではLEDや有機ELなど新しい照明器具の登場により、これまでになかった照明効果を生み出すような照明手法も可能となってきています。そうした中で本研究室では、さまざまなアプローチから光・照明に関する研究に取り組むとともに、国内外の光の建築の実地調査、研究室ゼミ合宿、他大学との交流など季節ごとのさまざまなイベントを通して、楽しく活発に研究活動を進めています。

建築環境から未来を見つめる
井上隆研究室
［建築環境・設備］

Inoue Lab.
Building Enviromental Engineering and Facilities

Takashi Inoue,
Professor

研究室夏合宿（長野県諏訪郡にて）

2015年度の研究テーマ
- ●建築外皮性能の向上による省エネルギーと快適性の両立
- ●先進的ガラス・ブラインド仕様による熱と光のコントロール
- ●先進的オフィスビルの空調システム運用実態
- ●ゼロエネルギーハウス実現のための太陽熱利用暖房・給湯システム
- ●住宅におけるエネルギー消費と住まい方
- ●建築におけるLCA（ライフサイクルアセスメント）

地球環境・都市環境の枠の中で、エネルギー資源をいかに効率的に活用し快適な空間・環境を創るかという研究を進めています。対象は、住宅の一室から超高層ビルなど建築全体、さらに都市や地球環境のスケールまでに及び、実験・数値シミュレーション・調査の各手法を駆使して、研究を進めています。具体的には、省エネルギーと快適性の両立を図る先進的窓システム、建築・住宅の環境負荷削減に関するテーマなどがあります。
2015年度は、修士2年6名、修士1年8名、学部4年12名の計26名が所属していました。空気調和・衛生工学会会長のお務めも2年目。研究する時も、遊ぶ時も、バイタリティにあふれ、たくさんの刺激のもとで活動しています。

地震に屈しない、明日へ
永野正行研究室
［構造力学・地震工学］

Nagano Lab.
Earthquake Engineering

Masayuki Nagano,
Professor
イラスト：肥田剛典

① 研究室ゼミ合宿の様子（台湾）
②ネパール地震被害調査（カトマンズ）
③木造耐力壁ジャパンカップ（静岡）

2015年度の研究テーマ
- ●首都圏に建つ超高層マンションの耐震性能評価と室内被害に関する研究
- ● 理論計算に基づく地震動予測と長周期地震動の発生メカニズムに関する研究
- ● 制振装置を付加した木造軸組架構の耐震性向上に関する研究
- ● 振動台搭乗実験とアンケート調査に基づく心理状況，行動難度に関する研究
- ●3次元立体フレーム解析に基づく杭基礎の損傷評価に関する研究

永野研究室では、震源断層での地震波発生から、大きく揺れる建物の中の人の体感までを総合的に調査し、地震に屈しない未来を目指し日々研究に励んでいます。超高層マンションの地震被害に関する研究では、建物の耐震性能評価から 3.11 地震時の室内被害、居住者の揺れの体感に至るまで、多角的な震災対策の構築を目指しています。木質建物の耐震性に関する研究では、実験と解析の両面から様々な検討を行い、次世代を担う制振装置の開発に取り組んでいます。理論計算による想定地震時における大都市部の揺れの推定や、地震時の液状化地盤における杭基礎の耐震性に関する研究、被災地における被害調査等も精力的に行っており、将来の大地震に備え被害低減のための研究を続けています。

構造設計者を育成するためには…

北村春幸研究室
［建築構造･材料］

Kitamura Lab.
Structural Design

Haruyuki Kitamura,
Professor

①北村研究室 OB が集う三友会を毎年開催
② 2015 年度ゼミ合宿（山中湖）

北村研究室では，動的外乱に対する構造設計に役立つ研究を主体としています。研究対象は、低層建物から超高層建物までとさまざまで、より安全な免震･制振構造の発展をめざし、日々、研究活動に勤しんでいます。研究室には約30名の学生が在籍し、研究テーマごとにグループとなり、先輩から後輩へと過去の蓄積が伝えられています。外部との研究会も多く、連携大学院である電力中央研究所の金澤客員教授をはじめとする研究者や、第一線で活躍する実務者との交流も盛んです。そのためか、修了生の多くは設計者の道を選択しており、構造設計者が育つ環境が、この研究室のどこかにあるようです。

2015年度の研究テーマ
- 免震･制振構造に関する研究
- 長周期地震動対策に関する研究
- 構造ヘルスモニタリングに関する研究
- 地震動作成手法に関する研究

都市を守る耐震設計法の開発

衣笠秀行研究室
［建築構造］

Kinugasa Lab.
Structural Engineering

Hideyuki Kinugasa,
Professor

①夏のゼミ合宿
②実大実験
③卒業式

首都圏直下型地震による莫大な経済損失の発生とそれにより引き起こされる深刻な環境破壊が懸念されています。建築物の耐震性能を、耐震工学だけでなく経済学の面から適切に評価し、必要な性能を確実に確保できる設計法の開発が求められています。本研究室では、「大地震」「都市機能維持」「建築物の修復性評価」「経済性」「性能間のトレードオフ関係」をキーワードに、

1) 大都市東京はどの程度の地震まで耐えられるのか?

2) 地震に強い都市はどうすれば実現できるか?

という2つの課題を掲げ、耐震工学および経済学の両面から、都市経済を支える建築物の設計法について研究を行っています。

2015年度の研究テーマ
- 機能維持性能を目標値とした耐震設計法の開発
- 2 次壁を有する RC 建物の耐損傷性能評価
- UFC プレースを用いた耐震補強法の開発
- 実大 5 層 RC 架構実験に基づく損傷評価法開発
- 実被害建物の機能維持性能分析
- 地震後の都市機能維持のための経済耐震性評価法

未来の安全を設計する

大宮喜文研究室
［建築防災･安全］

Ohmiya Lab.
Building Safety Engineering

Yoshifumi Ohmiya,
Professor

①秋のソフトボール大会
②卒業式後の謝恩会（野秋助教、写真右）

2015年度の研究テーマ
- 通路における群集歩行特性に関する実験的研究
- 建物火災時における居室避難設計法の構築
- 天井流の水平伝播性状に関する研究
- 複数区画間の延焼拡大性状に関する研究
- 散水設備の効果を考慮した初期火災時の延焼拡大性状に関する研究
- 地震により損傷した区画構成部材の耐火性能に関する研究
- 初期火災時における視覚的異変感知に関する研究

建築形態の変化や社会的ニーズに対応するため、建築空間が肥大化、複雑化すると共に、建物に使用される材料も変化しています。これにより、これまで想定されなかった火災が起こりうる可能性が懸念され、実態解明が急務とされています。

その一例として近年、地球温暖化抑制や地域経済の活性化などの観点から、都市の不燃化を推し進めてきた1950年代とは打って変わり、建築物への木材の積極的利用が期待されています。

大宮研究室では、スプリンクラー設備などの散水設備や木材の難燃化などの手法に着目し、木材の積極的利用に資する研究も精力的に行ない建築物の性能的火災安全設計法の充実を図っています。

建築材料学的視点で建築を見よう!

兼松学研究室
［建築構造･材料］

Kanematsu Lab.
Building Material Engineering

Manabu Kenematsu,
Associate Professor
2016- Professor

① 2015 年度集合写真
② Bae Sungchul 助教ゼミ（熱が入ります）
③恒例 軍艦島調査

日本の高度成長の原動力となった建物は、現在その多くが維持更新の時期を迎えつつあり、いかにそれらをメンテナンスし耐久性を高め、かつ環境に配慮しながら維持再生していくかが大きな課題となっています。兼松研究室では建築物の耐久性評価技術や、その維持管理技術の開発に加え、21世紀の大きなテーマである建築物の環境側面に関する問題について、建築材料学的視点から研究しています。とくに、2014年度から新たにBae助教が加わり、最先端のセメント化学研究をスタートするとともに、中性子を用いた火災下におけるコンクリート爆裂現象の解明実験や、軍艦島や国立競技場といった近現代RC造建築物の耐久性調査などの研究などを実施しました。ナノスケールの最先端の材料科学研究から実構造物調査まで、マルチスケールの研究にチャレンジすることで幅広い視点を養います。

2015年度の研究テーマ
- 建築物･超高層建築物の維持管理に関する研究
- 既存構造物の評価（軍艦島･国立競技場など）
- 環境対応コンクリートの開発
- 放射光利用技術の建築分野への応用

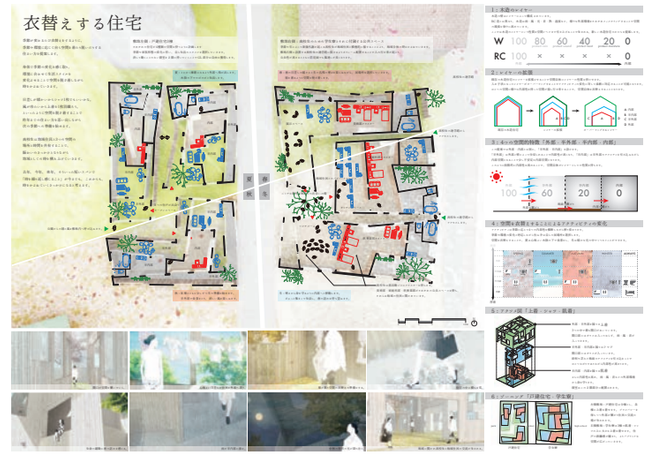
学生デザインコンペティション入賞者一覧（2015 年 4 月～ 2016 年 3 月）

コンペ名と受賞	入賞者氏名	作品タイトル
◎審査員（敬称略）		
第 3 回ヒューリック学生アイデアコンペ　佳作	遠藤優斗　日野雄介　大村高広	Collection of Atmospheres
◎隈研吾　伊香賀俊治　亀井忠夫　根本祐二　畠中克弘　西浦三郎		
キルコス国際建築設計コンペティション 2015　銅賞	日野雄介	ずれ壁の家
◎五十嵐淳　五十嵐太郎　北川啓介　工藤国雄　倉方俊輔　郡裕美　近藤哲雄　佐野吉彦　篠原聡子　竹山聖　能作文徳　布野修司　前田茂樹　みかんぐみ　安井秀夫　山崎亮　山下保博　吉村靖孝　米澤隆		
南三陸町 復興の橋 デザインコンペ　優秀賞（同率一位）	堀越一希	15,900
◎隈研吾　新谷眞人　平野勝也　原田真宏　佐藤仁		
第 2 回 POLUS ーポラスー学生・建築デザインコンペティション 最優秀賞	村松佑樹　山本大地	衣替えする住宅
◎青木淳　今井公太郎　前田圭介　乾久美子　百瀬修		
[東京メトロ銀座線] 銀座駅デザインコンペ　奨励賞	國分元太	地下の空模様
◎入江健二　紺野 登　松下美紀　内田繁　谷澤信一　他 15 名（東京地下鉄株式会社）		
第 11 回ダイワハウスコンペティション　佳作	齋藤直紀　大村高広	environmental node
◎小嶋一浩　堀部安嗣　平田晃久　西村達志		
住空間 eco デザインコンペティション REAL SIZE THINKING 2015　曽我部昌史賞	齋藤直紀　西田幸平　林山赳大	”はなれ“てちかづく
◎伊久哲夫　【関東部会】曽我部昌史　田淵諭　手塚由比　柏木博　松尾昭則　小宮健司		
2015 年度支部共通事業 日本建築学会設計競技入選作品『もう一つのまち、もう一つの建築　支部入選	齋藤直紀	映画館がつなぐ町
◎石田敏明　岩田三千子　赤松佳珠子　竹内徹　三谷徹　鰺坂徹　横山天心		
第 9 回 JACS　全日本学生建築コンソーシアム 住宅設計コンペ 2015　佳作	林山赳大　森島英子　宮坂岳見	家族の家
◎吉田研介　高橋晶子　長谷川豪		
全国合同卒制展「卒、16」28 日審査会　千葉学賞	丸山良太	HOTEL SHINJUKU
◎千葉学　西田司　鍋島千恵		
全国合同卒制展「卒、16」　26 日、28 日審査会　最優秀賞	山口薫平	道後湯神前冠山湯浴郷
◎西沢大良　佐藤光彦　五十嵐淳		
全国合同卒制展「卒、16」　28 日審査会　最優秀賞	山口薫平	道後湯神前冠山湯浴郷
◎千葉学　西田司　鍋島千恵		
第 28 回　千葉建築学生賞　優秀賞	山口薫平	道後湯神前冠山湯浴郷
◎神成健　中野正也　鳴海雅人　飯沼竹一　田端友康　小島広行　貞弘清英　皆川拓　関谷和則		
JIA 学生卒業設計コンクール 2016　二次ファイナリスト	山口薫平	道後湯神前冠山湯浴郷
◎青木淳　高橋昌子　竹内昌義　名和研二　原田真宏		
トウキョウ建築コレクション 2016　ファイナリスト	齋藤直紀	眼差しの写実
◎青木淳　内藤廣　長谷川逸子　福島加津也　連勇太朗		
第 14 回 JIA 関東甲信越支部 大学院修士設計展 2016　優秀賞	齋藤直紀	眼差しの写実
◎富永譲		
赤レンガ卒業設計展　ファイナリスト	小室龍昭	余白な建築　- その余白は風景を吸い込む -
◎北山恒　猪熊純　加茂紀和子　田中元子　鍋島千恵　前田圭介　松田達		
第 16 回卒業設計コンクール展　優秀賞	小室龍昭	余白な建築　- その余白は風景を吸い込む -
◎参加校から各校の教員、埼玉県、さいたま市、埼玉新聞、大手建設業 、日本建築学会埼玉支所、埼玉建築士会、埼玉県建築士事務所協会、日本建築家協会埼玉地域会、埼玉県建設産業団体連合会、さいたま住宅検査センター、埼玉建築設計監理協会賛助会員 、埼玉建築設計監理協会代表者		
TOKYO DESIGN WEEK 2015 第 3 回 ASIA AWARDS　学校作品展	江間匠太　高瀬結維 志波友樹　稲葉修也	nobi-nobi
◎田淵諭　岩岡竜夫　地主広明　中山定雄　原寛道　平野雄介　廣瀬大祐　細田彰一　本多忠房　松本宏行　森野晶人　深谷信介　今村 有策　菱川 勢一		
第三回東京理科大学合同卒業設計展　一般投票 1 位	中村遙	浦賀再開港　～まちに響く汽笛～
◎来場した市民		
第 2 回リノベーションデザインコンテスト　入賞	河鰭公晃　和田将大	一滴の雨から
◎矢作昌生　秋澤昭一　関美穂		
2016 年 第 8 回 C リーグ（3 年生合同課題講評会）　最優秀賞 **高橋堅賞**	酒井健太郎 植松里緒	余白で育つ色 森道で学ぶ
◎元倉真琴　古市徹雄　神成健　高橋堅		
クリエイティブチャンスメーク　Vol.2　最優秀賞	森知史	-
◎中島春喜　時枝直満　橋本夕紀夫　村角千亜希		
第 1 回修士課程学生プロポーザル・デザイン・コンペティション 特別賞	小田健人　柳橋大志　栗田恵 末富亮　本田美保	LIFE ～リンクする新宿グリーンポケット～
◎古谷誠章　西沢立衛　五十嵐太郎　木下庸子　今村雅樹　千葉学　赤松佳珠子　岸隆司　松田達		
第５回　子どものまち・いえワークショップ提案コンペ　優秀賞	栗田恵　鈴木俊　鈴木宗一郎 高瀬結維　原百合子 村松かなえ　柳原仁	まちおとハンティング
◎藤森照信　植田実　中津秀之　金田充弘　宮元三恵		

第2回POLUSーポラスー学生･建築デザインコンペティション　最優秀賞

村松佑樹　山本大地

衣替えする住宅

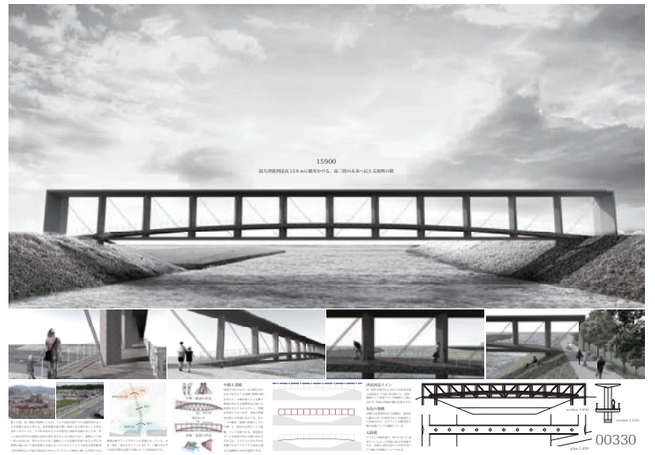


●審査員
青木淳／今井公太郎／前田圭介／乾久美子／百瀬修

南三陸町 復興の橋 デザインコンペ　優秀賞(同率一位)

堀越一希

15,900



●審査委員
隈研吾／新谷眞人／平野勝也／原田真宏／佐藤仁

[東京メトロ銀座線]銀座駅デザインコンペ　奨励賞

國分元太

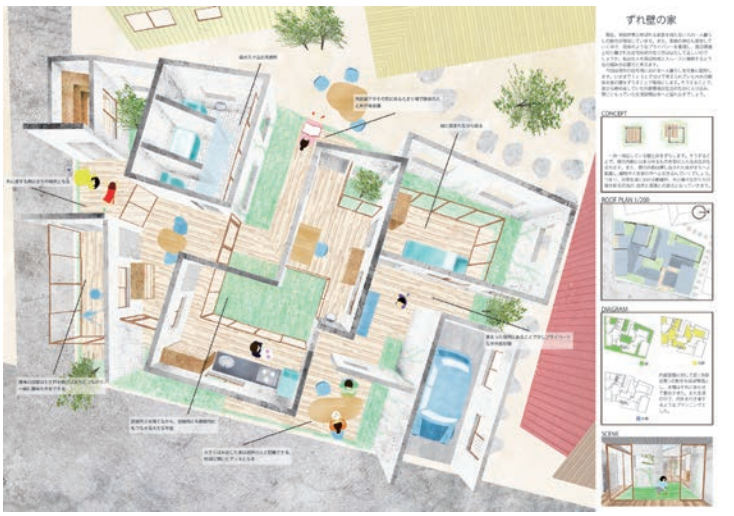
地下の空模様

●審査員
入江健二／紺野 登／松下美紀／内田繁／谷澤信一／
他 15 名（東京地下鉄）

キルコス国際建築設計コンペティション2015　銅賞

日野雄介

ずれ壁の家



●審査員
五十嵐淳／五十嵐太郎／北川啓介／工藤国雄／倉方俊輔／郡裕美／近藤哲雄／佐野吉彦／篠原聡子／竹山聖／能作文徳／布野修司／前田茂樹／みかんぐみ／安井秀夫／山崎亮／山下保博／吉村靖孝／米澤隆

第3回ヒューリック学生アイデアコンペ　佳作

遠藤優斗　日野雄介　大村高広

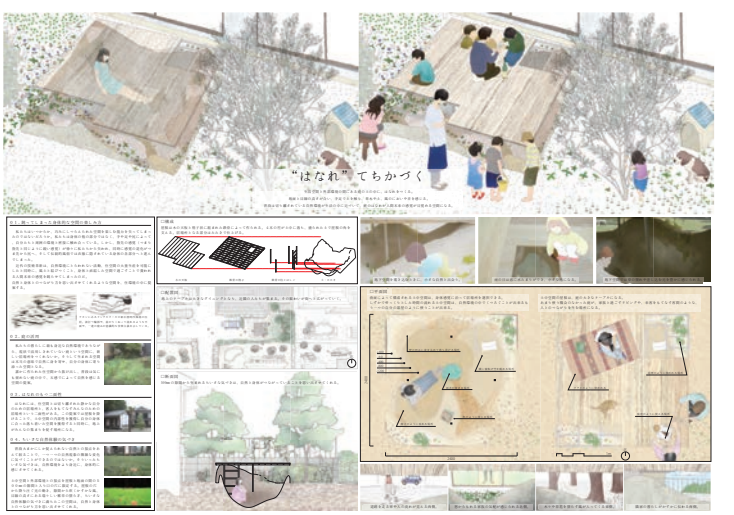
Collection of Atmospheres

●審査員
隈研吾／伊香賀俊治／亀井忠夫／根本祐二／畠中克弘／西浦三郎

第9回JACS　全日本学生建築コンソーシアム　住宅設計コンペ2015　佳作

齋藤直紀　西田幸平　林山赳大

“はなれ”てちかづく



●審査員
伊久哲夫【関東部会】曽我部昌史／田淵諭／手塚由比／柏木博／松尾昭則／小宮健司